ぼっちのヒーローアカデミア

江波界司

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

比企谷八幡がもしもヒロアカの世界にいたら。

何番煎じか分からないクロスオーバーです。

ヒッキーの個性は某ハンター漫画から抜粋しました。そっちの方は原作読んでなくても楽しめるかと思います。

あと、作者はヒロアカアニメ勢です。

目次

入学試験編
やはり俺のアカデミアはまちがっている。 1
やはり俺のオリジンはまちがっている。 14
やはり俺の編入試験はまちがっている。 28
やはり俺のクラスはまちがっている。 46
やはり俺の戦闘訓練はまちがっている。 59
やはり俺のスタイルはまちがっている。 73
やはり俺の日常はまちがっている。 89
USJ襲撃編
やはり俺の個性はまちがっている。 102
やはり俺のやり方はまちがっている。 116
やはり俺の戦いはまちがっている。 127
やはり俺の目標はまちがっている。 144
体育祭編

やはり俺の体育祭はまちがっている。 163
やはり俺の武器はまちがっている。 175
やはり俺の戦法はまちがっている。 188
やはり俺の決着はまちがっている。 201
職場体験・改編
ネーム 218
選択 231
理解者 247

入学試験編

やはり俺のアカデミアはまちがっている。

俺はヴィランという存在に否定的ではない。
もしもヴィランがいなければ、ヒーローは存在できないだろう。
むしろ俺はヒーローが存在悪だとすら思う。
ヒーローは常に誰かを助ける。だがそれは、あくまでも一個人からの視点に過ぎない。
ヒーローが誰かを助けるのは、結局のところ自己の存在証明でしかない。自分の個性を使って誰かを助けて、救って、人に社会に貢献する。
そうすることで、自らを肯定しているだけではないかと俺は思う。
平和の象徴、オールマイト。
日本で、いや世界で彼の名を知らぬ者はいないだろう。
世界最強のナチュラルボーンヒーロー。
強個性至上主義の現代で、ヴィラン犯罪の強力な抑止力となっている彼は、確かに平和の象徴であり、最高のヒーローだ。

だが、俺はヒーローを信じられない。
実力は知っている。功績も認める。こんな思いは筋違いだと理解もしている。
それでも俺は、たった一人の少女も守れないヒーローになど、なりたくはない。

私（わたくし）、比企谷八幡も今や高校生です。
はい、普通科です。一般的な普通の高校です。
当たり前だろ。ヒーロー向きじゃねえんだよ、俺の個性。
というか、これが原因でどれだけいじめられたか。不幸だ。
どうせ不幸なら全異能無力化くらいぶっ壊れの個性か右手をくれよ。割に合わねぇから。
……まぁ、個性云々がなくても、ヒーローにはならなかっただろうけど。
ピカピカの一年生（１５歳）らしくチャリを漕ぎ、登校ルートをひた走る。
まだ全く通い慣れていない道の最中、コンビニが爆発した。うん、爆発した。大事な事なので二回言いました。
なんならと三回目を言おうとした時、割れたガラスを踏みながら大男が硝煙の中から

出てきた。男の手にはどういう訳かレジスターと、泣きじゃくる女の子があった。ランドセルを背負っているあたり、登校中に巻き込まれたのか。

これはヴィランというやつだ。

現代は『個性』と呼ばれるものを持って生まれる超人社会である。そんな中には、法律的や社会的に使うことすら禁止されかねない個性もある。

だからこうして、個性を持て余した者が時折悪さをするのだ。

そして、敵(ヴィラン)がいるのなら英雄(ヒーロー)がいるのもまた道理。

「わ～た～し～がぁ～、来たぁっ!!!」

上空から突如、パッツパツのスーツを着た金髪のマッチョが降り立った。

「オールマイトだ!」

「うおぉぉぉ!」

「オールマイト～!」

文字通りのヒーローの登場に、足を止めていた住民が騒ぐ。

彼は平和の象徴と呼ばれる、Ｎｏ．１ヒーローなのだ。

「さて、大人しくその娘を解放してくれるかな?」

臨戦態勢を取りながら、オールマイトは一応の交渉をとる。

「ハッ、誰が離すかよ!てめぇこそ変な動きすんじゃねえぞゴラァ」

口を塞ぐようにしながら左の脇に少女を抱えるヴィランは、レジスターを持った右手を突き出す。
するとレジスターはジュウジュウと音を立てながら形を変形させていく。
多分だが、手のひらから高熱を出す類の個性なんだろう。
溶けだしたレジスターを目にし、顔を手で覆われている少女は涙を浮かべた。
さすがに、これはまずい。
どれだけオールマイトが強くても、個性を一切発動させずに少女を無傷で救出するのは不可能ではないか。
たとえ一瞬だろうと鉄を融解させる程の高熱に顔を晒せば……。
何より、少女のあの怯えた表情が――妹と重なった。
「分かったらさっさと道を開けやがれ！」
ヴィランが騒ぐ一方で、俺は息を大きく吸い込んで、止める。
自転車から降りて、ゆっくりヴィランがいるところまで進む。
ヴィランは大男だ。腕もがっちりとしていて、レジスターを片手で持てるくらいには力もある。
だが、油断しているならばそれは論外だ。
俺は気付かれることなくヴィランの左側に回り込むと、少女を掴んでいる左手に自分

の左手を添える。
そのまま右手で少女の体を支えながら、思いきりヴィランの左手を引いた。
人は想定外の事に弱い。
左手が外れたことで、ホールドされていた少女は俺の右手に乗ることになる。
が、流石に重い。小学生とはいえ人一人を片腕で支えられるほど俺はマッチョでもオールマイトでもない。
落下の衝撃を抑える程度には抵抗しながら、少女を地面に落とした。
あとはいいだろう。
急いで右手を少女の下から引っこ抜くと、できるだけ体力を使わないように歩いて路地に入った。
「スウマァッシュ!」
ヒーローの叫び声と衝撃音が、商店街に鳴り響いた。

「はぁ、はぁ……」
ようやく取り込んだ酸素は美味い。
３０秒もないほどだが息を止めていたのだ。少しずつ呼吸を整えながら、俺はスマホを取り出そうとポケットに手を突っ込む。
「やあ、少年」
聞き覚えのある、ついさっき聞いた気のする声に思わず体が強ばった。
声の方を見るとそこには案の定、彼がいた。
「オールマイト……」
「ハッハッ、私が、来た！」
お決まりなのか、それ。さっきも聞いたし。
俺は彼を無言で睨む。
うん、だってこの状況はまずい。
男子高校生が、薄暗い路地で、息を荒立てながら、ポケットに手を入れている。
やべぇ、通報される。それもヒーローの中のヒーローに。
「まあ、そんな硬くなるなよ。お礼を言いに来たんだ、少年」

そんな杞憂が伝わったのか、オールマイトは笑顔で言う。この人基本ずっと笑顔だけど。

「君のおかげで助かった。ありがとう」

「は、はぁ、そうすか。なんのことか分かりませんけど」

あくまで知らぬ存ぜぬで通す。それができるのだ。俺はそういう『個性』を持っている。

「恍けることはないさ。君だろ？さっき、少女を助けたのは」

「なんのことやら、さっぱり分かりませんね」

「さっきあるヴィランを倒したんたが、その事件現場の近くに自転車が放置されていた。その自転車に貼ってあったステッカー、君の高校と一致するんだよね」

俺を、というか俺の制服を指さしながら彼は言う。

なるほど、状況証拠は揃ってる。なんならすぐに警察が来て特定されるだろう。

仕方ない。

「あー、置きっぱにしてましたね、そういえば」

「じゃ、改めて礼を言おう。ありがとう、少年」

俺がやったと認めたと解釈したのか、オールマイトはそう手を差し出す。

適当に対応しようと「うす」と俺も手を伸ばす。

「けど、こういう危ないことは、もうしないでくれよ？」
けれど、その手が触れることはなかった。
止めてしまった手を引っ込めながら、俺はため息をつく。
いい機会だと思ったのだろうか。魔が差しただけだろうか。オールマイトが相手だからだろうか。
分からないが、俺は口を開いていた。
「じゃあそれは、救える人を救うなってことですか」
多分、俺は相当酷い目をしていたと思う。
オールマイトは、一瞬間を置くと茶化すような素振りを見せる。
そのことが気に食わない。
「いや――」
「あなたは最高のヒーローだ。俺も、憧れてました」
過去の話だ。
幼い頃、俺はヒーローに、オールマイトに憧れていた。
けど個性が弱くて、諦めた。が、それだけではない。
俺は失望したのだ。
無力な自分に、そしてヒーローに。

「俺はあなたに助けを求めた。あなたは、来た。そして救った。俺を、俺達を」
そんな経験、彼には山ほどあるだろう。
俺はその中の一つの例で、大したものじゃない。
でも俺にとっては、妹にとっては違うのだ。
「ヒーローは遅れてやって来る。仕方ないです。事件の方が先におきるんですから」
ヒーローが遅いのではない。ヒーローが悪いのではないのだ。
「事件を解決するのはヒーローだ。そのために個性を使う」
ヒーローとは、個性を誰かを守るために使うことを許された存在だ。
「けど、もしそれなら、ヒーローじゃない俺は個性を使っちゃいけないんですか」
ガキの頃、俺は本気でヒーローを目指していた。そのためにできそうなことを必死でやった。
そして見つけてしまった。ある法律を。
ヒーロー免許無しに個性を使ってはならない。
もちろん細かな注意書きはあるが、それでも俺は、もう手遅れだった。
「許可のない個性は、全部悪ですか。全員敵(ヴィラン)ですか」
俺はヒーローじゃない。
俺はヴィランかもしれない。

いや、ヴィランなのだろう。
ヴィランだ。
そう思えてしまう。考えてしまう。
否、そうなのだ。
ヒーローには許可がいる。そしてルールがある。
ルールは守るもので、大事なもので、絶対的なものだ。
だが、絶対的であってはならないものでもある。
俺は積極的にルールを破って暴れたい訳ではない。そういう意味じゃ一般的なヴィランの定義からは外れると思う。
問題は、未曾有の事態に追い込まれた場合だ。
本当に異常で、非常で、天変地異なできごとが起きた時、そこにルールは絶対性を保って居られるだろうか。
断じて否だろう。
歴史を見ても、一体どれだけの反逆と反抗が繰り返されてきたか。その度に、ルールは絶対性を失っている。
現代のヒーローのルールは、個性の私的使用は度が過ぎれば犯罪となる。
他人を傷付けるのは正しくその度が過ぎた分類だ。

もしも、もしも仮に、小町に何かあったとしたら。
俺は間違いなく、迷いなく、躊躇いなく個性を使うだろう。
そしてその行いは、ヒーローと呼ぶにはあまりにも私欲に満ちている。
だから。
だから俺は、ヒーローになれない。
「……少年」
オールマイトは、静かに応える。
「私は、君の行いを褒めることはできない。たとえ正しい目的の為でも、その行いが正しいとは限らないんだ」
当然の否定。
そうだろうと、俯きかけた時。
「けどね、私は君の行いを尊敬する」
どうしようもなく、驚いた。
お世辞だろとか、口だけだろとか思う前に、彼が本心から言っていると感じたからだ。
「君はあの娘を助ける為に個性を使った。私よりも先に、彼女を救った。君は正しいことをしたし、あの瞬間、きっと誰も君を見ていないだろうけれど、君は間違いなくあの場で誰よりもヒーローだった」

平和の象徴が、最高のヒーローがそう言った。
あんたよりすげえヒーローはいないだろ。
「だから、きっと君は良いヒーローになれる。今日のことは私と君だけの秘密にしよう」
ありがとう、と言うべきなのだろう。
けれど言えない。それを言ったら、俺は結局ヴィランのままなのだ。
「俺は、無許可で個性を使いました。過去にも。それはもう、ヴィランでしょう」
ルールの守れぬ者が誰を、何を守れるというのか。
「君は、相当ひねくれてるなぁ」
仕方ないなぁと言うように、オールマイトは胸ポケットからメモ帳を取り出すと、何かを書いてページを切り離した。
「どうやら君は自分を許せないタイプと見た。だから、どうしても許せないなら、放課後ここに来てくれ」
簡易的な地図を渡すと、オールマイトは踵を返す。
「じゃ、私も出勤しないといけないんでね」
俺から数歩な離れると、彼はどこかへ飛んでいった。うん、飛んでいった。あの人、ホントに人間か？
しばらく立ち尽くしていると、頭が冷静になってきた。

そんで、死にたくなってきた。
俺はなんて恥ずかしいことを……、それもあのオールマイトに向かって。
叫びたい衝動を必死に抑えながら、どうにか精神状況を立て直す。
メモをポケットに入れ、反対の方からスマホを取り出した。
「は……遅刻だ」
オールマイト、許すまじ。

やはり俺のオリジンはまちがっている。

俺の家族は、過去にヴィランに襲われている。
その際俺は、怯える妹を守ろうと個性を使った。
とは言っても当時小学生三年生。いい歳して暴れたい盛りの大人に勝てるわけもない。
結局、駆け付けたオールマイトの活躍で難を逃れた。
事件の後、俺は一躍ヒーローに……はならなかった。
まぁ俺が人気者になるわけないわな。普段からヴィランだのやべぇ個性だの言われてたわけだし。
それとは別に、考えなければならないことがある。
俺は個性を使った。子供だからと言ってしまえばそれまでだろう。
けれど、それでも俺はルールを破った。
ヒーローになりたいクセに、ヒーローが守るべきルールすら守れなかった。
俺はその時、自分がヴィランと同じだと感じた。
更に救いようがないことなんだが。

今となれば、俺はヒーローのルール自体にすら疑問を持っている。反社会的勢力になるのも夢じゃないなこれ。

まぁさすがに、こういう事を表立って言ったりはしないがな。どっちにしろ、もう俺はヒーローにはなれないし。

妹の小町（こまち）は、今も元気に中学校生活に勤しんでいる。中学二年とか一番楽しい時期だろうな。

あの時以来、ルールを破った俺に、気にしすぎとよく言っていた。

違うのだ。

俺はただ、許せなかっただけなのだ。

ルールを守れなかった自分も、妹を守れなかった自分も。

放課後。
指定された海沿いの公園に、俺は足を運んだ。
そこには一人、夕日に向かって仁王立ちする金髪のマッチョがいた。
「やぁ、待っていたぞ少年」
「……どうも」
やはり来たかと言うように、振り向くオールマイトは笑顔だった。この人、作画違うんだよなぁ。
「で、何をする気ですか」
「そのまえに。知ってるか?ここ一帯には、不法投棄されたゴミが水平線を隠していたんだ」
何の話だ。
「それをある一人の少年が全て片付けた。その少年は、ヒーローに憧れていたからだ」
何の英雄譚だ。
「それが、あなただと」
「いいや、違う。その少年は、ただのヒーローオタクさ」
何の武勇伝だ。
「でね。彼は弱かったんだ。それで、それでもヒーローになりたかった。だから彼は努

力したんだ。必死に、無力でも無駄だと思っても必死にね」
何が言いたいのかさっぱり分からない。
日本一豪華な説教をこの先も聞こうか迷っていると、オールマイトは俺の肩に手置く。
「そして彼は、誰よりもヒーローだった」
今日、つい今朝、同じセリフを聞いた。
「だから私は、言ったんだ。彼に、君はヒーローになれると」
ようやく、言いたいことが分かった。
今朝の言葉と、今聞いた話。どちらにも言えること。
彼はヒーローを求めている。最高のヒーローは、更なるヒーローを欲しているのだ。
「君に感じたんだ。ヒーローとしての素質を。だから、私に応援させてくれないか」
そう言って、彼は一枚の紙を差し出す。
それはメモ切れではなく、正式な用紙だった。
「編入、届……」
「雄英に来ないか、少年っ！」
力強く、そして優しく肩が握られる。
こんなにも、ありえないくらいにありがたい申し出があるだろうか。

あのオールマイトが、平和の象徴が、俺はヒーローになれると言ったのだ。
こんなにも光栄なことがあるだろうか。
しかし。
けれど。
だけど。
でも。
否定の言葉は、消えてくれない。
「……俺は、俺のやって来たことは、考え方は、ヴィランと変わらないんですよ」
「だからなんだよ」
「はぁ……？」
オールマイトは、笑顔で言う。
「君はまだ、ヴィランでもヒーローでもない。決めるのは自分さ。だから決めちまえよ。誰かが君をヴィランにするより先に――君が、最高のヒーローだってさ」
確かに、結局のところ世間は俺をヴィランと呼んではいない。
あくまでも子供の判断だと、必死に生きようとした結果だと。
その本質は違えど、まだ定義はされていないか。

だが。
だが、人は簡単には変われない。
もしも変わったというのなら、それはその程度のものでしかない、自分と呼ぶにはあまりにも薄いものなのだろう。
本当の自分とか、アイデンティティとか、そんな仮称の話はどうでもよくて。
本当に重要なのは変わることではなく、変わらない自分を肯定することなのだと思う。
それは過去を肯定することだ。
過去の成功を、失敗を、栄光を、挫折を、行動を、発言を、その全てを認める行為だ。
どれほど難しいか、俺はよく知っている。
結局、俺は一度も、あの時の自分を肯定できなかった。
それはこの世界が、ヒーローという存在が、どうしようもなく俺とは相容れない考えでできていたからだ。
俺はあの時から何も変わっていない。変わるはずのない何かを抱えながら生きている。
もう子供だからと、必死だからと許されることはない。
俺のその考え方は、あり方は、生き方は、ヴィランそのもの。

どうしようもなく、ヒーローとは呼べない。
けれどもし、もし仮に、俺がヒーローなら。
敵（ヴィラン）ではなく、英雄（ヒーロー）なら。ヒーローになれるのなら。その考え方すら変えて、自らをヒーローと定義できるのなら。
あの時の自分を許せるだろうか。
多分、それはできない。俺はこれからずっと、どこかで自分を責めながら生きていくのだと思う。
守れなかった自分自身を。
だから、だからせめて、そんな俺にも一つだけ願ってもいいのなら。こんな俺でも、願うことが許されるなら。
守れる力が欲しい。今度こそ、妹を守れる力が。
その為になら、ヒーローにもヴィランにも、何者にだろうと俺はなろう。
俺は、紙を受け取った。

「全く、いきなり話が飛んでるね、オールマイト」
「いやはや、迷惑をかけます。校長」
「いいさ。君の判断だ。何か思うところがあったんだろう？」
「はい。彼は、脆い。いつかどこかで自分を見失い、道を踏み外してしまうかもしれない。まだそうなっていないのは、彼が強いからでしょう」
「硬いダイヤは砕けやすい、か」
「私にできることは、これくらいしかありませんでした」
「受け取ってはくれたんだろう？」
「ですが、受けるか、そして受かるかは彼次第……」
「信じてあげなよ。君が見込んだ男だろう？」
「……はい」

というわけで、俺は高校生になって一週間もしない内に編入試験を受けることになった。

急展開過ぎてオリエントで特急にでも乗った気分だぜ。誰か死んじゃう!?

緊張した面持ちで、俺は事前に送られたコネを使って校舎に入った。

「やあ、待っていたよ。比企谷八幡くんだね？」

「あ、はい」

ネズミがいた。

しかも明らかにネズミにサイズじゃないし、喋ってる。ここはもしかしたら夢の国かもしれない。

「ボクは校長の根津（ねず）、よろしくね」

「う、うす」

さすが雄英。出会い頭にラビットパンチ食らったわ。それ反則じゃん。

いや高校に入ってまずネズミと遭遇するのは普通に反則でしょ。

「いきなりで悪いけど、編入試験を行うから動きやすい服装に着替えてくれるかな」

そう言われて更衣室に案内され、俺はまだそんなに着ていない学校指定のジャージに

着替える。一応、貴重品くらいは持っててていいよね。
再度ネズミ校長が現れ、俺は運動場らしき所に案内された。
「さて、さっそく編入試験をしていくんだけど」
校長の説明の前に、ここにいるメンツが紹介された。
試験官である先生は三人。
超変態的格好の女性教師、ヒーロー名ミッドナイト。
ゴリゴリの銀髪マッチョ、ヒーロー名ブラドキング。
黒い服にボサボサの黒髪、ヒーロー名イレイザーヘッド。
全員、プロのヒーローである。
なんつーか、個性的だな、うん。キャラが強い。
「君にはこの3人のうちの誰かを一人と戦闘をしてもらう」
「は？」
まさかの殺し合い宣言。雄英高校は夢の国じゃなくて監禁ゲーム部屋だった。
「いや戦闘って、勝てるわけないでしょ」
「戦闘、といっても試験は試験さ。実技の方だけどね」
「だから無理でしょって」
「別に勝つ必要はないわ」

俺の校長への抗議に、ミッドナイトが割って入った。
「ただ実力を見せて欲しいだけ。試験だもの」
「お、おす」
「もちろんこちらも手加減はする。が、本気でかかって来て問題ない」
ブラドキングがそう続けた。
となるとこの人からも一言あるのかな、と目をやる。
「……なんだ」
「いえ、なんでもないです」
睨まれた。
「さっそく始めようか。比企谷くん。一人、好きな先生を指名するといい」
相手が選べるのか。
といっても、あんまし変わんない気がする。
俺は相手の個性が分からないし、逆にあっちは対策する用意があるかもしれないし。
となると……。
「じゃあ、イレイザーヘッドさんで」
「……分かった」
そう言って、イレイザーヘッドは目薬を差すと、ヒーローとしてのアイテムなのか格

子状のアイマスクを取り出した。
「それじゃあ準備しようか」
校長の言葉と共に、俺は立ち位置へと移動した。
イレイザーヘッドは数メートル先。特に何をするでもなく立っている。
俺は、一応準備運動くらいはしておこう。
「ルールを確認するわ。まず、個性の使用は自由。敷地内だから思いっ切りやりなさい。それから急所への攻撃は禁止。目とか喉とかね。それ以外はなんでもあり！存分に暴れちゃっていいわよ！」
ウキウキと言わんばかりに説明するミッドナイト。この人、もしかして変態さん？
よし、と取り敢えず気合いだけは入れて相手を見る。どんな個性なんだろ、この人。
「始める前に、一ついいか？比企谷」
「え、あ、はい。なんですか」
アイマスクを上にズラしながら、イレイザーヘッドが問うた。
「お前、何故あの三人の内、俺を選んだ？」
正直に答えないと殺す、と目が言っている。やだ怖い、ここ本当に高校？あんた本当にヒーローですか？
「いや、えっと、女性と戦うのはちょっと……」

「ヴィランにだって女はいるぞ……。まぁ、試験ならベストを尽くしたいか。それで？」
「えっと、ですね……ブラドキングさんは、強そうだなと。筋肉モリモリですし」
「ほう、つまり――」
　スラリと伸びた腕が曲げられ、胸の辺りで手が組まれる。
「俺が一番、弱そうだったってことか」
　ポキポキと手を鳴らしながら、今になって準備運動を始めるイレイザーヘッド。
　いや、まぁ確かにそうは思いましたけど。けどまさか言えるわけないじゃん。言えとか言われると思わないじゃん。
「別にそういうことは……」
「さっき、ミッドナイトが言ってたルール、聞いてたな？」
「え、あ、はい」
「急所以外何でもあり、だそうだ」
「え……」
　いや、まさかね。
「ブラドは手加減、なんてこと言っていたが、そういう行為は面倒だ。合理的に行こう」
　一応ここは高校で、この人に至っては先生である以前にヒーローだし……。
「五体満足で帰れるといいなぁ？比企谷」

そこには男子高校生相手にマジギレするヒーローの姿があった。

ごめん、小町。お兄ちゃん、帰れないかも。

やはり俺の編入試験はまちがっている。

マジギレしているプロヒーロー、イレイザーヘッド。
誰だよ、この人選んじゃったの。俺です。
「それでは、いざ尋常に――始め！」
ミッドナイトが上げた手を振り下ろし、試合は始まる。
開幕と同時。
イレイザーヘッドが走ってくる。流石にやばい。速いよこの人。
とにかくガードしようと身構える。
攻撃は、モーションは速いが、大振りの回し蹴り。
脇腹を腕でガードする。しかしパワーがある。
ダメージを受けてよろめいた。
「……どうした。もうへばったか？」
追撃はなし。最初は様子見ということだろうか。
まずは下がり、息を整える。
大丈夫、そこまで痛くはなかった。悶絶しそうだけど、多分大丈夫。

分かってたことだが、スペックが違う。そもそも身体能力は負けているのだ。
正攻法じゃどうしようもない。
だから、『個性』を使おう。
深呼吸し、構える。
目指すは正面。一気に走り出す。
イレイザーヘッドは臨戦態勢に入る。恐らくまともな攻撃は通用しないだろう。
相手はプロ、個性による戦闘経験には大きな差がある。没個性なら有効打はまず無理だ。
だが、今回はそれが仇になる。
俺の個性は、破壊力も機動力も派手さもない。
むしろ――逆。
イレイザーヘッドの眼前で、俺は両手を鳴らす。
猫騙しである。
防御の体勢をとっていたイレイザーヘッドは、一瞬反応に遅れる。が、直ぐに理解して一歩引いた。追撃を避けるためだろう。
「なに……っ!?」
けど、あんたはもう俺を捉えられない。

拳を握り、足を踏み込み、腰を捻り、打ち出す。
なんの変哲もないパンチを、無防備なボディに叩き込んだ。
「ぐっ……」
鈍いうめき声と共に、イレイザーヘッドはしゃがみ込む。
俺はふぅと息を吐き出した。
いくらプロでも全く無防備なところに攻撃されてはどうしようもないだろ。
これが俺の個性『ステルス』。
自分への認識を限界まで無くせる。ただし呼吸を止めている間だけ。
「なるほど、今のがステルスか」
「凄い個性ね。目の前にいたのに、見失っちゃったわ」
壁の方で観戦しているブラドキングとミッドナイトが感想を言い合っている。
まぁ確かに、使いようによってはこうなる。けど……。
「で、それで終わりか？」
当然のようにイレイザーヘッドは立ち上がった。いくらノーガードだったと言っても一般人がワンパンはないわな。
さて、どうするか。正直この先どうにかできる気がしない。
というのも、俺の個性には大きな欠点がある。

「確かに初見は対応できなかった。が、それだけだ。消えると分かっているなら、それを踏まえて戦えばいい」

俺の個性は認識できなくすること。

つまり高速移動でもなければ攻撃通過でもない。

範囲攻撃にも束縛にも弱いし、なんなら異形型みたいなのが相手になったら詰む。

まぁこれが、俺がヒーローを諦めかけた理由だ。

俺の個性は隠密型であって、戦闘向きではない。ましてやそんなんでアピールとか、誰も見れねぇぞ。

「みなさんの反応を見るに、俺の個性は知ってたってことでいいんですかね」

とにかく考えろ。そのために、無駄話で時間を稼ぐ。

「そりゃ、資料くらいは貰っている。もっとも、これといった対策は用意していない」

「フェアプレイってやつですか」

「実力を見るだけならそれで十分だと判断した。が、今からでも対策はできそうだな」

言うと、イレイザーヘッドが突進してくる。作戦がバレたのか、単にブチ切れてるからなのか。

真っ向勝負じゃ話にならない。ここは、逃げるんだよ～スモーキー。

息を止めて相手の意識から消える。これでイレイザーヘッドは俺を追えない。

案の定、足を止めて警戒に入るイレイザー。といっても、俺から攻撃はまずできない。理由は二つ。

一つは不意を突けていないこと。さっきの攻撃で、不意打ちでも決定打にならないことは分かっている。それで警戒度ＭＡＸの相手にど突くとか愚策もいいところだ。

二つ目は、これが問題なのだが、俺の個性の本質がバレる恐れがあること。

俺の個性はあくまでも認識できなくすることであり、決して存在そのものを消すわけではない。さっきも言ったが、息を止めていても攻撃自体は当たるのだ。

今はまだだが、この事実がバレたらいよいよ俺にできることはなくなる。イレイザーの持ってるマフラーで拘束された時点で俺は行動不能になるからだ。

迂闊に近付けばバレかねない弱点。攻撃力は一般人で、持続時間もかなり短い。

ギャンブル依存症かってくらい博打なスキルだなおい。

「……攻撃しないところを見ると、相当追い込まれているらしいな、比企谷」

「さて、どうっすかね」

追い詰められてるよ。

結局俺は数メートル横に移動した時点で姿を現した。

「攻め手がない、だろ！」

返事を待たず、イレイザーは再び突進する。

やべえ、呼吸のタイミングが悪かった。
あがった息を整えることができず、俺は生身でイレイザーの攻撃を受けることになる。
打撃による肉弾戦。
純粋な近接戦はあちらに分があるため、俺は一方的に殴られ、蹴られ、追い詰められる。
背中に壁が近付いて来た。距離も取れないし、息も切れる。
個性の発動すらままならぬ猛攻に、俺は必死の思いで左方向に逃走を図る。
「遅い」
右の回し蹴り。
抵抗虚しく、俺は地面に倒れ込んだ。
「個性すら使っていない相手に、不意打ちで一発のみ……。いくら自分の個性が戦闘向きではないと言っても、そんなんでこの先ヒーローとしてやっていくのは、無理だ」
体に残った打撃の感触を消そうと抗っている俺に、イレイザーはそう突きつける。
俺は、ヒーローになれないと。
「オールマイトからの推薦だからこそ特別措置を取ったが、結局無駄な時間だったな。合理的じゃない。ここで降りるべきだ」

確かに、俺はここに来てから一度とて、自らの優位性を証明できていない。これではヒーロー科の試験を受ける資格すらない。

「まぁ、別に試験に落ちて何かを失う訳じゃない。今まで通り、普通に高校に通うんだな」

それは俺が自らに相応しいと思った道だ。

ヒーローにすらなれないのなら、いっその事適当に高校を卒業して、自分を守ってくれそうな人の下で専業主夫として生きる。ああ何と素晴らしいことか。

「……俺は」

だが――。

「俺は将来、専業主夫になりますよ」

「「え？」」

ギャラリーが困惑している。知るか。それだけは譲れない。

「俺は働く気は、ないです」

「……お前、なんでこれ受けた？」

「ですけどね……」

俺は働かない。絶対にだ。

だけどこれだけは、専業主夫という夢と同じくらい、それ以上に譲れないものがある。

「俺は、ヒーロー免許が欲しいんですよ」
「……」
「「え、えぇ……」」
イレイザーは、なんだコイツと言うような表情で。
他の三人は、ダメだろコイツと言うような表情で。
まぁそうっすよね、普通。うん、俺でもそんな顔をするわ。
それでも譲れないのなら仕方がない。譲れないし、曲げられないし、負けられない。
絶対に負けられない戦いがここにある。
「……一応、理由は聞こうか比企谷」
「ヒーロー免許があれば、個性が自由に使えますよね」
「……まぁ、それなりにはな」
「ヒーロー免許を持ってるだけで、結婚できる可能性も増えますよね」
「そう、なのか？俺は未婚だが……」
「つまり、一石二鳥なわけですよ」
「……」
「ヒーロー免許を取ることが、俺の夢の為に最も『合理的』なんですよ」
「お前……」

いつも間にか俺は立ち上がり、胸を張って言い放っていた。
「俺は専業主夫になる為に、ヒーローを目指します」
誰もが思い、もはや口にするだろう。
何言ってんだこいつ、と。
大丈夫だ問題ない、ノープロブレムだ。
たとえ矛盾しようと狂っていようと、俺の目標はもう変わらない。
「オールマイトに貰ったチャンスは、必ず掴むつもりです」
俺は、夢の為に走り続ける。できるペースで。
「お前、まさか……」
ありえない宣言に、イレイザーはたじろぐ。どうやら俺の完全無欠（パーフェクト・ロジック）の論法に驚いているようだ。
「お前まさか……それを本気で言ってるんじゃないだろうな？」
「え、本気ですけど」
即答した。
「そうか」
何か思うところがあったのか、イレイザーはため息を吐くと、今まで上に上げていたアイマスクを下ろす。え、なんで？

「お前がヒーローを舐め腐っていることはよーく分かった」
「ん？」
「お前みたいなガキには、一度本気で教えてやるべきだ。――ヒーローってのは甘くないと」
「は……」
明らかにイレイザーの雰囲気が変わった。
まるで気合いに連動するかの如く髪がふわりと立ち上がり、イレイザーは拳を握る。
俺は危険を感じて咄嗟に息を止めるが、個性が発動しない――？
状況判断すらできないまま、俺はイレイザーから腹部を殴られた。
ぐっ……と呻き声を上げる。
すぐさま、仰け反った顎を肘鉄で打ち上げられた。
そこからは倒れることすら許されぬように、腕や足の多種多様な攻撃が俺を襲った。
「ちょっ……イレイザー？あれ本気じゃないですか？」
「さすがにこれは……校長」
「いや、ここは彼に任せよう」
任せちゃダメでしょ。
文句すら言う暇もなく、俺は再び地面に倒された。

痛てぇ。最初の攻撃がいかに手加減されていたか身にしみてわかった。
つか、やっぱこの人俺のこと嫌いだろ。分かってたことだけども。
「まだ、立つか？」
俺はよろよろと、体を支えながら立ち上がる。
怪我の功名というか、一つだけ分かった。
イレイザーの個性は、『相手の個性を使えなくする』ということ。
まぁそれだけなんだけどね。むしろだからなんだって話だし、余計に勝ち筋がなくなった気すらしてきたんだが。
「聞いといて何だが、お前が立つ理由がどこにある？」
まるで諭すように、彼は問うた。
「聞いた限り、お前は最高のヒーローになりたいわけでも、ヒーローとして活動したいわけでもない。ただ楽をしたいそれだけの意思で、何故立ち上がる？」
なるほど、当然の疑問だ。
俺の目標も動機も、周りから見れば不純なものだろう。ましてここはヒーローの名門校。ヒーローを目指す者として入学するには、俺の目標はあまりにも歪だ。
だが、それは俺が夢を諦める理由にはならない。俺が折れる理由にはなりえない。
「俺は、ヒーロー免許が欲しいんですよ。欲しくなったんですよ、あの時、オールマイト

に言われて」
オールマイトに責任を押し付ける気はない。そもそもあの人に責任はないのだ。
あるのは全て、俺一人。
ヒーローを目指すのも、専業主夫を目指すのも、雄英高校を目指すのも全て、俺の意思であり、目標だ。
だから――。
「不純でも不当でも、たとえ誰一人俺をヒーローと呼ばなくても、俺は俺の夢の為に戦います」
「……」
イレイザーは何も言わない。そして何もしない。
分かっている、これが最後だ。
彼は俺に最後のチャンスをくれたのだ。
俺は、それに応えるつもりはない。
チャンスなど、もう既に貰っているのだから。
俺は気付かれないように伸ばしていた手をポケットの中で握る。その中には、試験前に入れていたものがあった。
息を止めて、手を引き抜くと、フルスイングでそれを投擲する。

想像だにしない攻撃に反応は遅れる。
構えていたイレイザーは、俺が投げた物を顔面で受けることになった。
「……財布だと」
威力はそこまでない。
当たったものを確認している隙に、俺はイレイザーを中心に反時計回りに移動する。
一度個性を解き、大きく吐いて、大きく吸い込む。
1秒間のリロードで、イレイザーは俺の位置を特定した。
そんな事などお構いなしに、俺は投擲する。
俺の手から離れ、イレイザーに到達するまでの間に、俺のスマホは認識できる。
イレイザーは難なく俺のスマホを片手で受け止めた。
「躊躇いなくスマホを投げる辺り、取られるのは計算の内か……」
既に意識外にいる俺は、全速力でイレイザーに接近する。
そして、こちらを向いている彼に正面から突進。
もちろん俺の全力タックルで与えられるダメージなどタカが知れている。精々体勢を崩して押し倒すくらいだ。
だが、その先はどうだろうか。
俺のタックルで、予想通りイレイザーは背中を地面に付けることになった。

もちろん相手はプロだ。ここからの反撃など難しくはないだろう。

「……考えたな、比企谷」

俺が息を吐き出したと同時、イレイザーは賞賛を送った。

今、彼には俺が見えていないだろう。それは個性によるものではなく、物理的に。

「自分のジャージで俺の視界を塞ぐとはな」

そう、俺はイレイザーに突進する際に、着ていたジャージを脱いで両手に持っていた。

あとはそのまま、不可視の上着をタックルと同時に頭から被せる。

これで視界の制限と拘束を同時に行えるのだ。

「あんたの個性は目に関係してる。目薬もそうだし、個性を使う時にアイマスクしたのも理由があるはずですから。逆に言えば、視界を奪ってしまえば、あんたは個性を消せない」

息を切らしながらも俺の思考をワザと伝える。これが少しでもアピールになればいいが……。

これは俺の推測でしかない。

イレイザーヘッドの個性は、見た相手の個性を消す。だから視認できない俺、つまり個性を発動している状態の俺をキャンセルすることはできなかった。

今度こそ動きを封じた。

さすがに反撃はないだろうと、油断した俺が馬鹿だった。
「いい読みだが、やはり甘い――！」
突如として俺は背中を蹴られる。
イレイザーは足を振り上げ、その反動のまま俺を巻き込んで縦に半回転した。
蹴飛ばされた俺は飛ばされ、イレイザーは立ち上がる。また振り出しかよ……。
今度こそ手はない。詰みもいいところだ。
打開策が完全に失われたと同時に、声が響いた。
「そこまで！試験終了！」
ミッドナイトが宣言し、イレイザーは髪を下ろす。もしかして今、俺個性消されてた？
というか、そうだこれ試験だった。相手が本気過ぎて忘れてたわ。
「ってことは、俺不合格っすか？」
「とか言ってるけど、どうイレイザー？」
ミッドナイトは俺には応えず、視線をイレイザーヘッドに向けた。
え、あの人が試験官長なの？先に言ってよ。
「ヒーローを目指す者として、心構えがなってない。おまけに動機も不純であり、性格も個性も得意もひねくれたもの」

ひでぇ。性格はともかく個性は自分でどうにかできるもんじゃないでしょうに。あと全部否定できないところがなおひどい。

しかし、とイレイザーは続ける。

「圧倒的に不利な中で、それでも挫けずに打開策を探し、見つけ、実行した。そこは評価する。あとは知らん」

投げたよこの人。ツンデレかと思ったら単にめんどくさくなって適当に投げっぱなしジャーマン決めやがったよ。キレやすい性格といいこの人、ヒーローからプロレスラーに転職できるまである。

「と、言うことで合格よ。比企谷くん」

「……え？いや、あの、結局あやふやな評価受けただけなんすけど」

「あれはイレイザーの評価。実際に手合わせしてのね。それで、残り三人の評価を合わせれば、あなたは十分、雄英に相応しい実力を持っていると言えるわ」

「え？」

藤原○也ばりの「え？」である。私はギャンブラーでしょうか。

他の面々を見ると、ネズミもゴリラもうんと頷いた。えー、会議とかないの？こんなすんなり決まるものなの雄英。ちょっと不安になる。

「比企谷」

アイマスクを仕舞いながら、イレイザーが近付いてきた。あ、これもしかして試験とか無しに殴られるパターン？

「ひとまず合格おめでとうと言っておこう。明日からお前は俺のクラスだ」

「……はい？」

振り上げられた手は、俺の肩にぽんと置かれた。え、何この人、ツンデレ？

「あの、怒ってないんすか？」

「何がだ？」

何がって、この人マジで言ってんの？

「いや、あなたを選んだ云々で色々と……」

「……あぁ、あれか。あれはお前を試しただけだ。まぁ要するに、本気を出してもらうための合理的虚偽だな」

「あ、そうすか……」

ちくしょう、殴りたい。いっそ個性使って殴ってしまおうか。消されるな、二つの意味で。

つか、嘘であれだけ怒ったフリして殴ってくるとか、暴力団教師もいいところだろ。

などと思っていると、イレイザーは踵を返しながら言う。

「安心しろ、あれでも手加減している。というか、本気で殴ってたらお前、多分そこで

立ってないぞ」

ですよねー。

改めてプロヒーローの、というより大人の怖さを知った。そして、俺は絶対に担任を怒らせないと誓った。

やはり俺のクラスはまちがっている。

私（わたくし）、比企谷は雄英高校に編入いたしました。

意味不明な出会いと、無理難題な編入試験を経て、ついに新しい制服を纏った登校初日。

「比企谷八幡でしゅっ……」

盛大に噛んだ。不幸だ。

自己紹介を早々に切り上げてくれた心優しき担任（単にめんどくさいから飛ばしただけ）に感謝しながら学科を受けた昼休み。

案の定、俺は質問攻めにあった。

「雄英高校に他校から編入とか聞いた事ねぇよ！お前すげぇな！」
「ねぇねぇ!?どこから来たの!?」
「どんな個性持ってるの？」
「なぁなぁ！相澤先生と互角に戦ったって本当か？」
　赤髪をおっ立てた男子に、エイリアン系ピンク少女。隣にいたっては透明人間だし、もはや両腕の関節がセロハンテープの輪っかみたいになっている男子すらキャラが薄い。超人集団の万国びっくりショーかここは。
「待ちたまえ君たち！転校して早々に質問攻めをしては彼が困惑するだろう！」
　そんな超人集団を、手をきびきびと動かしながらメガネが制す。すげぇな、メガネなのにキャラが薄くないわこいつ。
「僕は飯田天哉、このクラスの学級委員をしている。よろしく」
「お、おう」
「あ、アタシは芦戸三奈。よろしくね転校生！」
「俺は切島鋭児郎、よろしく！」
「私は葉隠透ね」
「俺は瀬呂範太。よろしく～」
　その後も俺は私はと名乗っていく。いや覚えらんねぇから。

質問には適当に答えていった。そのうち興味を無くすだろう。

が、そうは行かず。飯田の提案で食堂に案内され、緑谷出久（みどりやいずく）と麗日お茶子（うららかおちゃこ）と昼飯に同席することになってしまった。

いや、断ったんだよ？断ったんだが、うん、無理だった。こいつら押し強すぎ。

ちなみに飯は超美味かった。明日からも昼食は雄英の購買を使わせてもらう。もちろん一人で。

「ねぇー、ご飯一緒してもいいー？」

などと明日の予定を決めていると、早くも今日の昼から狂いだした。人増えちゃったよ。

やって来たのはトレーを持った、誰だっけ。

エイリアンピンクと、透明人間と、赤髪牙男と、紫頭のチビ。個性以前に個性的だ。これ名前覚えなくてもいいまであるな。

「あ、いいよ」

「おっじゃましまーす。ねぇねぇ、比企谷。比企谷の個性ってどんなの？」

「……え、いや、朝に言ったし」

何この子聞いてなかったの？そして近いんですけど。なんで返事した緑谷じゃなくて俺の隣に来るのん？

「いやー、何を言ってるのかよく分からなかったし。難しかったからさ、もっとこう、分かりやすく」

何言ってるか分かんないはひどくないか。俺そこまで語彙力ないとは思ってなかったわ。

つーか、こういうのって言わない方がいい場合もあるんじゃねぇの？

「まぁ、なんだ。人から認識されなくなるって感じだな。ファミレス行って一人だけ水が運ばれないとか、何故か自動ドアが開かないとか」

「じ、地味だー」

「ほっとけ」

こいつ、結構グイグイ来るな。あと地味なのは知ってるから。

「でも、今は認識できてるよね？ということは、自分で発動をコントロールできるってこと？」

と、エイリアンピンクよりも純粋に聞いてきたのは透明人間。表情がわからん。

「まぁな」

「ってことは私の上位互換ってこと？どうしよう、私この先ヒッキーより使えない子扱いに……」

「いや、それはないだろ」

つかその前にヒッキーて誰よ。引きこもりさん？
俺の疑問を、そいつの隣にいた赤髪牙男が代弁した。
「葉隠、ヒッキーってなんだ？」
「え？比企谷だから、ヒッキー。なんか可愛い感じしない？」
「あぁ！いいねそれ、ヒッキー、うん。しっくりくる」
「いや、こねぇから」
「ヒッキーくんか、いいね」
「いや、よくねぇから」
エイリアンピンクが同調し、何故か麗日がサムズアップしている。え、俺今日からヒッキーなの？引きこもりんなの？
そんなこんなで昼は終わり、俺は抗議もできぬまま午後の授業に向かった。

そして放課後。
「と、最後に比企谷。後で職員室に来るように」

え、やだ。
なんて思うと目が合った。相澤先生は、それはそれは血走った目で私を見ていた。
はい行きます。
というわけで職員室に入ると、
「私が、待っていた！」
ゴリゴリマッチョのスーパーヒーロー、オールマイトが俺を待っていた。
「何か用ですか」
「いやね、君途中から雄英に来たわけだろ？となるとやっぱり授業が遅れてるんだよ、多少。だからさ、今のうちに追いつこうぜ！というわけなんだけど、このあと暇？」
「いや、今日は色々ありますね、はい」
嘘である。
この俺、比企谷八幡に帰宅以外の予定は無い。だが帰宅するという予定は存在するわけであり、愛する妹の下へいち早く帰らねばならないという意味では、このあとは予定がありまくりとも言える。
適当にでっち上げて帰ろうとするが、俺は背後から頭に手の平を乗せられた。
「比企谷、編入である以上授業時間が少ないのは仕方ない。が、その遅れを取り戻そうとしないやつが、果たしてヒーロー免許の試験に受かれるのかねえ？」

ギギギ、と効果音が着きそうな首の動きで振り向くと、背後には我らが担任の相澤先生がおいでになられていた。
「なぁ、比企谷。これからの授業時間だけで遅れた分を取り戻そうとするより、今日ここで追い付いた方が合理的だとは思わないか？」
「い、イエスサー」
ならいい、と言い残して相澤先生はデスクに戻った。
「じゃあＯＫってことで、体育館？α？に移動だ！」
俺の放課後は、補習に決まった。

雄英高校指定のジャージに着替えた先には、何故かコスチューム姿のクラスメイトがいた。ぱっと見る限り全員ではないらしい。
「さて、比企谷少年のために集まってくれてありがとう。その思いやりと助け合いの精神、忘れないでくれよ」
高らかに笑うオールマイト。だが何の説明もないまま呼ばれた俺はただ困惑するば

かりだった。

「と、比企谷少年にも説明しないとな。前のヒーロー科の授業で、A組は実践訓練を行った。その際に大凡ではあるが、クラスメイトの個性を知ったわけだ。でも、君だけ知らない知られていないってのはちょっと可哀想だろ？だから、君の個性を知りたい人は残ってくれと声をかけたら、これだけの人数が集まった。いやー愛されてるな、少年」

と何やら語ったが、おい。思いやりと助け合いの精神はどこいった。

まぁ要するに、補習に必要な人員を俺の個性の情報を餌に集めたわけだ。これはかなり合理的な自給自足だな。多分提案したのは我らが担任だろう。

「じゃ、訓練のルールを説明しよう。訓練はヒーローチームとヴィランチームに分かれて行う。ヴィランチームは核爆弾を持ち込んでビルに立てこもった設定だ。ヒーローチームはその核爆弾を確保、もしくはヴィランチームの無力化で勝利。ヴィランチームは核爆弾を制限時間守り抜く、もしくはヒーローチームの無力化で勝利だ。敵チームを拘束する際には、このテープを巻くことで無力化されたこととする。チームは二人一組、くじ引きで行う。ここまでで質問はあるかい？」

やや日本にはないだろうという設定にはツッコまない方がいいか。

ヒーローチームの勝利条件はわかりやすい。が、この設定だとヴィランチームは不自然ではないか。

「ヴィランの目的は何なんですか？」
「ん？それは、もちろん核爆弾によるテロ行為だ」
「なら、ヴィランの最終目的は核爆弾の爆発でいいんですね？」
「ああ、それで？」
「なら、最悪の場合制限時間ギリギリで核爆弾を爆発させた自爆行為でもヴィランの勝ちじゃないですか」
　時が止まった。Ｔｈｅ　Ｗｏｒｌｄ。
　静寂仕切った中で、カエルのような女子が呟く。
「確かに設定上そうなるけれど、ルールを聞いてすぐにそれを思いつく比企谷ちゃん、怖いわ」
　この子、まさかの毒ガエルだった。
「えーっと、この場合どうなの？いやさすがに……うん、よし。比企谷少年。今回の場合、あくまでもヴィランは時間稼ぎが目的ということで、その方法は無しだ」
「うす」
　オールマイトの説明に頷くと、クラスメイトがザワついた。あれ、俺またなんかやっちゃいました？
「なるほど。確かにヴィランならそう考えるかもしれない。前の授業では誰もそんなこ

とを考えなかった。凄いな比企谷君」

と、なんか委員長が言ってるけど、それ褒めてるの？暗にヴィランらしいって言ってない？

「じゃあ早速くじ引きだ。比企谷は決定として、ヴィランかヒーローのどちらかが入ったくじを引いてもらう。残りのみんなには、ハズレとアタリのくじを引いてもらおう」

そう言って出されたボックスに手を突っ込む。

なんの因果か、俺はヴィランらしい。うわー、てっきにーん（空元気）。

「比企谷少年はヴィランか……うーむ、まぁ大丈夫だろう！さて、残りのメンバーは――」

くじの結果、ヒーローチームは八百万百（やおよろずもも）と耳郎響香（じろうきょうか）。

ヴィランチームは俺と、常闇踏陰（とこやみふみかげ）になった。

両チームは通信機とテープ、それからビルの見取り図を渡されスタート地点に着く。

まずはヴィランチーム。先にビルに入って爆弾の配置や作戦会議ができる時間を貰った。

「えっと、そっちの個性は、聞いていいか？」

「もちろんだ。オレの個性は『ダークシャドウ』。影のモンスターを体に宿している」

何この子、厨二？

なんてコメントは控えて説明を受ける。
大雑把に言えば、長距離中距離に秀でる伸縮自在の偶像、バンジーカゲということらしい。なんだそりゃ。
「で、比企谷の方は……」
「ステルス。まぁ誰にも認識されなくなるってやつだな。透明人間みたいな認識で問題ない」
「なるほどな」
「相手の二人の個性は分かるか？」
「八百万の個性は『創造』。体から無機物なら何でも創れる。耳郎は『イヤホンジャック』。耳にあるイヤホンジャックから集音したり、自分の心音を流したりできる」
敵さん、強くね？ヒーローは必ず勝つってことかしら。
索敵能力に秀でた個性と、武器防具何でもござれの万能個性。厄介すぎないか？
まぁこちらも戦闘能力が高そうな個性持ちはいるんだけどね。
「なら、作戦は決まりだな。常闇はここで爆弾の守備。耳郎の索敵を抜ける俺が遊撃しながら時間稼ぎ。最低でも二人を分散させてダークシャドウで叩くって感じか」
「御意」
思ったよりあっさり頷いてくれたな。もっと言い合いになると思っていた。

今回はヴィランチーム。なんか皮肉が効いて逆に落ち着く。
そういやヒーロー科として他の人と個性のは初めてだ。イレイザーとの戦闘は話が別だろう。今回はお互いに本気でやりあえるってとこがみそなわけだし。
「んじゃ、俺は下の階に行く。一応、窓からハシゴで登ってくるかもしれないから気を付けろよ」
「……っ」
「……なんだよ」
「いや、まさかそんな方法を取るとは考えなかった。未熟だな」
武士かよ。同い歳だと思うが。
こういう戦闘の場合大体は入口から遠い上階に爆弾を置くだろうし、その逆をついてハシゴを創造すれば上から奇襲できる。真っ先に思い付きそうなものだが。
「凄いな、比企谷」
「それさっきも言われたけど、別に普通だろ。つか、凄いのはお前らみたいな万能型の個性持ってる事だと思うんだが」
俺の個性は、応用こそ利くが万能じゃない。これなら単純な身体能力強化の方が個性の有能性では上だろう。
「いや、その分析力と思考力、感服だ。遊撃と言ったが、何か策はあるのだろう？」

「……初見殺しが俺の個性の武器だからな」

多少はある。逆に言うと失敗したら結構ピンチだけど。まぁそれでも、時間稼ぎ位はできるだろう。

部屋を出て階段を降り、目的の地点へ向かう。

女子相手だけど、多分戦闘能力は俺より上だ。そんな女の子を俺はか弱いとは呼ばない。むしろ体から剣や盾を創り出したり、動きを音で察知してくる女子がいたら、俺は間違いなく逃げる。個性使って本気で逃げる。

今回はそれができないわけだが、仕方ない。

精々足掻かせて貰おう。

最高に最低な、敵（オレ）らしく。

やはり俺の戦闘訓練はまちがっている。

――第三者視点――

薄暗いビルの中で、比企谷は息を潜めていた。

程なくしてオールマイトが試合開始の宣言をする。

「比企谷さんの個性は未知数。常闇さんのダークシャドウも強敵ですわ。警戒を」

「おっけ。ビルに入ったらすぐに索敵するから」

八百万と耳郎は短いやり取りで最終確認を行った後、ビルの中へと足を踏み入れる。

中は入口からの光が僅かに照らしているが、見通しは良くない。

耳郎は耳から伸びたイヤホンジャックを壁に突き刺した。

聞き取れる音は心音。上階に、一人だけいる。恐らくは常闇、爆弾の守備をしているのだろう。

（比企谷は……）

いない。音が聞こえず、耳郎はこれが比企谷の個性であるステルスだと結論付けた。

「比企谷の反応が無かった。多分個性で隠してるんだと思う」

「ということは、常闇さんの気配はあるのですね？」

「うん、上階に確認した。一人でいるのか、比企谷が潜んでるのかは不明かな」
「やはりここは、二人で一気に攻め落とすべきでしょうか」
「かもね、罠かもしれないけど、そこはヤオモモの個性でどうにか……」
「拘束って、これでいいんだよな？」
二人の背後で、比企谷は呟いた。
「「え……っ？」」
反応すらできず、八百万と耳郎は振り向く。
その動作中に、気が付いた。
動きにくい。体が縛られたように、何故かパートナーと密着している……？
そこでようやく、二人は自分達がテープを巻かれていることを理解する。
「そ、そこまでっ！……って、おいおいマジかよ」
オールマイトは思わずマイクから零した。

――比企谷視点――

訓練は速攻で終了し、参加した俺達は待機場所へ戻る。
そこにいた面々は、静まり返っていた。つか、俺以外の三人も無言だし、何この状況。
「ひ……」
俯いたエイリアンピンクが一言。
「ヒッキーっっよッ!?」
ヒッキー呼びをどうにかしてくれませんかね。
抗議の目を向ける最中、周囲の連中も興奮したように騒ぎ出す。
「いや速すぎだろっ!?開始何秒だよっ!?」
「轟(とどろき)だってこんな速く無かったぞ?」
「というか、ヴィランチームなら最速ね、比企谷ちゃん」
「ありえねー、八百万と耳郎を一瞬で拘束とか」
「輝いてるね!ボク程じゃないけど!」
「私もやりようによってはできたのかな……?」

赤髪、しょうゆ顔、毒ガエル、黄色筋肉、なんか光ってる奴、透明人間。
その他が口々に感想を言う。おぉ、俺すごかった？いえーいぴーすぴーす。
って、あんま思わないけど。あと俺は全然輝いてなかったと思うぞ。なんなら見えなかったまである。
「ナイスファイトだったぜ諸君。といっても、ほとんど比企谷少年の独壇場だったな！」
オールマイトはそんな評価を出す。うん、これ戦った気がしないな。
実際、俺はただ入口付近でテープを持って隠れていただけだ。あとは耳郎が個性を使っている間に二人の周りにテープを通して巻いただけ。完全に初見殺しの一発技だ。
が、そんなことはどうでもいいのか、やけに俺を祭り上げるクラスメイト。いい迷惑である。
「何も、できませんでしたわ……」
「音も聞こえないとか、それ反則じゃん……」
「オレは、いる意味がなかったな……」
一方戦闘参加済みのメンバーといえば、何故かパートナーだったやつすらため息をついている。すげー罪悪感湧くんですけど。あと常闇さん？なんであなたまでガッカリしてんのよ。
「ふむ、個性を最大限に活かした奇襲。これは見事な作戦さ少年。ただ思ったよりえげ

つないやり方だったけどな。それじゃあ訓練は……」
「センセー、俺も比企谷と戦いてぇ！」
「え？」
「は？」
　何この人戦闘民族？
　赤髪の一言で火がついたのか、クラスメイトのほぼ全員が再戦を要求し始めた。嘘だろ、やらないよねこれ。
「静かに！先生。クラスメイトの個性を知るという意味なら、もう1戦した方が比企谷君のためになるのではないでしょうかっ？」
　キリキリと手を動かしながら主張するメガネ。確かクラス委員の飯田か。
　うむー、と何やら考える姿勢に入るオールマイト。あー、これもう無理なやつだ。
「確かに、あれだけじゃ味気ないよなぁ！なら特別にもう1戦、やっていこうじゃないか！」
「いやいや、俺の個性知ってますよね？初見殺し専門なんすけど。知られてたら基本没個性なんすけど」
「ヒーローになったらそんなこと言ってられないぞ？自分の個性は知られてて当然、むしろそれが大前提の世界だ。それに、弱点を突かれたくらいでへこたれるな。要するに

――」

「「Ｐｌｕｓ（プルス） ｕｌｔｒａ（ウルトラ）!!」」

「ってわけさ！」

声を揃えて叫ぶ皆の衆。準備してたんすかね。

予想通り第二回戦は回避できず、俺はヒーローチームに固定された。

リベンジを希望したが、八百万他三名は抽選ができず、残りのメンバーがくじを引いた。

その結果――。

「よろしくね、比企谷ちゃん。ケロ」

毒ガエルがパートナーになった。

ヴィランチームは、緑谷と赤髪こと切島。双方戦闘向きの個性持ちらしい。

対していえば……。
「あー、えっと……」
「蛙吹梅雨(あすいつゆ)よ。梅雨ちゃんと呼んで」
「お、おう。……んで、蛙吹」
「梅雨ちゃんでいいわよ」
「ははっ……で、蛙吹」
「……強情ね」
「お前が言うか」
ケロ、とか言っちゃってるし。こいつまじでカエルなの？
「まぁいいわ。私の個性は『蛙』。飛んだり壁を登ったり、あと舌を伸ばしたりね。カエルができることは基本できるわ」
まじでカエルだった。
「じゃあ、あれか。傷を癒す汗とかも出るのか」
「それは出ないわ。カエルはカエルでも、ガマガエルじゃないの」
「あ、そう」
ヒーラーじゃないと。まぁそこまでカエルという個性に求める気はないから特に何も感じない。

いや、つか多くね？明らかにスキルタンクの量が違うんですけど。俺、影薄くするしかできねぇぞ。
「うん、普通に強えなその個性」
「ありがと。それで、比企谷ちゃんの個性は……」
「見てた通りだ。見えたかは分からんが」
「見えなくなるのが個性ね。もっと言うなら、音とかの情報も消せるのかしら」
「そんなとこだな。だから基本、戦闘は無理」
今度はヴィランチームの個性を蛙吹から聞く。
緑谷出久、個性は超パワー、らしい。ちゃんと分類を聞いたわけではなく、戦闘訓練などで見た蛙吹の評価だ。文字通り、超パワーである。
切島鋭児郎、個性は『硬化』。体を硬くできる。まんまだが、これは厄介だ。
ヴィランチームは双方が戦闘向き、それも肉弾戦に秀でた個性だな。対しての俺達と言えば、多様に多用な個性ではあるが、タイマン戦闘の能力値は高くない。
さて、どうするか……。

――第三者視点――

「多分だけど、比企谷くんの個性には致命的な弱点があると思うんだ」
作戦会議の際、緑谷は切島にそう切り出した。
「どういうことだよ、緑谷」
「うん。この前、葉隠さんと比企谷くんの会話覚えてる？」
「ええっと……」
確か、比企谷の個性が葉隠の個性の上位互換ではないかという話だった。
「そのとき、比企谷くんは否定したんだ。もちろん社交辞令って可能性もあるけど、それだけじゃない。と思う」
「さっきの試合でなんか分かったのか？」
「さっきの試合、比企谷くんは持っているテープまで消していた。これなら葉隠さんよりも強い個性って言える。でも、そうじゃないって言うなら、可能性は二つある」

比企谷の個性が上位互換ではない理由。推測ではあるがと注釈し、緑谷は続ける。
「一つは時間制限。比企谷くんが個性を使うにはかなり体力を使うとか、何かしらのリミットがあるのかもしれない」
「おう、それは何となく分かるな。もう一つは？」
「もう一つは、これはかなり可能性としては低いんだけど、発動するために条件がある。比企谷くんと葉隠さんの個性を比べた時、もっとも分かりやすい違いは、常に発動しているか任意で発動するかってことだから……ブツブツ……」
いつの間にか思考の海に入っている緑谷。それを切島は引き気味になりながら正気に戻させる。
「それで、何か対策とかあんのかよ」
「あ、うん。ここまではあくまで可能性の話で、ここからは確実に言えること。比企谷くんは、正面戦闘に弱い」
根拠はある。
先の戦いで八百万や耳郎を相手に戦闘を避けたこと。テープでの拘束を選んだことはバトル展開を避けているといえる。
「なるほど。じゃあ案外簡単に勝てるってことか」
「そうとも言えないけど、でも、切島くんは取り分けそうかもしれない」

「は？」

「それじゃあ、二戦目、スタァァァトオオオ！」

オールマイトが叫ぶ。

試合開始の合図である。

お互いに目線で会話し、比企谷はビルの正面から。蛙吹はビルの側面の壁から爆弾を探しに行く。

壁に手を着きながらよじ登る蛙吹。それぞれの窓から、慎重に中を確認していく。

（最上階ね。様子を見る限り、爆弾は無いようだけど……）

傾向として上階に爆弾が置かれることが多い。それを鑑みて比企谷は蛙吹に上から探すよう指示した。だが結果として、この策は失敗だった。

ビルの入口正面で、息を止めた比企谷は切島と対面した。

（おいおい、普通お前が防衛じゃないのかよ）

比企谷はため息をつきそうになる。

これは思っていたよりも相手は厄介だ、と感じたためだ。

個性を聞く限り、切島の方が爆弾の防衛に向いている。むしろ、緑谷の超パワーはルール上爆弾の周辺では使いにくいはずなのだ。

（そこらへんを無視してまで切島を俺にぶつけて来た辺り、頭がいいか面倒くさがりな相手ってことだな）

勝手な印象で、比企谷は切島の作戦ではないだろうと考えた。

仕方なく、一度切島から見えないように出入口に隠れると、比企谷は息を整える。

切島の個性と、比企谷は相性が悪い。最悪ですらある。

比企谷の個性はトリッキーであれど、素の攻撃力は一般人である。そんな拳で硬化した体を殴ろうものなら、やられるのは殴った比企谷の方だ。

比企谷は通信機を操作し、蛙吹とコンタクトを取る。

「悪い、読みが外れた。こっちに切島が来てる」

「ということは、爆弾の守備は緑谷ちゃんね。どうする？私も一度そっちに向かった方がいいかしら？」

話を聞くと、蛙吹が偵察した感じでは上階に爆弾はないらしい。

それを聞いた上で、比企谷は思考をまとめる。

恐らく、相手は比企谷の思考を読んだ動きをしている。であるなら、爆弾は最下層の階にある可能性が高く、緑谷はそこで守っている。

「いや、蛙吹はそのまま一階にあるはずの爆弾を目指してくれ。俺は切島を足止めする」
「比企谷ちゃんの方が隠密性は高いと思うけれど」
「緑谷と戦闘になったら、まず俺に勝ち目はねぇ。まだそっちの方が上手くやりあえるだろ」
「……分かったわ」
通信が切れ、比企谷は深呼吸する。
当初の予定では、蛙吹が撹乱しながら超パワーの緑谷を引き付け、その隙にステルスを使って爆弾を回収するつもりだった。
問題はいくつかある。
まず蛙吹は上階にいるため、爆弾のある場所に辿り着き、更に緑谷との戦闘も合わせると制圧に時間がかかること。
次に、一本道に切島がいること。比企谷の肺活量では一回の個性発動は一分と持たない。ましてその後はもっと時間が短縮される。
いくらステルスで切島を素通りしても、どの道次の曲がり角までには見つかってしまうのだ。
正面戦闘は避けられず、個性の相性は最悪。
故に――。

「個性使ってコソコソ逃げると思ってたけど、案外根性あんだな、比企谷」
ゴツリと、硬い拳を突き合わせる切島。
「お前くらい倒せないと、今後の俺の未来設計に響くんだよ」
その目の前に、比企谷は姿を見せた。

やはり俺のスタイルはまちがっている。

俺は弱い。

比喩ではなく、正しく俺は周囲に劣っている。

何かを創れるわけでも、モンスターを飼っているわけでも、火や水や風や雷を操れるわけでもない。

俺は一般人だ。強いて言うなら、異常な程に影が薄い、ただそれだけの人間だ。

そんな奴が――

「うっしゃァ！こいや！」

こんなガチガチの硬化人間に勝てるわけねぇだろ……。

入口を進んだ一本道。陰を落とした空間は薄暗く、しかし互いを認識するのに不都合はない。

切島は両手の拳をぶつけ合い、甲高い音を上げて気合いを入れていた。

俺はといえば、ひたすらにやる気がなかった。

さっきは売り言葉を格安で買っていたが、生憎と専業主夫希望の俺の財布の紐は堅い。だから買い言葉を返すだけで終わっておく。

はっきり言って、俺に勝ち目はない。なら、わざわざ戦う必要がないともいえる。無駄なんだ、無駄無駄。

「……どうしたんだよ、比企谷」

来ないのか、と切島は問う。いや行かねぇよ。

「どうもしねぇよ」

「じゃあなんで突っ立ってんだよ」

「俺の勝手だろ」

「そうだけど……ああ、もうどうでもいいや！こねーならこっちから言ったらァ！」

ガキンと効果音が鳴る。体のどこ動かしたらそんな音出んだよ。普通出ねぇよ。

硬化した両の拳は、俺の肩や顔を狙って飛んでくる。

だが、当たらない。

怪我の功名がもう一つあった。担任の先生に感謝だな。

当たり前だが、切島とイレイザーベッドを比べても身体能力には大きな差がある。イレイザーの攻撃を知ったあとなら、切島のパンチとか止まって見えるわ。流石にそれはない。

とはいえ、あれだけ打たれたのだ。そりゃ目も慣れる。これくらいの攻撃を躱す程度なら、できなくもない。

「くっそ……避けてばっかじゃ、ここは通れねぇぞ！」
「さて、どうだろうな」
実際ここを通る事自体は難しくない。ただその後の展開が少々面倒なのだ。
俺の肺活量を考えると、切島を躱して奥に進んでもいずれ追い付かれる。そうなれば、最悪の場合爆弾の周辺で二対二。これは避けなければならない。
その理由一つ目。緑谷の個性が範囲攻撃ができるほど強力なパワー個性であること。
二つ目。俺のステルスは味方との連携が取りにくいこと。
三つ目。俺と蛙吹に連携する類の策がそもそもないこと。
その他諸々の理由で、俺は個性による強行突破は挑めない。
「真面目に戦えよ！漢らしくねぇぞ比企谷！」
「俺が女に見えるなら放課後の予定に眼科を勧めるぞ」
煽りながら、俺は先程通過したばかりの入口へと近付いていく。ひたすら後退してるからな。
急に攻撃は止み、切島は硬化を解いてため息をつく。
「さっき、オレを倒すとか言ってたじゃねーかよ」
あー、そういや言ったっけそんなこと。けど約束とかした訳でもないしな。
……まぁ、しかし、やる気を見せとかないと都合が悪くなりそうだ。

「ああ、んじゃ、やるか」
そう言って俺は息を大きく吸い込む。それを見た切島は、再び硬化して両手を顔の前でクロスさせた。
息を止め、個性を発動させる。
俺の姿も、音も、質量すらも切島は感知できない。
「うおおおおおおおおおおおっ！」
にも関わらず、切島は突進して来た。
反応が遅れ、俺は咄嗟に両腕で防御姿勢をとる。
もちろん躱すことなどできず、切島は俺を突き飛ばした。ただし、本人は気付いていない。
……つか、痛い。
いやマジで痛い。痛い痛い痛い痛い痛いっての！
何これ超痛いんですけど。ほとんど車に轢かれたのと変わんねぇし、なんなら車のバンパーよりも硬いからこれ！
骨が折れたのではないかと錯覚する程の痛みに、俺は悶絶して床を転がりまくる。
多分相当酷い絵面だろう。男子高校生が床を転がりまくるとか、見たくねぇし見られたくねぇ……。

叫びそうになりながらも必死に痛みに耐えながら、俺は這いよりながら入口を出る。
そのまま左の方へ曲がり、壁に背を預けながら息を吐いた。
「はぁ……はぁ……痛え……」
どうやら折れてはいないらしい。
着地点が見えなかった分、重心が狂った為に突進の威力が減っていたのだろう。これ、個性使ってなかったらやばかったんじゃね？
「襲ってこねー。……ってことは、緑谷の言ってた通りってことか……？」
そんな声が聞こえた。
襲って、ってのは俺がって意味だろう。となると、あっちは俺が個性を発動させてからの作戦があったってことか。
緑谷の言う通り……。あいつ、そんな頭いいのか。
もしかしたら、俺の個性の弱点を一戦目の訓練で見つけたのかもしれない。だとしたらまずい。
ただでさえ初見以外での弱さに定評のある俺だ。対策されたらいよいよ何もできん。
そっと、顔を出して様子を伺う。
切島は周囲を警戒しているらしく、キョロキョロと周りを見ていた。チョコボールの鳥かよ。

緑谷の言う通り、緑谷の作戦。どういうものだったのか。

仮に俺のステルスの弱点、見えないながらも攻撃は当たるってとこに気が付いていた場合。さっきの突進は有効だ。俺が逃げるより先に一撃を当ててしまえば、見えなくても関係がないからな。

だがだとしたら、切島の今の行動はおかしい。

仮に俺の個性を警戒するのなら、当たらなくとも周りを攻撃しようとするだろう。少なくとも、さっきの仮説を知っていたならそうするはずだ。

そうしないのは、あくまでも別の仮説で突進をしたから……？

いや、楽観視はすべきじゃない。安易な考えは捨てよう。もっと現実的な考え方をすべきだ。

切島に範囲攻撃はない。なら、緑谷が渡せるステルス対策の方法には限りがあるはず。

それはこうして切島が周りを気にしているのがその証拠と言える。じゃなきゃ、もっと落ち着いて対応できるはずだからな。

可能性として大きいのは、ある限定的なシュチュエーションでの対応策。目の前で発動した時とか、テープを消して近付いて来た時ってところだろうか。

少なくとも、さっきの訓練で見せた策は使うべきじゃない。

ならばと、俺は思考しながら時計を見る。
制限時間は、残り三分を切ろうとしていた。

「蛙吹、爆弾の場所分かるか？」
「ええ、見つけたわ。正面入り口から三つ目の道を右折したところね」
通信機を使い、大雑把な場所を把握する。
時間がないな。作戦を立てるにも、蛙吹と打ち合わせとかしてる場合じゃないし。どうするか。
俺じゃ切島は倒せない。少なくとも単純な戦闘では無理だ。
……じゃあ、他の方法しかないじゃねぇか。

――第三者視点――

周囲を伺う切島。
彼に気付かれないように、比企谷は近付く。
テープを使っての拘束は対策されている可能性がある。ならばと、比企谷は切島の右側に立つと、その耳から小型の器械を引き抜いた。
「なっ……」
「これで、緑谷の指示は仰げねぇだろ」
作戦は緑谷が考えている。故にその指示ができなければ切島の反応は多少でも下がるだろう。
比企谷は切島の背後に現れる。

咄嗟にとった攻撃をバックステップで避け、比企谷は一歩分道の奥側に移動した。
「さっきから、正々堂々戦えよっ！比企谷っ！」
「知るか。そもそも俺の目的はお前と戦うことじゃねぇんだよ」
「は……？」
先程まで倒すなどと言っていた比企谷は、何故か戦うことすら否定した。
理解できない身代わりに、切島は困惑する。
「おま、何言ってんだ？」
「お前の個性は硬化。どう考えても勝てねぇ、考えりゃ分かるだろ」
「弱気だなおい」
「なんなら、俺にとっても蛙吹にとってもお前は脅威だ。なら、話は簡単だろ」
言いながら、ごく自然な動きで比企谷は自分の右耳に手を伸ばす。
聞き入っている切島に、比企谷は言った。
「お前をここで足止めすればいい。何せ、蛙吹には緑谷に勝つ策を教えたからな」
「んだと……？」
「その証拠に、さっきから何の音もしない。緑谷が個性を使っていないってことだろ」
「――――っ！」

確かに、とビルの静けさにうろたえる切島。
その動揺を見逃さずに、比企谷は息を吸い込む。
姿だけでなく気配や音に至るまで、比企谷八幡の情報は認識不能になった。
虚を突かれた切島は、戸惑いながらも体を硬化させ、突進する。
緑谷の考えた策。それはステルスの弱点を突いたものだった。
比企谷の個性は認識できなくするだけであり、存在を消すだけではない。つまり認識できなくとも攻撃はできる。
今までそこにいた場所に攻撃すれば、回避されない限り有効なはずなのだ。
攻撃が当たったのか、今は分からない。比企谷が個性を使ったのならば、切島には警戒する以外の選択肢はなかった。
「……来ねぇ？」
硬化したまま、切島は構えを解く。
おかしい。あくまで緑谷の推測ではあるが、比企谷は長時間の個性発動はできなかったはず。
にも関わらず、比企谷は姿を見せない。緑谷の推測が間違っていたのか。
いや……。
「し、しまった！」

比企谷の狙いは足止め。であるなら、今ここで何もせずに立っているのは比企谷の思惑通りになってしまう。

今自分がすべきことは――。

「緑谷と合流、それが最善っ！」

何をしてくるか分からない比企谷は一先ず無視し、通路を奥に進んで爆弾の置き場を目指す。

その道中で、切島は比企谷の後ろ姿を見つけた。

時は少し遡り。

「お前をここで足止めすればいい。何せ、蛙吹には緑谷に勝つ策を教えたからな」
「ケロ？」
前置きなく耳へ届いた音声に、蛙吹は驚く。
意味も目的も分からず、聞き返そうとマイクを操作しようとする。
「その証拠に、さっきから何の音もしない。緑谷が個性を使っていないってことだろ？」
「……」
二言目で、これが自分に言った言葉ではないこと。そして自分に宛てた言葉であることを理解した。
どういう意味かしら？
比企谷の言葉を吟味し、その意図を蛙吹は察する。
「と言っても、どうするのかしら……？」
壁に引っ付きながら、蛙吹は部屋を眺めて思う。
爆弾の置かれた部屋。そこには緑谷が仕掛けた策が張り巡らされていた。
捕縛用のテープを、蜘蛛の巣のように部屋中に展開している。これは緑谷が用意した比企谷と蛙吹の両方に対応できる策である。
テープに触れれば比企谷の位置が特定でき、機動力に優れた蛙吹も移動範囲が制限される。

――これが、最善！

緑谷が内心で思う一方、蛙吹もまた覚悟を決める。

――比企谷ちゃん、信じるわよ。

四肢に力を入れ、壁から飛び立つ。

「来た！」

身構える緑谷。その背後には目的の爆弾がある。

蛙吹はそれに近付かず、壁を蹴りながら部屋を動き回る。

移動する度にテープが体に絡まる。テープを巻かれたら即行動禁止。逆に言えば、体に着く分には問題はない。

でも、これじゃ弱点を増やすのと変わらない。

緑谷が思うことを百も承知で、蛙吹は行動をやめない。

この部屋に通じる道は二つ。蛙吹が来た階段につながる道と、入り口につながる道である。

後者から爆弾へのルートから、意図的にテープを外す。

そして――

「緑谷っ、すまねぇ！比企谷がっ！」

「切島くん!?」

切島が突破されていた。そんな報告はなかったと驚く緑谷。
そんな彼の隣を通り、息を止めた比企谷は爆弾へと手を伸ばす――。
「訓練終了（タイムアップ）だ！そこまで！」
オールマイトの声が響く。
「はぁ……はぁ……」
息を吐いた比企谷の手は、届いていなかった。

――比企谷視点――

届かなかった。
これで、俺の、俺たちの負けか。

テープを外しながらこちらに来る蛙吹。ごめん、こんな時どんな顔したらいいのか分からないんですけど。
「えっと……」
「お疲れ様、比企谷ちゃん」
「え、お、おう。えっと……？」
てっきり責められるとばかり思ってたんだが。
思わぬ対応に戸惑う。
「とにかく、今は戻りましょ」
「お、おう」
さっきから、俺の語彙力死んでね？

「ナイスファイトだった！」

戻って早々、暑苦しい声を張り上げるオールマイト。いや、俺ら戦いましたっけ？

テンションの高い先生とは対照的に、クラスメイトは静まり返っていた。またこのパターンかよ。

しかし今回は俺の負けだ。称賛よりもダメ出しの方が多そうだ。

やはり俺の日常はまちがっている。

訓練を終え、俺たちは講評を頂くことになった。

結論から言えば、可もなく不可もなくな話だった。

「――と、まぁ二回目なわけで、比企谷少年の個性の使い方がアレなのは周知の事実だとして。惜しかった！いや～、お互い良い動きしてたよ有精卵たち！」

前言撤回、酷評じゃんこれ。

オールマイトの俺に対する遠慮もだいぶ薄れたものだと思いながら、クラスメイトの感想を聞く。

「ねぇ、ヒッキー。ビルの中で最後ステルスヒッキー使う前、切島となんか話してたよね？」

ステルスヒッキーとかいう聞き慣れない単語は華麗にスルーするとして。

「いや、まぁ、あれだ。ちょっと揺さぶりをな」

「揺さぶり？」

「あ、そうだ比企谷！お前なんで戦わねぇんだよ」

エイリアンピンクに答えるより先に、切島が食ってかかってきた。めんどくさ。

「勝てねぇんだし、戦うわけねぇだろ」
「そんなのヒーローじゃねぇし、漢じゃねぇだろ！」
「知るかよ。そもそもこの訓練は戦うことが目的じゃねぇんだし」
「そ、そりゃそうだけど……」
どうやらこいつ、漢らしくあることにこだわりがあるらしい。そういうヒーローに憧れでもあるんだろう。
気持ちは分からなくない。ちゃんとしたヒーローを目指すなら目標の一人や二人いるのは当然だ。
今回はその、こだわりを利用したわけだが。
「切島、お前あの時戦うことが前提だったよな？」
「お、おう」
「だから逃げの一手が有効だった。戦おうとしてるからこそ、姿の見えない相手には警戒するだろ」
「な、なるほど」
内心を読まれたのか、思いのほかあっさり切島が頷いた。
まぁそういうことだ。切島は俺の攻撃を警戒した。だからこそ、俺の脱走に反応が遅れた。

「うんうん、それで？」
「は？いや、それでってなんだよ」
「それで比企谷は切島をどう揺さぶったの？」
「あーそういう」
そういや揺さぶった云々に関することは話してなかったな。おのれ切島。
「単に緑谷の方が危ないぞって言っただけだ。通信機を奪ってから」
この訓練はペアとの情報交換が重要だ。特に二手に分かれている時はな。
俺は先に切島の情報収集の手段を奪った。この時点で切島はペアの安否を確認する術を失っている。
確認ができず、戦闘に意識を向けているからこそ、切島は俺の揺さぶりに乗ってしまった。戦いにこだわってしまったからこそのミスってとこか。
「じゃあ、比企谷が入り口のとこから消えてやったのって……」
「俺の背後を取るついでに通信機を取ったわけじゃなかったってことか……」
「やることがえげつないわね、比企谷ちゃん」
ピンクと切島が各自納得している中、毒ガエルが毒突きしてきやがった。お前も発言がえぐいと思うんだが。
「まあ、要するに！今回はチームワークが決め手だったってことだな！もちろん、緑谷少

年と切島少年が悪かったってことはない。双方、互いの個性の強みを活かしながら立ち回っていたわけで！」

オールマイトが強引に閉め、俺の補修は終了した。

チームワークか。なんとも皮肉な結果だ。

今回、俺と蛙吹のチームワークは良くなかった。そもそもの作戦、俺の奇襲はチームプレイというより、スタンドプレイを同時展開するものだったのだ。

それがたまたま、緑谷も同じ方向性の作戦を取っただけ。それもお互いに失敗している。

さっきの反省会の中で、蛙吹が俺のルートを確保するために動いたと聞いた。

だとしたら、今回の敗因は俺だ。読みを外し、作戦は失敗し、スタンドプレーに走り、カバーまでしてもらってなお、このあり様。

俺は弱い。こんな基本的なことすら忘れていた。

全く、ひどい。ひどく、醜く、浅ましい。

これで、こんな成りで、俺は一体何を守れるというのだろうか。

「比企谷君！」
校舎を出てすぐに、俺は緑谷に呼び止められた。振り向くと、飯田と麗日、蛙吹が並んでいる。仲いいっすね。
追いついた四人は、チャリを引く俺に歩幅を合わせて歩き出した。
俺のすぐ隣に一度った緑谷が言う。
「すごかったね。認識できなくなるって個性を完璧に使いこなしてる感じだった」
「いや、負けたけどな」
「それでもだよ」
「ああ、そうだ。切島君との戦い方も大いに学べた。肉体で勝てないから心理戦に持ち込む。なるほどだ」
「お、おう……」
正直、べた褒めには慣れていない。ここの高校は褒めて伸ばす方針なんだろうか。

そう思うと全部がお世辞に聞こえてくるな。ということは俺は立場の高い人間だと言える。はは、ねぇわ。
「それはそうと、比企谷ちゃん。大丈夫？」
「は、何が？」
「さっきから、お腹を気にしてるようだけど」
「……いや、ちょっと腹減ってな」
「そうか。なら、みんなでどこかに寄らないかっ？」
「あ、いいね、何か食べよーう」
おう、テンション上がってるとこ悪いな麗日。
「いや、いい。家で飯作ってるだろうし」
「む、そうか。なら、早く帰らないとなっ」
暑苦しい飯田。略して暑苦し飯田。一文字しか消えてないな。
あと、蛙吹。こいつもエイリアンピンクとは違った意味でガンガン来るな。
俺は歩幅を速め、並んでいた四人を抜かす。
「んじゃ」
「うん、ばいばい」
「じゃあーねー」

「うむ、また明日っ」
「また明日ね」
適当に手を挙げて応え、俺は帰路に就いた。

カギの開いた扉を開け、家に入る。
「おっかえり～、お兄ちゃん」
「おう、ただいま～」
帰って早々、最愛の小町が出迎えた。
うっかりしたら妹ルートに入ってしまいそうなシチュエーションをどうにかスキップし、リビングのソファにどっかり座る。
くそ、痛え。ついさっき切島にド突かれた腹を擦る。折れてはないんだろうけど、ヒ

ビくらい入ってそうだなこれ。
「大丈夫？怪我したの？」
「ん、まぁそんなとこだな」
「ほいほ～い。んじゃま、小町におまかせ～」
そう言って、小町は俺が擦っていた部分に手で触れる。
手の平で、撫でることもなく触れ続けて数秒。先程まであったズキズキとした痛みが引いていく。
小町の個性『痛覚希薄』。触れた対象の痛みを薄くする。まさに癒し系シスター小町ってことだ。
「あんま無理しないでね？小町の個性も万能じゃないんだからさ」
「分かってるよ」
小町の個性は痛みを薄くするだけで、怪我を直すわけはない。なんなら、医学的に言えば痛覚のみを消すのは危ないまであるらしい。
しかし、なんでこんな個性があの両親から生まれるのか。
俺の個性は分かる。『文字を消す』父親と『遠くまで見える』母親だからな。視覚から、消す、みたいな変換だろう。
小町の場合、視覚から痛覚に変換して、そこから消すって二段階ジャンプを遂げてる。

赤い帽子と服着たオッサンかよ。
「でもさ、なんだかんだ雄英に入って、頑張ってヒーロー目指してる兄がいるって、結構自慢だよ。あ、今の小町的にポイント高い」
「……そりゃどうも。まぁ、俺がなるのはヒーローじゃなくて専業主夫だけどな」
「うへぇ、やっぱダメだわこの人」
俺はヒーローにならない。これはあの時、オールマイトのチャンスを貰う前から決まっていたことだ。
ヒーローは誰かのために個性を使う。けれど、俺にそんな気はないのだ。
俺はただ一人、たった一人のために力を使う。そのためにヒーロー免許が欲しくなった。ただ、それだけのこと。
歪で汚く、ヒーローを名乗る権利もない。こんな俺がかの有名な雄英にいる、まして特別枠で入ったなど、知らん誰かに申し訳なくなってくる。
ふっふふ～んと、鼻歌を歌いながら小町はキッチンに移動する。
こんな話、小町には聞かせられない。
一応、俺の編入は自分の意志で親に申し出たことにしている。まぁ全部が全部間違っているわけじゃないし。
手料理を待つ間、ぼんやりと天井を眺める。

俺の日常は少し変化した。なんてことない平凡な高校生が、個性的すぎる学園でヒーローになろうとしている。
個性も思考も、ともすればヴィランのようだ。けれど、だからなんだ。
オールマイトの言葉ではないが、自分の存在意義くらい自分で決める。決められる。
俺は妹を、小町を守る。そのために生きて来たし、生きていく。
この個性もきっと、そのために使えるはずだ。
戦うためにではなく、守るために。

翌日である。
朝のホームルームが終わると、俺たちは移動の連絡を受けた。
担任曰く、災害救助の訓練をするらしい。
確かに、朝からオールマイトの活躍がＲＴＡのごとく放送されていた。個性が広がった世界には人身も自然も有り余っている。災害は付き物ってことだ。
「コスチュームの装着は各自の判断に任せる。……と、誰か比企谷にある場所教えとけ」
そんな去り際の一言があったので、俺は飯田から特殊ロッカーの場所を聞いた。
ヒーローのコスチューム。編入の際にアンケート形式で聞かれたものだ。提出が他の連中よりはるかに遅かったと思うのだが、まぁ簡単に作れそうだしなこれ。
運動着とそう変わらない動きやすさのそれに着替え、バスに乗る。
にぎやかなクラスメイトに混じれず、俺はぼーっと窓の外を眺めていた。
「そういえば、比企谷ちゃん、コスチューム着てるのね」
通路を挟んで向かいに座っている蛙吹が言った。
それに同調し、周りの視線が集まる。やめて、見ないで！消えようかしらん。
「なんかー、地味だ」
「ほっとけ」
「いやさ、個性はともかく、コスチュームまで地味することなくない？」

相変わらず、エイリアンピンクの食いつきがすごい。何この子、俺のこと好きなの？ないな、うん、ない。

「いや、個性が地味だからこそだろ」

「なるほど！目立たなくする個性だから、それを活かせるようにってことだね」

ポン、と手を打ったのは緑谷。頭の回転が速いな。切島の時もそうだが、こいつの考えるって力はかなり武器になる気がする。

「ハッ、つまりは没個性ってことだろ。なァ転校生」

「……なにか」

なんか絡まれた。ヤンキーとかこういうとこにもいるんだな。お前本当にヒーロー志望なの？俺が言えないけど。

「お前、どうやって転校してきやがった」

「どうって、そりゃ普通に……」

「ンな話、聞いたことねェンだよ」

確かに、前例がない。

ここでオールマイトの名前を出すのは良くないだろう。なんとなくではあるが、俺が特別措置なのは察している。そのことは学校側からすれば知られたくない話だろう。

「まぁ、あれだ。コネがあってな。裏口ってやつだ」

「……チッ。言う気がねェならしゃべんな」

うわ、理不尽。

まぁ追及されないのはありがたい。ここはお言葉に甘えて黙ろう。

「そろそろ着くぞ」

イレイザーの一声で、バスの中は静まり返る。

一年Ａ組一同を乗せたバスは、謎の建造物に辿り着いた。

ＵＳＪ襲撃編
やはり俺の個性はまちがっている。

我らが担任の相澤先生に続き、どデカいドームへと俺たちは足を踏み入れる。
「比企谷、大丈夫か？」
大通りかとツッコミたくなる通路で俺に声をかけたのは、切島だった。
「おう。……いや、何が？」
「さっき、結構キツめに言われてたろ？」
「あぁ……」
さっき、というのはバスでのことか。恐らくあのヤンキーとの会話に関して、こいつなりに気を遣っているのだろう。
安心しろ、こういうのは慣れてる。もう慣れすぎて世間話として応えるまである。なにそれ悲しい。
「別に、なんともねぇよ」
「おお、そか。あいつ、爆豪勝己（ばくごうかつき）ってんだけどさ。あいつも悪気があるわけじゃねーと思うんだ。許してやってくれよ」

「おう、気にしてねぇよ」
「あァ？なんでオレが許してもらわなきゃならねんだッ!?」
なんか向こうでＢＯＯＭ！とか音がした気がするが、気のせいだな。
「あれでも入試一位なんだよ」
「マジかよ。うちのクラス大丈夫か」
言いようのない顔で言う切島。うん、本当に大丈夫か？あいつクラスで二番目くらいにヴィランくさいぞ。
ちなみに一位は俺。おっとクラス一位を超えてしまったぜ！良くない意味で。
そんなこんなで階段の前まで行くと、宇宙服姿の恐らく先生が待っていた。
その人は１３号というヒーロー名で、個性は『ブラックホール』。簡単な自己紹介でそう言っていた。ちなみにこの施設はＵＳＪというらしい。どうでもいいけど、いいのそれ？
今日はオールマイトが諸事情で来れないらしく、相澤先生と二人で授業を請け負うという。
１３号先生が災害救助に関するあれこれを説明し終えた辺りで、異変が起きた。
ＵＳＪの中央広間に、突如として黒い靄が発生したのだ。
壁のように広がった靄からは、誰とも知らぬ者たちが次から次へと出てくる。

「な、なんだあれ……？」
「入試ん時みたく、もう始まってるパターンか？」
「お前ら下がってろ！あれはヴィランだ！」
クラスメイトが不安を口にする中、相澤先生が怒鳴る。
ヴィラン、だと？
ここは雄英の施設で、ヒーローの巣窟と言ってもいい。そんな場所に、なぜヴィランがいる。
「は……？オールマイトが、いない？……ったくさ、予定変更までされてイラついてるってのに、いないとか、なんだよそれ……」
遠くてよく聞こえなかったが、リーダーらしい全身に大量の手を着けた男がこちらを睨んでいる。
「子供達を殺せば、来るのかな……？」
なぜなんて言ってる場合じゃない。こいつらの狙いは、少なくとも穏便なものじゃないはずだ。
警報機は鳴らず、通信機器も使用不能。俺のスマホも電波が遮断されている。
混乱が大きいこの場面で、相澤先生がアイマスクを装着した。
「１３号、生徒を頼む」

相手は大軍、それを一人でやる気か……？

そう思ったのは俺だけでなく、緑谷も抗議している。が、すぐに相澤先生、もといイレイザーヘッドは飛び出した。

そこからは圧巻だった。

一対多数の中で、イレイザーは敵の個性を消すことで連携を崩し、苦手であるはずの異形型にすら近接戦闘で立ち向かっていた。

強え。個性を消せない相手にも引かない近接戦闘術。それは、俺にも欲しいスキルだ……。

なんて、考えてる場合じゃない。

先生の指示通り、俺たちは逃げ道を目指して走り出す。

――が、その前にあの黒い靄が立ちはだかった。

「初めまして。私達はヴィラン連合。オールマイトを始末したく、ここにお邪魔させて頂きました」

驚愕の目的を告げる靄に13号先生だけでなく、生徒全員が臨戦態勢をとる。

「本来であればオールマイトがここにいるはずですが、何か事情があるのでしょうか？」

そんな問に応えるわけがない。

ひとまず、俺は身を守る為に息を吸う。

そして止めようとしたのとほぼ同時。
「「うらァァァッ！」」
吠える二人――切島と爆豪が飛び出した。
爆破と剛拳が霧へと突き刺さる。
「ンなもん知るか」
「先に俺らにやられるとは考えなかったのか!?」
「――危ない危ない」
しかし靄にダメージはないらしく、平然と続ける。
「私達の目的は、貴方達を散り散りにしてなぶり殺すこと！」
最中、黒い靄が奴の中央に収束していく。
まずい。何が起こるか分からんが、まず間違いなく攻撃が来る。
そうなると、切島はともかく個性が爆発系の爆豪に防御の手段はない。
どうする？奴の攻撃から守る手段は……。
答えを出すより先に、俺は走り出していた。
息は止めている。あの靄からは察知されていないはず。
俺の個性じゃ盾にもならない。
なら、爆豪の位置をずらす。予備動作すらない移動なら、相手の照準も合わなくなる

はずだ。
「――お前ッ!?」
俺は手榴弾らしき装備をしていない爆豪の左腕を掴むと、力の限り後ろに引いた。
集まっていた霧は周囲に広がり、クラスメイト全員を包むまでになっている。
まさか、範囲攻撃か……？だとしたら躱すとか関係ねぇじゃねぇか。
後悔は先に立たず、俺は何かに吸い寄せられるように視界を失った。

「はぁ……はぁ……」
目を開けたそこは、廃墟のようだった。ということは、あいつの個性はワープゲートみたいなものか。
「いい加減、離せッ！」
舌打ちとともに爆豪が俺の手を払った。どうやらこいつと一緒に飛ばされたらしい。
ワープは座標移動なのか？
「おお、爆豪……と比企谷。無事か？」

そんで、俺の左隣にいたのは切島。他のクラスメイトの姿はなく、ここにいるのは俺たち三人だけのようだ。

と、なぜか俺は爆豪に胸ぐらを掴まれる。

「おいてめェ！何庇おうとしてんだァ？オレはお前に助けてなんて言ってねェぞ！」

「……いや、もしあの時攻撃されてたらお前、防御手段なかっただろ」

「あァ？あるわ！つーかてめェが邪魔しなけりゃ普通に避けてたわッ！」

さいで。

いやこの人怖い、マジで怖い。俺別に悪いことはしてなくないか？ヒーロー志望ならもうちょい気の利いたこと言ってくれよ。あと怖い。

「まぁまぁ、今揉めても意味ねーだろ？」

場を和ませようと切島が割って入る。

だが和んでいる場合じゃなさそうだ。

既に壊れているドアの無い入口から、何人もヴィランらしき人達が入ってくる。団体様のお着きだ。

「随分な歓迎ムードだなおい」

「はッ、の割には汚ェ面ばっかだな」

「比企谷、爆豪、んなこと言ってる場合かよ……」

「やっちまえ!!!」
誰が言ったのか、そんな声が響いた。
その数秒後、爆発音と打撃音が鳴ることで部屋は静まる。
「お前ら、戦闘向き過ぎるだろ……」
爆豪と切島が飛び出したヴィラン二人を瞬殺した。殺してないけど。
羨ましい限りだ。俺もこういう個性欲しかったよちくしょう。
一瞬怯みこそしたが、数はあちらの方が上だ。ヴィランの団体様は再び襲いかかって来る。
「おい転校生。自分の身くらい自分で守れや」
「分かった、もう助けねぇよ」
「そういうこったッ!」
走り出す爆豪に対し、俺は息を止めて姿を隠す。ぶっちゃけ戦闘とかやってられないんだよなぁ。
爆豪の後に続くように、切島も前に出た。二人は打ち合わせもなく背中合わせに戦っている。
なんつーか、かっけぇな。これこそヒーローの戦いって感じだ。ヴィランに全然勝てるし。

だが、いくら二人が強くても敵は多い。持久戦になるのはまず俺が嫌だ。消え続けるとかできないし。

というわけで、微力ながら手伝わせてもらおう。助けるわけじゃない、あいつらが勝手に助かるだけだ。

近くのヴィランに、思い切りハイキックを食らわせる。

後頭部を強打したヴィランは、一瞬で気絶した。

「ふう……」

見えない相手からいきなり襲われたのだ。そりゃ倒れるだろ。

うん、やり口が完全にヴィランだなこれ。

「あ？なんだテメェ!?」

俺に気付いたヴィランが襲いかかって来る。やべぇ、敵多すぎ。迂闊に息吐けないんだけど。

どうにか息を止める。俺を見失ったヴィランは辺りを見回しながら立ち止まった。

動かない相手くらいなら、流石に当てられる。

見様見真似独学我流のハイキック。動画サイトで見ながら覚えたサバット式の蹴りを頭に打ち込んだ。

靴の爪先――ヒーローコスチュームとして微妙に改造された戦闘用シューズは、特別

製で金属を仕込んでいる。俺の筋力が弱くてもダメージはバカにならないはずだ。
案の定ヴィランは倒れ、まさかの二人撃破である。どうやら俺の個性は乱戦に使えるらしい。

その後、爆発に巻き込まれないように逃げながら、ヴィラン五人程を死角から襲撃した。マジでヒーローらしくない戦法だが、見逃してくれ。
爆豪と切島が大凡の敵を倒してくれたおかげで、あっさりとこの場の全員を戦闘不能にできた。
「やるなー、比企谷」
「お前らの方がはるかにやってるけど」
「……」
ヴィランの大軍は退けた。この先はどうするかだが、気になるのはやけに静かな爆豪だ。
「なんだよ」
「おい腐り目。お前の個性は何だ」

「何って、単に自分を認識されなくさせるもんだが。あと自分が持ってる物も」
やけに不機嫌そうな爆豪。
俺何かしたか？ご注文通りあいつの戦闘に割って入ったりとかはしてないんだが。ご注文はうさぎだったのかな？
「例えば、お前が個性を発動した状態で誰かに触れたらどうなる？」
「どうって……そうだな、触れられていることにすら気付かないはずだ。相当強く握ったり殴ったりしたら痛みとかは伝わるだろうけど」
「ンで、お前さっき、あのクソ靄からオレを庇おうとした時、個性は使ってたのか？」
「おう……」
だから何だ。
そう問うより先に、爆豪は行った。
「もう一回個性を使え。あン時みたいに、オレを掴みながら」
「は？」
「いいからさっとしやがれぶッ殺すぞッ！」
語尾が怖えよ。なんでそれだけで殺されなきゃならんの？
渋々、俺は息を止めて、あの時みたく爆豪の左腕を掴む。
しばらく無音が続き、爆豪はずっと俺の目を見ていた。

……は？

思わず息が漏れ、個性は解除される。

「はァ……やっぱりなッ」

何かを確信したように爆豪は呟いた。

俺らのやり取りを黙って聞いていた切島は、ここでようやく口を開く。

「爆豪、どういうことだよ？」

「おいお前、今俺とこの腐り目は見えてたか？」

「いや、見えなくなってたけど……」

「が、オレには見えてた」

「え？」

「つまりそういうことだ」

切島はまだ分かっていないらしい。

だが俺は、この事実を飲み込みつつあった。

さっき、個性を使っていにも関わらず爆豪は俺を見ていた。これはつまり、俺を認識できているということだ。

なぜ？爆豪には通じないということだろうか。

いや、それはない。さっきの戦いの中で、爆豪は消えている俺を認識できていなかっ

た。

でなければ、いくら自分で守れと言っても、あそこまで俺を気にせず個性は使わないはず。多分、恐らく、そうじゃないかと思う、思いたい。

まして今爆豪は条件付けしてまで確認を取った。

ということは……。

「さっきの説明、お前の個性に他人は含まれてなかったなァ？」

「ああ、俺も初めて知ったよ」

「なぁ、だからどういうことだよ？」

爆豪勝己、雄英高校1年A組首席。個性や実力だけでなく頭もいいらしい。

こいつはたった二回の発動で、俺すら知らなかった俺の個性の性質を見抜きやがった。

「俺の個性は、触れた者もステルスにできる――」

「みてェだな」

「マジかよ……」

切島、俺も同じ気持ちだ。まさかこんな使い方があるとは思ってなかった。まぁ、試す相手がいなかったんだけどね。

「で、なんでわざわざ教えてくれたんだ？」

こいつは俺をよく思っていないはず。
俺の問いに、爆豪は顔も向けずに答える。
「はッ……自分の個性も使いこなせねェ雑魚はデクだけで足りてんだよ」
どうやら、こいつはツンデレらしい。

やはり俺のやり方はまちがっている。

「で、これからどうすんだよ爆豪?」
俺の個性の隠された能力が明らかになったとはいえ、事態は何も変わらない。
切島の問いに、爆豪は目を合わせずに答えた。
「あのワープ野郎をブッ飛ばす」
脳筋かよ。いや、その前にそんなことできんのか?
いくら個性が戦闘向きとは言っても、あっちはオールマイトを殺そうとしてるような連中だ。それに対してこっちはヒーローの卵、ヒロたま。無理じゃん。
だから賛成できない。
「そんな簡単にはいかんだろ」
「ハッ、ンなこと言われるまでもねェンだよ。無策で飛び込むバカはいねェだろ」
「策があるってことか?」
「さっき、ヤツは危ないって言ってやがった。もしあいつが常時ワープ人間ならそんな発想はそもそもしねェ」
つまり、攻撃は通用するってことか。なら確かにこいつの、こいつらの個性は大きな

武器になる。
だが、だからと言ってそれが太刀打ちできる理由にはならない。
それに俺たちに下された命令は離脱。自己防衛ではなく戦闘のために個性を使うべきなのか。
「ちょっと待て。俺らが個性を使うのは自衛のためだ。それに、攻撃が通じるイコール勝てるじゃないだろ」
「はァ？今避けるべきは全滅とオールマイトが死ぬことだろゥが。何より、逃げるにせよ倒すにせよ、最後の最後にはあのワープ野郎が邪魔になる」
確かに……そう思ってしまった自分が情けない。
爆豪の言うことは理解できる。だが、それと同時に考えてしまうのだ。
――その行為は、果たしてヒーロー足り得るのか、と。
「おっし、爆豪！オレも付き合うぜっ！オレ達のせいで13号先生が後手に回っちまったんだ……自分のケツは自分で拭く！」
「ンで、お前はどうすんだよ」
「……」
冷静になれ。今ここでつまらないことにこだわる必要はないだろ。
そうやってまた言い訳すんのか。

違えよ、優先順位の話だ。俺一人が退学になるのと、ここにいるヒーロー候補全員が消えるのはどっちが良いかってな。

爆豪と切島、他の奴らも個性は使ってるはずだろ。

俺を首謀者にすれば全て収まる。

なら……。

なら、すべき事は一つだ。

「爆豪、切島、お前らの武器はなんだ？」

―第三者視点―

「ぐおぉぉ……」

悲痛な声が辺りに木霊する。

声の主は、黒い大柄の化け物の下敷きにされているイレイザーヘッド。

個性を抹消する彼の個性は、しかしその化け物には効かなかった。
人外の如きパワーによって潰された腕は無惨に腫れ上がり、砕けたアイマスクの下では酷使した瞳から血が流れる。
それを水面から顔を出して盗み見る緑谷、蛙吹、峯田。ワープで飛ばされた水難ゾーンを抜けた彼らには、その光景をただ呆然することしかできなかった。
そして、彼らとは離れた位置からイレイザーヘッドを眺める全身に手を付けた男――死柄木弔（しがらきとむら）の下に、黒い靄が移動する。
「は？」
「申し訳ありません、死柄木弔。生徒を一人、外へ逃がしてしまいました」
「は――あああぁぁぁ!?……お前がワープゲートじゃなかったら殺してるぞ」
それを気に、彼は投げやりな言動を繰り返す。もう無理だ、ゲームオーバーだと。
「もう、いいよ……終わりだし。終わりだから、せめて――オールマイトの教示くらいは、潰して帰――「――ねェやァァァ！」……は？」
突如、爆風と爆音が起こる。
驚きに動きを止めた死柄木は、音の鳴った方角を見る。
「先生……よかった、死んではいねぇみたいだ」
「勝手に殺してんじゃねェよ」

「……その怪我じゃまともに動けそうもないけどな」
先程まで脳無がいた地点。イレイザーヘッドの傍には、三人のヒーローの卵がいた。
「……は？」
死柄木弔は、ただ困惑する。

―比企谷視点―

なんだよコレ。
いや、本当になんだよこの状況……。
来たら先生はやられてるし、なんか遠くに緑谷たちがいるし、ワープ野郎は階段の上だった。
隠れて様子を見るにしても、状況が好転しないなら行動するしかない。そう結論を出した爆豪を止める方法はなかった。
そこで仕方なく、不意打ちに最大火力を当てる策に出た。
俺のステルスで爆豪を消しながら近付き、こいつの腕にある兵器を至近距離で浴びせ

る。

爆豪のコスチュームの腕部には手榴弾のような武器があり、それは爆豪の汗を溜めて大火力を撃てる様にするものらしい。弱点としては、チャージに時間がかかること。一発分は、さっきの戦闘で温まっていた。

曰く、奥の手として取っておきたかったらしいが、先生が勝てない相手に撃つなら先手油断不意打ちゼロ距離と最高に場の整ったここしかないと判断した。

そんで結果として巨体のヴィランをぶっ飛ばすに至ったが、問題はこの先だ。

「……は?」

リーダー格であろう手まみれの男は、こちらに完全に気付いてしまった。オマケに、上にいたはずのワープ野郎もこちらに来ている。

「2対3だってのに、勝てる気がまるでしねぇぞ」

「てめェが離れて2対2だ。戦う気がねェんなら下がってろ」

「そういう訳にいかんだろ。ワープ野郎はお前が抑えるにしても、個性不明の相手とタイマン張るのはいくらなんでも無理がある」

切島は爆豪を学年トップと言っていた。なら、戦闘力も間違いなくクラス一位だろう。こっちの心配は薄い。

問題はあの細身の男、ヴィランの親玉だ。前提として、相手は格上だ。さらに情報不

足な現状では、いくら防御力が高いといえど切島一人では分が悪い。
「俺の個性なら相手の攻撃を誘発できる。個性が割れりゃ、時間稼ぎくらいなら少しはできる」
「最初から勝つ気はねェのかよ」
「ワープ野郎がここにいるってことは、上にいるＡ組を抑える理由が無くなったってことだ。つまり、散り散りになったか逃げ切ったかのどっちかだろ」
「はッ、精々死ぬなや」
爆豪が両手の平を後ろに向ける。そのタイミングで、俺は爆豪と切島の手首を掴んだ。
そして、息を止める。
俺のステルスは感知されない。もちろん奇襲など想定していなかったヴィランは動揺している。さらに、いきなり目の前から人が消えた。
これで反応できる手練はそういない。
爆豪に捕まっての爆破移動。普段より速度は落ちるが、見えなければ簡単に近付ける。
「うらぁ！」
「死ねェ！」

俺が手を離すことで、爆豪と切島はワープ野郎の眼前に瞬間移動した様に見えるだろう。
鉄拳と爆発が無防備な首元に入る。
「黒霧――――！」
飛ばされるワープ野郎を見ることなく、俺は一度息を吐く。二酸化炭素と酸素の交換を行いながら、目指すは親玉。
あからさまな特攻に見せつけろ。無策で挑むように思わせろ。
およそ隙だらけだと感じさせるように、攻撃手段など考えずに突き進む。
「んだよ……何だよお前らっ！」
発狂と同時に、男の右手が俺に迫る。
何が来る？知らん。とにかく、延長線上から消える。
体を横に移動させながら、息を止めた。
すかっと空気を掴む男は、はたと動きをストップする。
相手はまだ俺の個性に気付いていない。あの動きがどういう攻撃の手段か分からないが、少なくとも切島のような個性ではない。
今なら、当てられる。
軸足を踏ん張り、腰を回し、右足をしなる様に振って、打ち出す。

サバット式のトウキック。鉄製の爪先を、男の後頭部に叩き込んだ。
その一撃を無防備に貰った男は、地面に倒れ込む。
「死柄木弔！」
遠くから声がする。方角的に、あのワープ野郎だろう。
一撃は入れたが、何をしてくるか分からない。ひとまず距離をとって、呼吸を整える。
反射的に攻撃しちまったけど、ダメージを与えて損はないはずだ。
視線を移せば、既に爆豪がワープ野郎に馬乗りになっている。先程攻撃した首付近を手で押さえている所を見ると、そこが弱点らしい。
残るはこいつか。拘束するにしても、個性が分からないじゃ近付けねぇし、バカかよ俺。くそ、どうする。
「比企谷、大丈夫か――！」
「……ろせ……」
こちらに走ってくる切島に応えようとする寸前、俺は誰かの声を耳にする。
「こ……ろせ……」
幻聴の類じゃない。俺はハッキリと殺意のある単語を聞きとった。
誰か、だと？愚問だ。
ヴィランに決まっている。

「脳無……っ、殺せ……っ！」
純粋な殺意が言葉として伝わり、何かが動く音がする。
何かが、来る。
野生の本能か、トラウマによる条件反射か。俺は咄嗟に個性を発動してしゃがみ込んだ。
経験上、この動きが最も攻撃を躱せることは知っている。
コンマ1秒の後に、頭上を物体が高速で過ぎ去った気配を感じた。
振り向いて理解する。俺の背後には、さっき倒した巨体のヴィランがいた。
なりふり構っていられない。
しゃがんだまま、四足歩行でヴィランから離れる。
すぐに攻撃は当たらないであろう距離まで下がると、俺はようやく酸素を取り入れることができた。
「うそだろ……」
「俺もそう信じたいが」
並んだ切島は驚くことしかできない。わかる、俺もそうだ。
爆豪の最大火力だぞ。A組でもトップクラスの一撃をゼロ距離で受けているはずなのだ。それでピンピンしてるとかマジでバケモンだろ。

「あんなの相手にしろってか……」
「しかも2対2っ」
「いや、あっちのはしばらくは動けねぇはずだ」
いくら個性がありヴィランと言えど、同じ人間なのだ。当然、人体の弱点はそのままヴィランの弱点たり得る。
後頭部。ボクシングでは殴ることを反則とされるほど、人にとって弱い部分だ。何せ脳が直接揺らされる。
無防備な所に後ろから鉄板で叩いたようなもんだ。人外でもない限り、簡単に全回復とはいかないはずだ。
問題は、目の前の人外だな……。
「これ、今度こそ死ぬだろ……」

やはり俺の戦いはまちがっている。

オールマイトを殺す。言うがやすしなんて言えないほどに、内容が絶望的なことだ。

もしも仮に、そんなことを本気で言い、本気でやろうとしているのだとしたら、そいつは余程の大バカか化物だ。

俺の目の前にいるやつは、果たしてどっちだろうな……。

イレイザーヘッドの個性抹消は強力だが、異形型と呼ばれる個性には効かない。異形型ってのは、簡単に言えば葉隠みたいな常時発動型のこと。斬魄刀でいうと斬月に当たる。

その情報からいくと、このヴィランは間違いなく異形型に含まれる。

さっき、ボロボロのイレイザーヘッドを見た。あの人の接近戦は決して弱い部類じゃないと今日既に見ている。なのに、おそらくこいつにやられている。

もしかしたら3対1だったのかもしれない。けれど、最悪の想定はしておくべきだ。

「比企谷……」

「ワープ野郎は爆豪が押さえてんだ。こいつらはこっちでどうにかするしかねぇだろ」

どうする。助けを呼ぶか。クラスメイト全員で殴りかかれば勝てない事もないかも

しれない。
何故すぐに人に頼ろうとする。第一、全員が全員戦闘向きな訳じゃない。人質にされたらそれこそ詰みだ。
そんなこと言ったら俺がここにいること自体間違いだろ。
戦闘向きじゃない上に不意打ちも初見殺しも使い切った俺に何ができるってんだよ。
くそ、何もねぇ。
「脳無……やれっ」
覇気のない男の声に反応し、異形のヴィランが膝を曲げる。
何をしてくるか分からない。
とにかく回避すべきと判断し、ステルス発動と同時に切島の肩を思い切り下に押し込む。
さっきと同じだ。しゃがめば大体の攻撃はスカる。
案の定、ヴィランが打った横の大振りは空を切った。
だが、俺たちはその一撃で今ある状況の圧倒的絶望感を味わうことになった。
速すぎるのだ。
ヴィランが踏み込んでから、その先が全く見えなかった。瞬きがあったのだとしたら、その一瞬で距離を詰められたということになる。

ありえない程に、あの化物は人間を辞めている。
もはや時間稼ぎなんて考えていられない。ここからは本当に、生死を分ける戦いだ。
ふざけんな。こんなのどう相手しろってんだ。目視不能な移動速度とかオールマイトかよ。
策はないかと切島を見る。
その表情と瞳には、恐怖が浮かんでいた。
だろうな。普通こんなことになりゃ怖えし、辛え。今頭の中で色々考えられる俺の方がイレギュラーだ。
とにかく、今は逃げるしかない。
異形のヴィランは俺たちを見失っている。息もそう長く続かないが、できる限り離れるべきだ。
肩に触れていない方の手で切島の手首を掴み、走り出す。勢いに引かれながら切島も足を動かし始めた。
何メートルなんて目測もよく分からないが、さっき俺がヴィランからとった距離よりは遥かに遠く。
溜めた空気を吐き出した段階で、異形がこちらを向いた。
「比企谷……オレ、オレ……」

さっき肩に触れて、今はナウで手首を掴んでいるのだ。こいつが震えていることは知っている。

けれど、悪いが気遣ってやる余裕がない。俺だってヴィランに襲われるのは久しいのだ。それも、こんな化物相手。

「気張れよ。お前の個性なら耐えられる」

保証はない。こんなのは口から出任せだ。無いよりはマシ程度の暗示なのだ。

「お、おう……！」

ガキンと、硬化した身体を打ち付ける音がした。

「あー……あー、もうさ、何なんだよ。……いい加減にしろよ……」

俺たちと睨み合いを続ける異形の裏で、頭を押さえながら細身の男が独白する。

男はまだ目眩がするらしく、立つことすらできていない。

「……分かったよ。めんどくさいけどさぁ、あー、頭いてぇ……分かったんだよ」

「このまま帰ってほしいところだが」

「帰るよ」

「マジで？」

「帰るけど、その前にお前……名前知らねぇや。とにかく、俺を蹴ったお前は、殺す」

「脳無っ！」と指示後のない声がトリガーとなり、異形は走り出す。

何度も同じ手が通用するとは思えない。上から叩き付ける様に攻撃されたら終わりだ。

「切島、散開」

「え――」

伝わるかは分からん。

俺はステルスで姿を消すと同時に右に走る。

異形の動きを目で追うことができない以上、先読みの回避しか術がない。

一撃が通る範囲から逃れて、俺が数秒前にいた地点を見る。

そこには硬化した切島と、何もしないヴィランがいた。

どういうことだ……？

ヴィランが切島を攻撃しない。なぜ眼前の敵を撃たない。

姿を消したのは俺だけだ。今奴には、切島が見えているはずなのだ。
とにかく、息が続かない。
慎重に、吐き出す。
――瞬間、地面を蹴る音を聞く。
異形は、俺の鼻の先まで移動していた。
……うそ、だろ。
ガード？できるわけがない。俺の貧弱な体で、イレイザーヘッドを一方的に潰せる奴の攻撃を受けられるはずがない。
肺に残った少ない酸素をフル活用して、強引に呼吸をストップさせる。
そして、できる最大限まで後ろに飛ぶ。パンチの衝撃を和らげる格闘テク。素人の俺にどこまで実践できるか謎だが、やるしかない。
刹那の後、衝撃が走る。
両腕が軋み、胸にクロスしたガードがめり込む。運動エネルギーは体を貫かんばかりに伝わる。
宙に浮いた俺は、そのまま後方へ飛ばされ、着水した。
急激な速度で水に打ち付けられるかに思えたが、背中に固い感触はない。
むしろ、人間的な柔らかさすら感じていた。

「……ぷはっ」
空気を求めて水から顔を出す。荒々しく全身に酸素を送り込みながら、俺は身体を支えられていることを自覚した。
「大丈夫、比企谷ちゃん？」
「蛙吹、か……」
アンダー・ザ・ワールドで俺を比企谷ちゃんと呼ぶのはこいつしか居ない。
「すまん、助かった」
「礼なら緑谷ちゃんに言ってあげて。咄嗟に指示をくれたのよ」
「緑谷？」
視線を前に向けると、緑谷と峰田が息を切らしている。
おそらく、蛙吹が俺を受け止める役、二人がブレーキの役割を請け負ったのだろう。とはいえ、あれだけの威力で飛ばされては減速もままならなかったはずだ。
しかし、やはり感謝すべきだろう。こいつらがいなかったら今頃全身骨折してるまである。
とにかく岸まで泳ごうとした時、激痛が走る。
「いてぇ……」
水を掻こうとした両腕、水の抵抗を受けたあばら骨。どちらもぼろぼろになってる。

折れたか？
両手は、動く。腕が折れてないなら腹の方も大丈夫だろうけど、クソいてぇ。
社畜（ヒーロー）ってのも辛いもんだな。
うぬぼれでも天狗でもなく、客観的に見て俺の姑息な個性無しでアレと渡り合えるビジョンが浮かばない。
体が動くなら、やる必要がある。
「比企谷ちゃん、無理したら……」
「無理してこのザマだからな」
もうすでに無理するしないのラインは超えている。
アレと戦うこと自体がもう無理な話だ。
だから、考えろ。
今俺がすべきで、奴らが最も嫌がることを。
今、既にヴィラン共の目的は交戦の続行ではなくなっている。
本職ヒーローが来る前に退散、これが奴らの現段階での目標。
ならなぜ逃げないのか。
よく分からんが、恐らくはあの手まみれ野郎の個人的な恨み。
俺を殺そうとしている。

ゾッとしない話だが、切島を攻撃しなかったことからもその確率は高い。
では、俺がすべきは囮による時間稼ぎか。
否だ。
それでは足りない。
もし応援が到着すれば、その段階で奴らは逃げる。それを止めるのは、あのバケモノがいる以上不可能に近い。
結論、俺がすべきは――。
「比企谷くん！」
「緑谷か」
俺が脳内会議を終わらせると同時、岸辺にいたであろう緑谷がこちらに泳いで来た。
「大丈夫？腕は」
「気にすんな。それより、俺を陸まで運んでくれ」
「でも、比企谷くん、その体じゃ」
「問題ねぇよ。そもそも戦う気はねぇんだ。最初から逃げ切り前提なんだよ」
「どの道、傷付いた体を水中に入れておくのは悪いわ。移動しましょう」
蛙吹に背中を押されながら、俺は広すぎるプールの岸まで運ばれた。
その間、あのバケモノは何もせずこちらを見ている。まるで何かを待っているよう

に。

俺が個性を使うのを待ってるってことか。

時間制限付きであることがバレたか、接近戦で仕留めるために距離を詰めたいか、あるいはその両方だろう。

蛙吹と緑谷に支えられながら、俺は再び奴の前方に立つ。

「下がってろ」

「待って比企谷くん。僕も、やる」

「いや、お前が一番ここにいるべきだ」

「どうして!?僕も一緒に」

「もし俺が死んだ時、真っ先に狙われるのは俺の近くにいたお前らだ。その時戦闘向きの個性持ちがいねぇと話にならねぇだろ」

「死ぬって……そんなのダメだよ！君は死なせない！僕も戦う！」

「だから……」

だめだ、こいつ。

いや俺の言い方もまずかったけど、今緑谷と言い合ってる時間はない。

とにかく納得できそうな話をしねぇと。

「すっこンでろ！デク！」

思考を別の方向に向けようとした最中、爆豪の声が轟く。
「てめぇがいても邪魔なだけなンだよ！分かれやクソナード！」
「かっちゃん……」
「まぁ、そういうことだ。それに、そこの二人を守ってもらわねぇと俺がうまく動けん」
「殺せっ、脳無！」
緑谷の返事を聞くより先に、男の殺意に満ちた叫び声を聞く。
それに反応するように、モンスターはまた動き出した。
すぐに息を止め、右に転がる。
体が条件反射してくれたようだった。
ヴィランの攻撃は俺には当たっておらず、奴のすぐ横に俺は移動していた。
こちらからは仕掛けない。
俺が狙うは、あの男だけだ。
息を止めたまま走る。
距離的に、最後までは続かない。だが、髪の毛一本を抜くくらいならできるはずだ。
走りながら、堪えきれなくなった肺へ酸素を送る。
俺の存在は既に露見した。
至近距離まで迫った手まみれの男へと俺は手を伸ばす。

今後、奴の逃げ道を塞ぐためにＤＮＡに関係するものを手に入れる。
それが今の最善手。
俺は男の背後から、後頭部へと手を伸ばし――眼前に現れた手に頭を鷲掴みにされた。
「なっ……」
「何度も見れば分かるよ、透明になれるお前の個性ぃ」
バレた。
いやそれ以前にこれは、ワープ能力の応用ではないか。
ワープ野郎は爆豪が押さえてるはずじゃねぇのかよ。
男の指の隙間から見ると、爆豪に押さえ付けられた黒いモヤがいる。
当然、この行動に爆破で応える爆豪。
それを奴は、背後に大きく広げたワープホールで回避した。
一瞬の油断、いや、誤算と言うべきだ。
まさか、ノーモーションでワープを繋げ、俺が捕まるとは思わなかった。
自惚れた、過信してしまった。
「さてと、これで形勢はこっちのもんて事だよなぁ？」
人質を手に入れ、ワープホールが使用可能。

なるほど、確かにまずい。
俺の個性が、透明化ならな。
「……は？」
俺の個性の発動中、誰も俺を認識できない。俺に触れていることすら感じることはできない。
相手のミスは、即座に俺を個性で潰さなかったことだ。
掴んでいるはずなのに、その感覚が消えている。
そんな異常事態が起これば誰だって戸惑う。
だから隙が生まれる。
緩んだ手から頭を抜き、今度こそ奴の髪を掴む。
そして、力の限り引き抜く。
腕力によって生じるエネルギーはそのまま伝わる。
これは感覚の矛盾だ。
掴まれていることは感じないのに、引っ張られている感覚を感じる。
俺は髪を何本か引き抜き、すぐにその場を離れる。
「痛えぇ。はぁ？何、何されたんだよ俺は！」
激昂する細身のヴィラン。その横にワープ野郎が現れる。

俺は一定の距離を取ってから個性を解除した。
何やらモヤと男が話している。
「比企谷っ！危ねえっ！」
その様子を見ていた矢先、切島の声を聞いた。
声のする方を振り向くと、俺の真横に化け物（ヴィラン）がいた。
もはや反応すらできない距離。個性を発動してから避けるのでは間に合わない。
本気で、死を覚悟した。
「死――ッねェエエエ！」
そんな俺の頭上を通過して、化け物の顔面に爆発を叩きつける男がいた。
その一瞬の間に、どうにか体を動かしてヴィランから離れる。
マジで爆豪がいなかったら死んでた。
「悪い、助かった」
「助けてねェ。それより、オレのヘマはオレが片付ける」
モヤの一瞬の挙動を見逃したのは俺がやられそうになったせいだろうが、それでもこいつなりに責任を感じているらしい。
さて、さしあたってはこの状況だ。
どうするか。

「おい、透明人間」
「あ？」
「三秒で選べ。そこで死ぬか、こっちに来るかさぁ」
そう言ったのは、あの細身の男。
やつは言いながらある方向を指さしていた。
示す先には、あの三人――緑谷、峰田、蛙吹がいる。
それはつまり、俺が行かねぇと三人が死ぬってことかよ。
確かにワープを使えば一瞬だ。
そうしないのは、俺を自らの手で殺したいからか。
俺は両手を上げ、ゆっくりと歩き出す。
俺の命と他の三人の命、天秤にかけるまでもないことだ。
覚悟を決めて進む俺の肩を、爆豪の左手が掴んだ。
「てめェ、どこ行く気だ？」
もちろん分かっている。
奴らが、交換条件など出す気はないと。
「爆豪」
「あン？」

「お前、無理すればもう一発撃てるんだよな」
「……おい、てめェ」
肩にある手を振りほどいて、爆豪に背を向ける。
あいつは優秀だ。たとえ今は伝わらずとも、必ず気付く。
化け物は俺を襲ってこない。
ヴィラン二人も、俺が近付くその様子を見ている。
1歩、2歩、徐々に距離は縮まる。
「――そういや、言ってなかったな」
その場にいる全員に聞こえるように、できる限り声を張りながら。
「俺は死ぬ気も死なせる気もねぇよ」
走り出す。
目標は、水辺にいる三人のいる場所。
やはり、俺の行動を見た男はワープを使って俺ではなく緑谷達を狙う。
俺は振り向く。
視線を交わすのは爆豪。
アイコンコンタクトだけで俺の意志を把握したあいつは、俺に両手を向けた。
「加減はしねェでやるよォ！」

爆豪が出せる最大爆発力。
武具ではなく身体能力によって発生した衝撃を生む大爆発は、俺の背中に爆風をぶつける。
人1人を吹き飛ばす勢いに身を任せながら、俺は息を止める。
認識できない俺を迎撃はできない。
蛙吹と峰田を庇うように立つ緑谷と、その眼前に立つ細身のヴィラン。
襲いかかる寸前まで来ている状況では、俺のパンチやキックでは奇襲できても危機的状況は変わらない。
だから、同級生を三人まとめて、抱きつくように水の中へ掴み落とす。
水しぶきを上げながら水中にダイブしながらも、俺の個性は発動している。
俺の触れている三人もまた、ステルスの共有ができているはずだ。
あとは、ひたすら耐えるだけ。
沈みながら、ゆっくりと確実に酸素は欠乏していく。
意識が遠のいていく……。

やはり俺の目標はまちがっている。

目覚めたのは見慣れた天井だった。
背中に柔らかい感触があることを鑑みると、ここはベッドの上らしい。
視界を左右に揺らし、カーテンで仕切られたスペースであることを知る。
つまり、保健室である。
それにしても記憶が曖昧だ。
ヴィランに襲われて、そっからどうしたんだっけ？
いや、確か水の中にダイブした記憶はある。あれ？もしかして俺死んだ？ここ天国？
流石に天国に保健室はないよな。つか、できればプレイヤーｄｅａｄルートも勘弁なんだけど。
「あら、起きたのね。比企谷ちゃん」
そんな現実味のない妄想を引き剥がしたのは、知った少女の声だった。
起き上がろうとしたが、体に力が入らん。
ベッドの傍にいた蛙吹が言うには、俺は個性を使いすぎたらしい。
個性は身体能力だ。使えば疲れるし、摩耗する。

しかも俺は、自分でも自覚していなかった個性のもう一つの特性まで何度も使った。例えるなら、限界以上の速度で走ったことのない距離をマラソンした後だ。動けるわけがない。

「それで蛙吹。あの後どうなった？俺は何日寝てた」

「そんな大袈裟に眠ってないわよ」

蛙吹はそう言うと、立ってカーテンを除ける。

窓から入る日差しは既にオレンジに染まっており、夕陽は山の影に向かっていた。

朝からあの騒ぎだったのだから、俺は半日寝てたって感じだろう。疲れが残ってるわけだしな。

それから椅子に戻った蛙吹は、後日談というか今回のオチというか、あの騒ぎの顛末を話した。

俺達が水中に逃げてから数秒後、最強の助っ人であるオールマイトが到着したらしい。

ヴィランはオールマイトを殺すという目標は諦め、すぐに撤退したという。

もっとも逃げたのはあの場にいた三人のヴィランだけで、散らばった有象無象は全員、後からきた警察に引き渡されたそうだ。

怪我人は俺を含めれば二人。
ボロボロになっていた担任の相澤先生は、現在治療中らしい。詳しくは蛙吹も分からないらしいのだが、命に別状はないそうだ。
「改めて、俺はうまく動けたのか不安になるな」
俺が動かなかったらどうなったか。それは分からない。
俺のコスチュームのポケットにはあの戦いで得たヴィランの髪の毛があるが、今思うとどこまで捜査の役に立つのか。
俺の行動は間違いだったのか。
「比企谷ちゃん、ごめんなさい」
俺は自問自答の最中に聞いた声に反応できなかった。
何故か俺に頭を下げる蛙吹を見て、何か謝罪の言葉を聞いた気がしてようやくさっきの発言を思い出す。
「何がだよ。お前、別に何もしてねぇだろ」
「そうね、何もしてないわ。……何も、できなかったわ」
俺は蛙吹梅雨という少女のことを何も知らない。
名前や容姿、個性こそ知ってはいるが、それをそのまま蛙吹梅雨という一人の存在に置換するにはあまりにも情報不足だ。

そんな何も知らない俺から見て、彼女は頭がいい。
洞察力や冷静な判断力は、前に模擬戦で組んだ時も伺えた。
だからあの時、彼女が加勢に入らなかったことは正しい判断だと思う。
爆豪の攻撃も耐え、切島の防御も貫きかねない力を持った敵など立ち向かう方がおかしい。
それに、むしろ。
「お前がいなかったら俺は、今頃全身複雑骨折で速攻入院だし、場合によっては棺桶直送だったぞ」
あの時、飛ばされた俺を庇ってくれたのは助かった。
「だから、まぁ、なんだ。ありがとな」
一応礼は言った。正直体が動かないから寝たままだし、誠意とか伝わるか怪しいけど、言うことは言った。
「……お友だちを助けるのは、当然でしょ？」
「友だちねぇ……そういうカテゴライズされたの初めてだわ」
「えっと、何かしら。今物凄く悲しいことを打ち明けられた気がしたけれど……」
「安心しろ。とっくに悲しいとか思うところは超えてる」
「余計に悲しいわ」

軽口というか、いつもの毒舌が戻ってる気がする。
心做し、落ち着いてくれたみたいだな。
汐らしくされても困るのだ。まだ塩対応の方が慣れてるまである。
首だけ動かして見た蛙吹の表情は。しかしまだ浮かばれない。
「私にも何かできたら、比企谷ちゃんが怪我をする事も無かったのかもしれないわ」
「怪我って、別に体は痛くないんだけど」
「保険の先生が治してくれたのよ。治癒する個性で」
そういや居たんだっけか。最強ヒーラーのヒーローさん。
怪我といえば、あのバケモノにぶん殴られたときの奴か。
「別に、この怪我は俺が俺の意思で動いて負ったもんだし。お前が気に病むことはねぇよ」
「それでも、嫌なのよ。お友だちが傷付くのを見るのは」
「それは、まぁそうだな」
お友だちなんていた記憶がねぇし、蛙吹の価値観を測るだけの理解も持ち合わせていない。
けれど、彼女の気持ちは何となく分かった。
俺も、傷付いて欲しくない奴が、バカな妹がいるから。

「だから、こういうことは、もうしてないで欲しいわ」
「それ、ヒーローとしての活動全否定なんだけど」
「それは違うわ。自分を守ろうとしないことは、ヒーローとしても失格なのよ」
俺は俺自身を捨て駒にしたつもりはない。
ただあの場で、もっとも被害を少なくする手を選んだだけだ。全滅が前提だったのだから、このくらいの被害は許容範囲だろう。
「まぁ、俺も痛いのは嫌だからな。もうしねぇよ」
「そう。それなら良かったわ」
そこまで言って、蛙吹は立ち上がる。時間も時間だし、そろそろ帰る頃合いだろう。
カーテンの隙間に手を入れ、彼女は振り向いた。
「前に、梅雨ちゃんと呼んでって言ったの。覚えてる？」
「ん？あ、ああ、模擬戦の時な」
「私、お友だちになりたい人には、そう呼んで欲しいの」
笑顔で言う蛙吹は、俺の返事も待たず足早に部屋を出た。
お友だちになりたいとか、人生で初めて言われた気がした。
蛙吹梅雨。ほんと、優しいやつだな。
けれど俺は知っている。

俺に優しいやつはみんなに優しくて、結局はそれだけの事でしかない。
何度も経験して、見てきた。
俺は今まで何度となく、ヴィランという不名誉な呼び名を付けられた。
その度に、形だけでもヒーローを志すやつらが、守ろうと、救おうとした。
けれど俺は知っている。
そいつらが守りたいのは俺ではなく、守ろうとしている自分自身なのだと。
ただ、ヒーローはこうするからと。そんなテンプレートに自らを投影させる行為そのものに価値を見出しているだけなのだ。
きっと、優しさとは夢だ。幻だ。幻想だ。
優しさの裏には常に、各々の事情と心情と都合がある。
誰かを助ける行為に理由はいらない。理由など、他に求めることはないのだ。
自分自身の都合という、もっとも合理的で独占的な理由があるからだ。
だから、俺は優しい女の子は嫌いだ。

翌日である。
疲れた体を引きずって帰り、小町から親戚のばあちゃんかってくらい心配されて内心ハッピージャムをダンシングしてから一夜明けている。
新聞にはデカデカと雄英のヴィラン襲撃事件の話が載っていた。
いつもに増してうるさいマスコミを個性で避けながら登校した俺は、教室に入るや否やある男に呼び止められた。
「比企谷っ！昨日はスマンかったっ！」
まったく暑苦しい。
扉を開けて早々に切島の叫び声を聞く俺の身にもなって欲しい。あの比企谷八幡が目立ってるぞ。
そんな暑苦しさの権化は、しかし何故か俺に頭を下げていた。
なんだこれ、ドッキリか？もしかして昨日の蛙吹からネタ振りしてんの？これからクラスメイト全員が謝りに来る新手のいじめ？
安心しろ雄英にいじめはない。

「は、何、昨日のヴィラン手引きでもしたの？」
「いやしてねーけど。そうじゃなくてっ！オレ、戦えなかった」
切島らしくない暗い顔だ。
別に親しい間柄でも知った間柄でもないが、こういう表情をされると流石に気を遣う。
ほら、ぼっちは気遣いの達人だから。
「十分戦えてたろ。つか、俺の方が余っ程戦力外な個性なんだけど」
「全然だろっ！オレは、あのでけーヴィランが襲って来た時、怖くなった。そんで、体が動かなくて、そのせいで比企谷が……」
「待て待て、俺生きてるから。それ完全に故人を語る流れだから」
つか何故そうなる。ヒーロー科ってのはみんな自責の念を持たなきゃいけない決まりでもあんのか。なら間違いなく俺が首席だろ。
蛙吹にも言ったことだが、ああして怪我したのは俺の実力不足であって、俺以外の誰にも責任はない。
というか、悪いのは全部あのヴィラン共だろうて。
「俺の戦闘力が低いのは認めるが、過保護を受けるほどとは思ってなかったぞ」
「あっ！悪ぃ、そういう意味じゃねーんだ。ただ、比企谷が戦ってんのに、オレは何もで

きなくて」
何そのセリフ、デジャブなんだけど。
こりゃドッキリ説が牛乳からヨーグルトに格上げになったな。多分ないけど。
「それが普通だろ。誰だって怖ぇし、初めて襲われて動けるやつなんざそうそういねぇよ」
「けどっ、比企谷はできたじゃねーか」
「俺は経験があっただけだ。だから気にするな。どうしても過去の自分が許せないなら今後に活かせ。過去はどうやっても変わらん」
シン……と、教室が静まり返る。
え、何これ、音声さんの故障？
静寂を、古池が無いのに岩に染み入りそうな声が破った。
「比企谷ちゃん、先生みたいね」
その一言から、再び教室に活気が戻った。
なんてことはない。一つの話題ができただけだ。
「そーだよな……。ありがとうっ！比企谷っ！おかげで目覚めた！」
「おー、そうか」
「オレは、今度こそ逃げねー、負けねー、曲げさせねー。絶対に、護れる漢になるっ！」

「おー、そうか」
「ありがとうっ！比企谷先生っ！」
「おー、そう……じゃねぇな。先生じゃねぇな俺」
俺のツッコミは華麗にスルーして、切島は満足したように席に向かった。
誰が先生だ。あとであの毒ガエルには文句を言っておこう。心の中で。
朝から悪目立ちしてしまった不機嫌さをどうにか紛らわせようと、俺も席に着く。
その机の前で、一人の少女が止まった。
「ありがとね、比企谷」
「ん、芦戸か。いや、何が？」
「切島のやつ、結構気にしてたみたいでさ。今日も朝一で登校して比企谷のこと待ってたみたいだし」
「ほーん」
まぁ、自分のせいで誰が怪我をしたとか考えてたならそういう行動を取るのもわかる。
しかし、何故芦戸が礼を言う？仲良いの、彼女なの。
もしも切島がリア充なら今すぐ俺がアサシンするところなのだが。
流石にないか。もしあってもお友だちくらいだろう。もしくは都合のいい男、いい

人。

何それ悲しい。今すぐ俺がキャスターでヒールかけてあげたいくらい悲しい。

「おかげで元気になってくれたし、良かったよ」

そういうと、芦戸はがっくりとしていた俺の顔を覗き込む。

「ありがとうね、ヒッキー先生」

「……っ」

近い、近い近い近い近い近い近い近い近い。

前から思ってたが、こいつにはパーソナルスペースって知らないの？今すぐググってページをお気に入りに追加してホーム画面に表示して欲しい。

動揺を隠すように、ため息を混ぜながら顔を天井に向ける。

「俺は何もしてない。それと、俺は働く気はない」

「否定するとこ、そこなんだ……」

誰が教師になんぞなるか。公式ブラック社員だぞあれ。

「えー、来週に体育祭があります」

ついさっき俺が存在を全否定した職業の方、我らが担任相澤先生よりそんな告知があった。

相澤先生はミイラ取りに行ったのかと質問したくなるくらいにミイラだった。

雄英高校体育祭。

個性という超常現象によって、今までのスポーツの根底は覆った。それに伴うオリンピックという過去の人類スポーツ大会は衰退。

有り余った活気を別ベクトルに活かそうとするように、今は雄英すなわちヒーローの卵による体育祭が現在日本で最も熱いスポーツの祭典となっている。

そんな国規模のイベントの主役となるのが我々雄英生。

この体育祭はプロのヒーロー事務所からスカウトを受けるなど、ヒーローとしての未

来に関わるものだ。
当然、俺は棄権したい。
何が体育祭だ、ふざけんな。
俺はプロのヒーローになる気はない。というか働く気がそもそもない。
一億歩譲って俺がヒーロー志望だとして、目立つことこそ美とされる大会で、どうやってこの個性を活かせと？目立たないことが唯一無二の武器なんだけど。
というわけで俺は当日仮病で休んで丸一日、本と惰眠と飯を貪って過ごすつもりだ。
「――というわけで話は以上だ。各々、自分がすべきことをして備えるように。あと、比企谷。放課後俺のところに来い」
「……うす」
そうは問屋が下ろさないらしい。
というわけで放課後。
重い足を空元気で動かしながら職員室を訪れた。
相澤先生は自分のデスクではなく、隅にある応接間的なテーブルへと移動した。
「さて。まず聞いておきたい」
「なんすか」
「お前、過去にどれだけ個性を使ったことがある？」

いきなりしんどい質問だ。
一瞬、オールマイトの顔を思い出す。彼は俺の過去を話したのだろうか。
いや仮に話したとして、ならこの質問の意味はなんだ。
正直、嘘言ってバレてキレられてのパターンが一番怖い。ので、真実を話した。
「えっと、結構便利に使いました」
「頻度は？」
「まぁ、毎日ですかね」
「どれだけの時間だ？」
「授業中とか、声掛けられたくないんで。あ、いや、高校ではちゃんと受けてますよ」
「一つの授業に、何度だ？」
「何度というか、できる限り」
「それをいつから続けていた？」
「小一でいじめられた辺りからは気配消すようにしてました」
「……なるほどな」
目を閉じながら、先生は納得したとだけ言った。
「何がですか」
「お前が、個性を応用できたことだ」

「応用?」
「普通、高校生なら自分の個性を使いこなすところまではできるようになっているもんだ。一部例外もいるがな」
相澤先生の言う例外というのはどうやら緑谷のことらしいが、今はどうでもいいか。
「大体の生徒は個性の強さがほとんど同じだ。だがお前は、あのクラスで個性の強さが飛び抜けている」
「個性の強さ?いや、俺の個性はそこまで強力じゃないと思うんですが」
「そういう、力としての強さじゃない。強いて言うなら、質だ」
「質……」
「個性とは身体能力だ。腕を鍛えれば筋肉が付くように、個性も鍛えれば質が上がる。お前はその、個性を鍛えるという工程を他のクラスメイトよりも繰り返し積んできている状態なんだ」
なるほどと思える話だった。
概ねどこも一緒だと思うが、小中と校則として授業中の個性発動は禁止とされていた。そりゃ、爆豪みたいな危ねぇ個性が動いたら授業どころじゃないからな。
俺はそのルールを破っているわけだが、まぁ証拠は残らないから問題なかった。
しかしそのルール違反は、俺の知らぬところで成果となっていた。

義務教育の9年間、毎日五時間以上、同級生より余分に個性を使っていたのだからその質とやらが変わるのも頷ける。
その成果の一つが、物だけではなく者もステルスにできるのようになっていたことなのだろう。
「それが聞きたいことですか」
「ヴィラン襲撃の際、お前が個性を使いすぎて倒れたと聞いてな。少し気になっていた」
よくよく思えば、倒れるほど個性を使ったの初めてだった。
初めて使う新技を連射したのもあるが、俺はまだ自分のキャパシティを把握しきれていないらしい。
「じゃあ、用はそれだけで？」
「いや、本題はこれからだ」
「まぁ、そうですよね」
「お前には、体育祭で優秀な成績を残してもらう」
嫌な予感はしていた。
なんならこう来るんじゃないかと思っていた。
もしかして俺の個性って『予知』だったりしない？
「できなかったら今度こそ退学ですか」

「よく分かったな」
「まぁ、そのやり口は体験済みなんで」
「今回はちゃんと書類も用意している」
そう言って相澤先生が差し出したのは、正式な判と学校長の名前や相澤先生の本名が書かれた紙。
その条文には、『体育祭での成績次第で、一年Ａ組２１番比企谷八幡を退学処分とする』とあった。
「なんでここまで」
「今受けた自供も踏まえ、ヴィラン襲撃の際の命令違反、雄英入学の特別措置。これらを総合しての判断だ」
なるほど、俺は疑われているのか。
今思えばあのヴィラン襲撃事件は、雄英の時間割を把握した上で行われている。ならば当然、内通者を考えるだろう。
そういった中で、ＵＳＪでの俺の行動や裏口からの入学は完全に犯人第一候補の判断材料になりうる。
しかし俺は内通者じゃないし、ヒーローの免許取得までは雄英を辞めるわけにはいかないのだ。

「拒否権は、ないですよね」
「あくまでも報告だ」
「分かりました」
ヒーローになりたくない俺が、なんで体育祭優勝を目指さないといけないのか。
世界は謎と不条理と素敵じゃない何かでできているらしい。

体育祭編

やはり俺の体育祭はまちがっている。

やって来ました体育祭。

一週間という準備期間はキング・クリムゾンしたように終わってしまった。

会場は見渡す限りの人、人、人。見ろ人がゴミのようだ。今すぐバルスしたい。ヴィランかよ。

残念ながら滅びの呪文はなんの意味もなく、俺達雄英一年生は開会式を迎える。

なんかうちのクラスの学年トップが訳分からん選手宣誓してた気がするが、どうでもいいや。

第一種目は障害物競走。

一年生全クラス同時に行うレースは、雄英が用意した文字通りの障害物を超えねばゴールできないものらしい。

障害1――仮想ヴィランロボット。

巨大なロボが生徒達に襲いかかる。誰もが個性を使っての攻撃や防御、移動法を使って抜きにかかる。

俺は普通に息を止めて素通りした。

障害2――切り立った崖の綱渡り。

ある者は飛び越え、ある者はロープの上を滑り、ある者は慎重に一歩ずつ進んでいく。

俺も落ちて死にたくないので慎重に進んだ。

障害3――地雷原。

爆発は体を傷付けない程度のものだが、当たれば確実に順位が落ちるサバイバルコース。

ちなみにステルス中の俺には起爆しないようだった。本物の地雷と違い、踏んだことすら感知できないらしい。

そんなこんな色々あって、激しい一位争いを制したのは緑谷だった。
俺はほとんど中間の順位でゴール。上位６０名が第二種目に参加できるらしい。
ちなみにＡ組の中で、１人だけ第二種目にいけなかった奴がいたけど、触れないでやろう。

第二種目は騎馬戦。
四人一機の騎馬となり、順位に応じたポイントの記されたハチマキを取り合う。
二位から下は妥当なのだが、一位だけはクレイジーな桁違いの点数が送られていた。
こりゃ、いかに緑谷を潰すかのゲームになりそうだ。
さて、審判を務めるＲ１８ヒーロー（ヒロイン？）の掛け声のもと、チーム決めの時間が始まった。
そして、溢れた。対ぼっち専用の罰ゲームタイムの始まりだ。
しかしよくよく考えれば、俺がハブられるのもわかる。俺の個性はこういう場面では

使いにくいだろう。
逃げるにしても時間制限付きの個性。ステルスでハチマキを盗むにしても、騎馬全体を消せるほど俺のキャパはデカくない。
多分一度にステルスを共有できるのは二人までだ。それ以上は気絶覚悟の大技になる。
しかもステルス共有をまともに知っているのはごく一部のクラスメイトのみ。
その知っている爆豪や切島は早々に勝つための布陣をつくり、緑谷達からのお誘いもない。
これ、詰んだ。バイバイ、俺の雄英生活。バイバイ、俺の未来設計。
「なあ、あんた」
果てしない空を眺めていると、後ろから声をかけられた。
聞き知らぬ声だ。他のクラスの奴だろうか。
「空いてるなら、俺たちと組まないか？」
振り向いた先には、薄紫の髪をかき上げた男がいた。やはり別のクラスだ。少なくともA組にはいなかったはず。
渡りに船だ。あちらからすれば余り物を引いて不運だとは思うが、俺にも事情がある。精々頑張らさせて頂こう。

「おう」

そこから先、記憶が無い。

気がついたら騎馬戦が終わっていた。

んで勝ってた。

何を言っているかわからねぇと思うが俺も何言っているかわからなねぇ。恐ろしい何かの片鱗を味わった気分だ。

まぁ恐らくどっかの誰かが上手く個性を使ってのどうにかしてくれたんだろう。何もわかんねぇし本当に怖ぇけど。

そんなこんなで、上位４チーム１６人によるタイマンのトーナメント戦が始まる。

途中、クラスメイトの尾白が棄権したりして一部メンバーチェンジもあったが、プログラムは順調に進んだ。

第一試合は緑谷と俺を誘ってくれた余り物ハンター。
クラスごとに割り当てられた席で、尾白から『洗脳』という個性の話を聞いた。
なるほど、俺は洗脳されて騎馬戦に挑んでいたのか。
そんな洗脳ＶＳ超パワーの試合は、洗脳を超パワーでねじ伏せた緑谷の勝ちだった。
脳筋かよ。

第二試合へと移行し、緑谷が観戦スペースに戻って来た。
それから、なんかめっちゃブツブツ言いながら何かをノートに書いていた。オタクか。
「デクくん、すごいね」
麗日に同意だわ。
なんかクラスメイトのものまでまとめてるらしい。オタクすごい。オタク怖い。
続々と一回戦のスケジュールを消化して行き、俺の出番まで回って来た。
やだなー、やりたくないなー。
第五試合目。
プレゼントマイクのパフォーマンスボイスが入る。
『立て続けに行くぜ第５試合！クールな割に、やる事なす事えぐい奴！比企谷八幡!!』

それ、褒めてないよね。

『ＶＳ!!あの角から何か出んの？出んの!?芦戸三奈!!』

選手紹介ならもうちょい真面目にやれよ先生。

にしてもやりにくいな。女子と殴り合いやれとか無茶ぶりにもほどがある。ほら、俺紳士だから。

「負けないよヒッキー！」

「できれば負けて欲しいし、あとヒッキーはやめろ」

準備運動からやる気に満ち溢れている芦戸。やっぱそうだよな。

ここにいるほぼ全員が、この大会に自らの夢、希望、未来を賭けている。諦める気などあるはずもない。

『第５試合、スタ――――ト！』

マイクから広がる声をゴングにし、互いに構える。

芦戸は両手を開いて脇を締めた。個性を考慮すると、溶解液の投擲ってところか。

俺とやり合うなら長距離戦こそあっちの領分だ。

もちろん、俺は持ち前のステルス機能で対応する。

『比企谷は個性で姿を消した！対する芦戸は――』

「逃がさないよ！」

『消化液の雨で襲いかかるぅ！』
範囲攻撃というにはそこまで広くない。恐らく遠くまで飛ばすことはできないのだろう。
それでも、酸の水滴を飛ばすのは十分に効く。
ガードなんつー選択肢はない。とにかく横移動で攻撃範囲から離れる。
一方的な毒の雨を避け、限界を感じて息を吐く。
芦戸は、攻撃の手を休めない。
サイドスローから放たれる液体を、ステルスしつつ斜め前方に転がりながら回避。
直ぐに立ち上がり、脱いだ靴を握る。
そんで、ぶん投げる。
「痛っ……靴!?」
『どっから飛んできた!?なんかシューズが芦戸にヒットしたぞ！』
誠に申し訳ないが、顔面にヒットした。怯んだ程度なのは、芦戸自身の身体能力の高さ故か。
それでも怯んでいる。攻撃は止み、一瞬の隙が生まれている。
あとは、前と同じだ。
タックルで芦戸の腹を押し飛ばし、場外まで突っ走る。

『恐らく比企谷だ！芦戸が透明な何かに押されているぞ！このまま場外かぁ!?』
「まだ、だぁ！」
俺のことは認識できていない。だが力が加わっている以上、俺が押していることは自覚できる。
芦戸は浮きかけた体のバランスを整え、踏ん張る。どんな運動神経してんだこいつ。
俺の場所自体は既に割れている。この至近距離では芦戸の攻撃を避けるのは無理だ。
芦戸の両手にはリングの石も溶かせる液体が輝く。
『堪えた芦戸。今度はこっちのターンか!?』
「くらえ！」
ゼロ距離から芦戸の攻撃が来る。
あんまり女子に触れたくなかったし、できればやりたくないんだが。
体育祭を報告されてからの一週間。
相澤先生から個性の質を教えられた俺は、それ以外の部分を鍛えるために使った。
その一つは、実践的な近接格闘術。
一週間という短期間で身につく程度の技だが、ステルス込なら応用も利くし実用性も高い。
例えば、ナイフを持った相手への対応術とかな。

大凡の場所しか把握できていない芦戸は、必ず目の前を狙って手を突き出す。
その右手首を左手で掴み、反対の手の平で芦戸の肘を曲げる。
そのまま、芦戸の手首を掴んだままの左手を押し込み、溶解液の着いた手の平を芦戸の首下まで近付ける。
息が続かないため、ここでステルスを解除した。
芦戸は動かない。
『と、止まった――？芦戸と比企谷、至近距離で沈黙しやがったぞおい！』
手の平から溢れた酸が、たらりと落ちて芦戸のジャージの一部を溶かした。
「寸止め……？なんで……」
「いや、流石に顔にぶつけるのはどうかと思ったんでな」
「一応、気遣ってる？」
「まぁ、一応な」
「ちなみにだけど、手加減されるのは凄く嫌なんだよね」
「俺も大勢の前で同級生の手首と肘をへし折るのは嫌なんだよ」
あははと、気まずそうな笑みを見せる芦戸。そりゃ引くわな。
俺の個性はそもそもの火力がゼロだ。だからもし対人戦闘をするとなれば、それなりに際どい攻撃をしなければならない。

「参考程度に言っておくとな。ダメージ覚悟で突っ込んで関節技ってプランもあったんだが、捨て身過ぎて最悪ダブルノックアウトだから諦めた」
「ヒーローらしからぬ攻撃方法だねそれ」
ごめんね、ヒーローらしくなくて。まぁ、諦めた本当の理由はブーイングが嫌だったからなんだけど。
かなり酷い攻撃プランを聞いた芦戸は一度俯くと、すぐに満面の笑みでこちらを見た。
「そんだけ手加減されて手も足も出ないんじゃ、ちょっとキツイかな」
「できれば降参してくれると助かる」
「ん、そうしとく。こーさん！わたしの負け！」
『お、おぉぉぉ!?よく分からんが、芦戸が降参したぞ！』
「第5試合、比企谷くんの勝利！二回戦進出!!」
プレゼントマイクが騒ぎ、ミッドナイトが役目を果たす。
観客は今一乗り切れない流れをテンションだけで吹き飛ばしていた。
俺は拘束を解いてすぐに芦戸から離れる。
「すまんな」
「別に～、比企谷があたしの事舐めてた訳じゃないってのが分かったし、これだけ完封さ

れたらね」

完封というにはあまりにお粗末だが、それでも勝ちは勝ちだ。ありがたく受け取っておく。

これで俺は二回戦に進む。相手は、常闇か八百万。どっちにしても強敵だなこりゃ。

やはり俺の武器はまちがっている。

第５試合が終わり、俺はバックヤードでマッ缶を飲んでいた。
普通なら保健室にでも寄るんだろうけど、大した負傷がないのだから行く必要もない。
表の会場は今も沸き立っている。
俺のせいでかなりテンション下げちゃったと思ってたが、やはりオリンピックの代わりともなると客の期待値も高いか。
缶を小さく振ってから、底に少し残ったＭＡＸコーヒーを一気に飲み下す。
「おつかれ、お兄ちゃん！」
背後から来た衝撃によって、予想以上の勢いでコーヒーが喉に流れ込む。
当然むせた。
「って、小町？なんでお前ここにいんの」
「え、そりゃあ応援に来たからに決まってるじゃん」
ド平日だぞ。まぁこんなイベントがあれば休校にもなんのかね。
「にしてもさ。すごいねお兄ちゃん。女の子相手に容赦なしで」

「いやしてるから。十分気遣ったから」
「そうなの？あ、ていうかさ。途中何か話してたよね。あれ何？」
「いや、まぁ、あれだ。ちょっと交渉をな」
「交渉？負けてくれーって？それで負ける人いないでしょ」
「実際それで負けてくれたんだけど」
「どうせお兄ちゃんのことだし、なんか怖いこと言って脅迫紛いなことしたんじゃないの？」
「なんで知ってんの。もしかして聞こえてた？キミ個性『地獄耳』？」
「うわーまじかーこの人まじかー」
まさかの誘導尋問かよ。小町、いつの間にそんな賢くなったんだ。お兄ちゃんちょっと怖いよ。
しかし、応援してくれるってのは照れくさいものがある。
今までは兄として小町のあれこれを応援して来たんだが、逆になってんな。
「会場には、一人で来たのか？」
「ううん、友達と」
「それ、男子？年上年下？変なことされなかった？」
「女子だよ、クラスメイトだよ。あとお兄ちゃんの方が変だからちょっとキモイから」

「キモイはやめろよ。マジで傷付くし死にたくなる」
「あーはいはい。それだけ返せれば当分大丈夫だよ」
「扱いがひでえ」
「小町そろそろ戻るね。二回戦も頑張ってね、お兄ちゃん」
「おう」
「今度はもっとド派手に決めてよ！」
「それはちょっと無理かも」
ド派手って、イオナズンとかメドローアとかマダンテ使うようなヤツらがいるのにどうやって？
小町は山奥に住む仙人でもしないであろう無茶ぶりを言い残して走り去った。

俺が観戦席に戻った時、リングの上では個性ダダ被りの二人が文字通り殴り合ってい

た。

一番後ろの席に座ると、おいおいと言いながら峰田が距離を縮めて来た。

「なんだよ」

「比企谷さお前さ、もっとこう、あっただろやりようがさ！」

「できるかぎり穏便に済ませたつもりなんだけど」

「お前あそこは！あそこは喉元じゃなくて胸もt……」

「ちょっと黙れ」

「とぎゃあああああ!!」

峰田のセクハラ発言に、耳郎のイヤホンジャックが飛んできた。容赦ねぇ。

「比企谷おつかれ。そいつの言ったことは気にしなくていいから」

「おう。何も聞こえなかったわ」

耳郎は軽く手を振って応えた。

待てよ、今戦ってるのは切島とB組の奴だよな。ってことは第6試合終わってんじゃん。おのれ小町、お前のせいで見逃したじゃねぇか。

「なあ、第6試合はどっちが勝ったんだ？」

「見てなかったの？次の相手なのに。常闇だよ」

「まぁちょっと野暮用でな。ありがとよ」

「ん」

常闇か。個性の説明自体は聞いているが、本気で戦っているところを見たことねぇな。

ダークシャドウ。名前からして強そうだ。

結局、硬化と鉄化の戦いは引き分けに終わり、一回戦は最終ラウンド。

カードは、麗日ＶＳ爆豪だった。

途中、ブーイングとかあったけど、麗日の作戦を正面から最大火力でねじ伏せる形で爆豪の勝利となった。

あいつ女子相手に容赦ねぇな。あれが全国放送されてるとなると、これはある種の公開指名手配になるんじゃねえか？

昼休みを挟んで、二回戦第一試合。

轟焦凍と緑谷出久の一戦は、マジュニア参加の天下一武道会並に荒れていた。

氷しか使わかなった轟と個性を使う度に負傷する緑谷。

轟は炎を解放し、緑谷も限界突破級の一撃を繰り出す。

メドローアとマダンテはぶつかり合い、大量の負傷が原因か緑谷の敗退に終わった。

試合はかなり激しく、リングの修理に少しばかりの時間を費やした。

――第三者視点――

波乱と激闘からスタートした雄英体育祭、一年の部トーナメント二回戦。
第二試合で飯田がＢ組の塩崎茨を完封した次の試合。
比企谷八幡の前に立ちはだかるのは常闇踏陰。『ダークシャドウ』という存在が厨二の個性を持った相手だ。
その強みはリーチの長さと機動力。常闇は一回戦で、雄英に推薦で入った八百万を完封している、まさに破格の強さを誇る。
「緑谷ちゃん。次の試合、どうなると思う？」
「そうだね……間合いが勝負のカギだと思う」

蛙吹梅雨の問いに答える緑谷出久。
その言葉にクラスメイトのほぼ全員が興味を示した。
「デクくん、どゆこと?」
「うん。常闇くんのダークシャドウは長距離中距離でこそ真価を発揮する。それに対して比企谷くんは、遠距離からの攻撃手段が殆どないんだ」
遠距離はないと断言しなかったのは、芦戸戦で見せたステルスからの投擲があること。
しかし靴や衣類を投げるだけでは決定打に欠け、ダークシャドウを掻い潜っての接近には向かないと考えられる。
「けど、逆に接近戦になれば比企谷くんに分がある。一度離したダークシャドウを戻す時間もあることから、近接格闘にダークシャドウは向かない」
比企谷はこの一週間をより対人に特化した格闘技術の上昇に費やしている。
接近戦になった場合、間合いを取らなければならない常闇とステルスを持った比企谷では勝負にならない。
「けど、それならダークシャドウを離さなければいいんじゃないかしら?」
「確かに。ダークシャドウを常に素早く戻せる距離感で戦わせれば比企谷くんの接近にも対応できる。常闇くんなら気付くかもしれないし、やっぱり勝負は相手と自分の距離

感だと思う」
なるほどとＡ組一同は納得する。
『さぁ！二回戦目、第三試合。常闇踏陰ＶＳ比企谷八幡の一戦だ！』
プレゼントマイクが騒ぎ、会場が声援で応える。
比企谷と常闇。勝負のスタート地点はそれなりにあるが、声が届かないわけではない。
「常闇」
「……なんだ？」
「次の試合、爆豪と切島だよな。どっちが勝つと思う」
「さぁな。今は目の前の試合に集中すべきだ」
「そうか？俺としては次の相手の方が余程大事なんだが」
「……それは、オレを倒せると確信しているということか」
「マラソン大会でカラーコーンの色とか気にしないだろ」
単純な戦闘では比企谷が不利。特に距離の開いたこの間合いは最悪と言っていい。
勝つには、接近が絶対条件。
そのために、まずは揺さぶる。
『試合、開始～！』

「ダークシャドウ！」

「アイヨ！」

自我のある影のモンスターは、数秒で比企谷と常闇の間にあった距離をゼロにする。

『まずは常闇！ダークシャドウによる先制だ～！』

初期位置から、ダークシャドウは加速しながら比企谷へと伸びる。

対して比企谷は素早く息を止め、直線的な攻撃を避けた。

ダークシャドウは確かに汎用性の高い個性だが、弱点もある。その一つは、爆豪や轟のようなオールレンジ攻撃がないこと。

あらゆる感覚から感知されない状態なら、人型の物を素通りすることなどなんの苦労もない。

問題は時間。この距離では、比企谷が常闇に一撃入れる前に一度息が切れる。

どこで呼吸をするか。近付き過ぎれば常闇本体から逃げられる。

故に比企谷は――。

『消えた比企谷が姿を現した！けどこりゃあ……』

「後ろだ！ダークシャドウ！」

「アン？」

比企谷が息を吐いたのは、ダークシャドウのすぐ背後。

まるで焦った様子のない比企谷に、常闇は小さく歯噛みした。
「だから言ってんだろ。お前はただの通過点だ」
「ダークシャドウ！」
「ウラァ！」
完全に下に見た常闇は、素早く自らの影に指示を出す。
ダークシャドウは、裏拳で比企谷の頭部を狙った。
しかし攻撃が届く頃には既に、彼は姿を消している。
今の迎撃とも言える行動。これ自体はなんの問題もなく、むしろ正攻法だろう。
だが、常闇の中で一つの感情が芽生えていた。
さっきの一連の言動、まるで余裕な表情。そして比企谷八幡のポテンシャル。
常闇は心のどこかで、この行動を誘導されているのではないかと考えてしまった。
故に、一瞬迷う。
「ぐっ！」
『ここで常闇に謎のダメージ！今度は何されたんだ!?』
「ボディ狙い……？体勢を崩させるのが狙いかな……いや、もしそうでも頭を狙いそうな……ブツブツ……」
「緑谷ちゃん……」

ダークシャドウを戻すか、それとも周囲に攻撃させるか。
その行動の迷いを見逃さずに接近戦した比企谷は、靴の裏で常闇の腹を蹴りつけた。
比企谷が腹部を狙った理由は、単に最も遠い距離で素早く打てる技だから。
しかし常闇には更なる追加のデバフが掛かっていた。
靴の感触を受ければ、普通は蹴りだと考える。だが、先の戦いで比企谷は靴を脱ぐという荒業をやっている。
全く相手の見えない常闇からすれば、蹴られたのか靴を投げられたのか。それとも靴を持ったまま殴ったのか。
無いだろうと思うが否定しきれない選択肢が頭をよぎる。
この迷いは致命的なまでの隙を生む。
相手が怯んだ隙に呼吸をする比企谷。
攻撃され、眼前に敵が現れたのなら常闇が取る行動は一つだけ。
「戻れ、ダークシャドウ！」
（させねぇよ）
バックステップしながら距離を取る常闇と、主を守るべく後方へ急ぐダークシャドウ。
だが位置関係からいっても、ステルス状態の比企谷の方が先に常闇を捕まえる。

至近距離で、見えない相手から逃げるのは至難の業だ。
今の常闇には迎撃手段がない。せめてもの足掻きとして前方へと闇雲な攻撃程度。
当然、常闇は呆気なく比企谷に拘束された。
『ようやく見つけたぜ比企谷！そんでこれは、まさかのヘッドロック！ゲスい！エグい！これ本当に雄英体育祭か!?』
『お前、もうちょい言葉選べよ』
イレイザーのツッコミをプレゼントマイクは華麗にスルー。
リングの上、常闇は後ろから首を締められていた。
完璧に入ったチョークスリーパーを外すのは容易ではなく、常闇はできる限りの抵抗で逃れようと努力する。
「やめとけ。流石に同級生の首は折りたくねぇ」
「この距離なら、ダークシャドウで攻撃することはできるぞ」
「どっちが速いか比べるか？人の骨って結構簡単に折れんだぞ」
「……」
「それに、仮にここで離したとしてだ。この間合いならステルスで逃げながら一方的にお前を殴ることもできる。ダークシャドウを先行させたお前の負けだ」
「……そう、だな。降参だ」

「常闇君、降参！比企谷君、三回戦進出!!」
『比企谷の相手降参ばっかだなおい!?』
手を解き、比企谷は退場するべく出口へ向かう。
それを呼び止めた常闇は、真剣な眼差しで聞いた。
「最初の言葉。まさかここまで読んでの発言だったのか？」
「完全なブラフだ。お前強いし、真っ向勝負したら普通にボロ負けだったぞ」
「そうか。まだまだ未熟、だな」
個性同士の決戦である雄英体育祭のトーナメント。
その二回戦第２試合は、心理戦によって決した。

――第三者視点、終了――

やはり俺の戦法はまちがっている。

三回戦進出を果たしました。
マジで？俺勝った？
いや、皮肉とかじゃなくてシンプルに信じらんないんだけど。
だって相手常闇だぞダークシャドウだぞ。Ａ組で個性ランキングとかしたらトップ５に入るレベルのやつだぞ。
常闇の中で俺の評価が低くて良かったわ。じゃなきゃ挑発に乗って来なかったろうし。
勝ったんだしいいか。次の試合こそヤバい。マジやばい。パない。まじパない。
少しでも回復を、ということで二本目のマッ缶を消費した。主に脳の回復。
一休みした後、観戦席に戻る。
「お、来た来た。比企谷～、こっち座れよ」
テンション高めに隣の席を指すのは、Ａ組のチャラ男、戸部枠、上鳴電気。で、戸部って誰？
「次の試合に集中したいんだけど」

「いいからいいから」
「何が？おい話聞け」
遠回しに断ったのに聞かねえのこいつ。
結局、引きずられながら席に座らせられた。
「いや～凄かったな～。芦戸も常闇も無傷で完封とかさ。これＡ組でもトッププクラスだろ！」
「いや、無傷っつーか、ワンダメで即リタイアのスペックなんだけど」
「けど、無傷なのは事実じゃないかしら、比企谷ちゃん？」
変に持ち上げられるのを避けようとしてるんだけど、おいこら毒ガエル。何してんのお前。
無言で文句を伝えると、蛙吹はケロ？とか言いながら首を傾げた。
やめろ。普通にイラッとくるしちょっとかわいいからそれ以上何も言えくなるしこの前のお友だち発言思い出して恥ずいからマジやめろ。
上鳴の打ち上げた話題はそのまましばらくクラス内を巡る。
そして二回戦第４試合の開始と共にその流行りは終了した。季節巡るの早すぎね。
最近のＪＰＯＰかよ。
カードは爆豪ＶＳ切島。さながら攻撃力対防御力、Ａ組トッププランクのほこ×たてで

ある。
試合は、序盤から切島の猛攻が続く。防御こそ最大の攻撃というかのごとく、爆豪に攻撃の隙を与えない。
いや、爆豪も並外れた動体視力と反応速度、そしてそれに見合う運動能力でカウンターを決めるが、切島に爆破は効いていない。
なるほど、ダメージが無いのなら問答無用でぶん殴れるわな。爆豪も紙一重で躱してるから互いに有効打はないけど。
だが、この均衡はいずれ崩れる。
爆豪と違い、切島の個性は長期戦に弱い。
結局、先に根負けした切島が爆豪の猛攻に耐えきれず敗北に終わる。
「比企谷、お前あれに勝てるのか？」
流石としか言えない実力を見せた爆豪。上鳴はそんな奴を指さしながら聞いてきた。
知らんがな。
単純な戦闘力は俺の負け。機動力も火力も反応速度も桁違いだ。
なら、いかにアウトローな展開に持っていけるか。
それが爆豪戦でのカギだろう。

準決勝、第1試合は飯田の機動力を奪った轟の勝利。
続く第2試合は……。
『さあ！来たぜ来たぜ好カード～！選手宣誓から狙うは一位のみ、爆豪勝己！ＶＳ、ここまで無傷の完封勝利、比企谷八幡！容赦のない二人がぶつかり合うぞ～!!』
観客が沸く。会場は歓声で揺れる。準決勝となると期待度は相当高いか。
つっても、片や個性対決に絞め技を使う奴に、片や女子相手に爆破を撃ちまくる奴。双方ヴィラン感凄くね？
そんな悪どい2人の試合でも、観客のボルテージは高い。
拍手や歓声が響く中。
『試合、開始ぃ～！』
プレゼントマイクの声がより高らかに宣言する。
開幕と同時、爆豪は両手の平で起こした爆発を推進力に進んでくる。
接近戦は望むところ。俺の勝ち筋はそれしかねぇからな。

だがしかし、残念ながら真っ向からやり合う気はない。
「ぼさっとしてねェで、死ねェや！」
ジェット代わりに使っていた両手を、今度は俺に向ける爆豪。
その二つの手からは、視界の全てを吹き飛ばす爆発が放たれる。
俺は、何もせずに目を閉じた。
「――はァ……？」
『爆豪の速攻！比企谷は直撃か～!?』
何もしなければ、１００％のダメージが入る。
ステルスどころか防御姿勢もせず、爆豪の攻撃を無防備に浴びた。
背中から地面に倒れ、大の字で横になる。
痛えし、熱い。意識保ってる俺、実は強いんじゃね。いや、一点集中で食らってたらマジで気絶してたな。
ステルスによる回避を想定して、爆豪は広範囲に爆発を散らしたんだろう。派手な爆発だったが、威力自体は見た目程高くなかった。
追撃はない。俺は目閉じてるし、気絶したと思っているのか？
爆豪はゆっくりと歩み寄る。
「……ンだよ、そりゃあ。てめェ、ふざけんじゃねェ！」

爆豪は片手で胸ぐらを掴むと、一気に俺を持ち上げた。
まぁ、そりゃキレるよな。

――第三者視点――

試合はあっという間に決着が着いた。
――そう、誰もが思っていた。
「……ンだよ、そりゃ。てめェ、ふざけんじゃねェ！」
激昂する爆豪と胸ぐらを掴まれた比企谷。
二人だけのリングで異常は起こる。
それは誰かが瞬きをした合間の、本当に一瞬のできごとだった。

「ぐァっ！」
言い表せぬ悲鳴を上げたのは、爆豪。
彼は突然の痛みを感じ、不自然に曲がった左腕を押さえる。
そしてどうにか顔を上げた先には、ついさっきまで左手に掴んでいたはずの比企谷はどこにもいない。
「おいおいおい！一体何がどーなってんだ!?」
観戦席では切島をはじめ、多くの者が困惑していた。
つい数秒前に倒されたはずの選手は姿を消し、勝ったはずの選手が負傷しているのだから当然だ。
『マジかよ比企谷……腕へし折ったのか!?』
『よく見ろ。関節を外しただけだ』
早とちりするプレゼントマイクを諭すイレイザーヘッド。
その実況のさなか、イレイザーは感心する。
比企谷のやっていることは勧めるべき行為ではないかもしれない。
だが――。
『なるほどな。爆豪の攻守の起点は手。だから先にそれを潰しに行ったわけか。実に合理的だ』

『いやいや、感心するとこ？つか～、やっぱ比企谷の攻撃エグくね？』
この一週間、比企谷は何を思ってこんな技を覚えたのかは分からない。
だが、これだけの手際だ。余程練習して体に教えこんだのだろう。
その努力は認めてやりたい。
教師としては素直に褒められないが、と相澤は思った。
一方、意識外から攻撃を受けた爆豪は完全に比企谷を見失っていた。
それを理解した上で、比企谷は不可視の蹴りを負傷した爆豪の左腕に打ち込む。
「がっ……」
『また比企谷の攻撃が入ったみてぇだな！けど見えねぇ！』
爆豪は顔を歪める。
既に、比企谷が死んだフリから左腕を潰すところまでが作戦だったことは理解していた。
爆豪の思考力や身体能力ならば比企谷を引き剥がすことは不可能ではない。
だが厄介なことに、左腕を失ったことで全ての行動が一拍以上遅れてしまう。
近距離は爆豪にとっても個性を活かせる間合いにも関わらず、反撃も迎撃も封じられる局面だった。
その後もステルス状態の比企谷から猛攻が続く。

執拗な左からの攻め。それに対応しようとすれば右から攻撃が飛んでくる。
得意のカウンターを合わせようにも、攻撃モーションや狙いが見えないのでは打ちようがない。
「あの爆豪が、一方的にやられてんのかよ……？」
その有り得ない光景に上鳴が呟く。
それは爆豪の実力を知るＡ組の総意だった。
「デクくん、さっき何がどうなったの？」
「多分かっちゃんを怒らせて、超至近距離でステルスを使えるようにしたんだ」
緑谷は比企谷の戦法を分析しながら、先の常闇戦を思い出していた。
常闇本人に聞いたが、比企谷に試合開始直前から心を乱され、試合が進むにつれてどんどんと判断力を削がれたという。
（比企谷くんの強みは応用力と隠密性に長けた個性だと思ってたけど、違うんだ。比企谷の強さの一つは――）
心理戦にある。
人間観察に優れた比企谷は、相手の性格や心理状況に合わせて戦略を組み立てている。
それ故に、ステルスという扱いの難しい個性を最大限に利用できる。

「待てよ緑谷。つーことは、比企谷は爆豪の攻撃をわざとノーガードで受けたってのか？」
「そうだと僕は思うよ、切島くん。多分だけど、比企谷くんはかっちゃんが最も嫌がることを理解してたんだ」
「最も、嫌がること？」
「手を抜かれることだよ」
爆豪は勝ちに対して貪欲だ。それは今日の宣誓ならも推測できる。
しかし爆豪が欲しているのは形だけの1位ではない。
相手が全力を出し尽くし、それを超えて勝つ完膚なきまでの1位なのだ。
故に、手を抜かれ、最初から戦う気すらない相手に抱くのは純粋な憤りしかない。
当然だが、比企谷は何分もの間格闘しながらステルスを継続させることは出来ない。
連続的な攻撃の後には必ず、呼吸をするためのインターバルがある。
無論それに気付かない爆豪ではない。
比企谷は巧みに爆豪が反撃しにくいタイミングと位置取りで呼吸を挟む。
その行動と思考、そして徐々に短くなっていくステルス時間を逆算し――。
「らァ！」
『爆豪、ここで反撃の爆破！こいつは当たったのか!?』

ここまで反撃をせずに溜めていた、ニトロ状の汗を一気に使用し爆豪は至近距離で大爆発を起こす。

人一人を簡単に吹き飛ばすことの出来る火力によって、比企谷は強引に後ろに押し戻された。

野生の勘か、爆豪の挙動に対する反射行動か。

比企谷は両手を顔の前で交差させながら、どうにかノックアウトを回避した。

比企谷と爆豪。互いに受けたダメージは大きい。

大爆発を二回、初撃に至っては無防備でくらった比企谷。体操服はボロボロで、体の随所に小規模ながらも火傷がある。

爆豪は関節を外された上、自由の利かない左腕に何度も打撃を受けた。左腕は腫れ上がり、外れた関節には炎症が見える。

もとより火力で劣る比企谷にとって、これだけのダメージを受けるのは想定の範囲内。

対して爆豪は、攻撃の要である手の片方を潰され、想定外の展開に身を置かなければならない。

だが――。

（ここまでやって、ようやく戦力は五分五分ってとこだな）

比企谷は内心悪態をつく。
爆豪の個性に対して固め技を通じにくい。
近接戦では今のように爆破でチャラにされる。
ステルスで躱そうにも、範囲攻撃には対応策がない。
自滅覚悟でようやく腕一本。なんとも天秤の傾いた交換である。
比企谷にとって長期戦は負け筋でしかない。爆豪は汗をかけばかく程、個性の能力値が上がる。
逆に比企谷はステルスできる時間が徐々に短くなっていく。既に息が上がっていて、ここまで攻勢に出れたことが幸運だった。
「緑谷、この試合どうなると思うよ？」
「分からない。僕も初めて見るんだ。ここまで、追い詰められてるかっちゃんは……」
おそらくA組でもっとも爆豪のことを知っているであろう緑谷の言葉に、聞いた上鳴をはじめ全員が息を呑む。
タイマン戦闘に向かないはずの個性で場を制した比企谷。
高い戦闘センスを持ち、攻撃的ながらもクレバーな爆豪。
リングの上で睨み合う両者の間には、ライバル意識どころか遠慮も容赦もありはしない。

既に誰も、長年個性同士の戦いを見てきたプロヒーロー達ですら、この試合の先を読むことはできなくなっていた。

――第三者視点終了――

やはり俺の決着はまちがっている。

雄英体育祭の会場。
準決勝ながら、周囲は異様な空気に包まれていた。
というか、やけに静かだな。
こちらを睨む爆豪の息づかいが聞こえるほど、あれだけ騒いでいた観客は黙っている。ほわい？
『あれ？やけに静かじゃね？』
『そりゃ、こんな戦いを見せられればな』
『はん？それってどういうことよ？』
誰も口を開かないからこそ、マイクから出てくるボイスがよく耳に入る。
『別に貶めるつもりはないが、端的に言って比企谷の個性は戦闘向きじゃない。とくにこういった逃げ場のないリングの上ではな』
『ま～、確かに！』
『だが個性で劣っても、それ以外の分野を活かして比企谷はここまで上がって来た。そして、A組でも戦闘スキルは頭一つ抜けた爆豪と互角に渡りあっている。全員、ここか

ら目離すなよ――』

どちらかと言えば爆豪の方を貶めてる感のある担任。

相澤先生は一呼吸置いて言う。

『決着は一瞬だ』

できればその結末を知りたかったぜ。

勝負が一瞬で終わるのは当たり前だろうとか考えたが、思考を無駄なリソースに割いている場合じゃないと思い直す。

依然、俺を睨み付ける爆豪。攻める様子も守る様子もない。

警戒してるんだろう。

麗日にすら警戒してみせた爆豪だ。ここまでやられて無警戒に飛び込んでくれたらどれだけありがたいか。

何か仕掛けることを期待してるなら、悪いが俺からは何もしねぇぞ。

現状、俺のスタミナはほとんど使い切ってる。今ステルスを使っても１０秒続くか分からん。無酸素運動嫌いだわ。

さっきまで、傍から見れば俺が爆豪を追い詰めてるように見えただろうけどそうじゃない。

ステルス中も、常に右手のカウンターを気にしながら攻撃してたわけで。決定打を与

えられていないのが現状だ。
どれだけ戦力を削っても、倒さなければあいつは折れない。
腕を折ろうが足を失おうが、あいつは動く限り勝負を諦めないだろう。今までみたいな詰将棋戦法は通じない。
勝つためには、二度と立てなくする気で倒す。それしかねぇ。
『沈黙した両者、うご……いた！爆豪、右手一本で加速しながら突っ込む！』
左手はつぶしてるからな。
とはいえ、片手を宙吊り状態にしながらでも来るのかよ。お前四皇？
もっと息を整えてから動きたかったが、仕掛けて来たのなら当然個性を使うしかない。
ステルス状態でしゃがみ込む。ＵＳＪでも使った回避技だ。
爆豪は空中で右手を、後ろから一気に左へ振り切る。
サイドスローの爆破か。それなら当たらねぇし、下からアッパーを狙える。
予想通り、爆破は起きた。
――ただ、爆豪の右手は俺を狙ってはいなかった。
爆豪は、振り切った右手の甲を自らの左頬に近付けると、爆破の威力で右方へ吹き飛んだ。

『爆豪、自分の爆破に飛ばされてんぞ！力入れ過ぎたか!?』
そんなミスはしないはずだ。
俺から離れる行動。回避ではなく、逃避……？
いや、違う。
爆豪の機動力ならこの間合いを一瞬で無くせる。
逆に俺はもうすぐインターバルに入る。
これは……。
「勝った気でいねェだろォなァ！比企谷ァ！」
ステルスの解除と同時、爆豪は再び右手を使って方向転換する。
足を地面につけぬまま二度目の爆破。
今度はさっきよりも大きく、速い。
眼前に迫った爆豪に対し有効な攻撃手段はない。とにかく防御。ステルスが間に合わねぇ以上、耐えるしかねぇ。
両手をクロスして急所である頭を守る。
それを、見てから反応したのか。
爆豪は空中で体を捻ると、回し蹴りを俺の左脇に打ち込んだ。
推進力をそのまま生かした蹴りは痛い。威力に負けて俺は右の方へ転がる。

「逃がすかよ！」
その間に足を着いた爆豪は走り出す。
俺も息を止めながらどうにか立ち上がり、構える。
さっきの攻撃。わざとタイミングをずらして来たな。俺の個性の使い方をもう掴んでやがる。
ステルスを敵の攻撃が出る瞬間に使う。そうすることで相手は、俺がいたであろう場所を惰性で狙ってしまう。
目の前で人が消えたのなら、その残像を追ってしまうからだ。
その消えるタイミングを読まれた。
あの距離感とタイミングで打たれたら、ステルスできても避けられない。
個性は身体能力、使い続ければ疲れる。無駄打ちはさけねぇと麗日と同じ末路だ。
俺を見失った爆豪は、また右手で攻撃の構えを見せる。
爆破か、フェイクか。
ふざけんな。
読み合い以前に、後手に回った段階で俺に勝ち目はねぇ。
消えたまま、一歩踏み込む。
『ステルスを見破ったか、爆豪の猛追！――が、失敗か!?爆豪の顔が打ち上げられた～

!!』

今度こそ入った。カウンターのアッパー。

追撃の速度、これがさっきの突撃よりも落ちていた。恐らく汗の量に関係するのだろう。

連続で三回の爆破の後だ。そりゃ、威力も落ちる。

こちらからも攻めたいが、残念ながら息が続かん。

踏み込んだ位置から一歩下がってステルス解除。目は相手から離さない。

爆豪は反撃を受けながらもしっかりと着地し、右手に力を込める。

やっぱこの程度じゃ倒れねぇか。

「来ねェのか？」

「攻めるメリットがあるか？」

「長期戦で不利なのはてめェだ」

「さて、どうだか」

実際、爆豪の方が不利なまである。

個性だけの話なら確かに爆豪に分があるだろう。

だが現状、爆豪の左腕の負傷は大きな枷になっている。

あれだけの負傷だ。動くだけでもしんどいだろうし、攻めも守りも遅れが出る。

「なら、こっちからいくぞオラァ！」
叫ぶと同時に、爆豪は自らの手を地面に向けて爆破。――空高く飛び上がった。
高けぇ……攻撃の届く範囲じゃねぇなこれ。
『爆豪飛翔！考えたな、空なら比企谷に手は出せねぇ!!』
石を投げるくらいはできるけどね、ダメージは入らないな。
加速はやがてやみ、爆豪は少しづつ地面に向かって落ち始める。
その運動の切り替わりを狙って、再び爆破。
今度は地面へと真っ直ぐ、重力すら味方につけて突進した。
思い浮かぶのは天下一武道会。少年の部でどっかの息子さんが見せた戦法だ。
だが、ステルス状態の俺の位置を先読みして着地と同時に方向転換などできるのか。
恐らく不可能。
なら、爆豪の狙いはなんだ。
考えがまとまるより先に、爆豪が俺に迫る。
落ち着け。
いくらあいつでも、生身では着地できない。攻撃は間違いなく爆破、右手だ。
少しでも攻撃しにくい方向、爆豪の左側へと回避する。

ステルス中の移動は見えない。完全に読み合いだ。
だが仮に俺の思考が読めても、攻撃しにくいのは事実のはずだ。
距離的には俺の頭上。
爆豪のとった攻撃は――。
『高速で落下しながら、まさかの超高火力、特大爆破炸裂!!いくら何でも比企谷は無事じゃすまねぇだろこれ～!!!』
まさに特大の爆弾投下。
ステージにクレーターが生じる威力が俺のいた場所に向かって落ちていた。
しかしこれ、マジかこいつ。
上昇の爆破に、落下を加速させる爆破。そして今の超特大。
明らかに火力上限を超えた攻撃だった。
つまり、本気で勝負を着けに来たってことだな。
そんな攻撃を多少は回避した俺だが、もちろんダメージはデカい。解説通り無事じゃねぇ。
爆破の熱だけでなく、その余波によって体も打っている。体操服はサイヤ人の胴衣かってくらいボロボロだ。
『超火力にさらされた比企谷は……辛うじてステージ上にいるぞ!しかし深刻なダメー

ジ、立てるか!?』

確かに、もう少し反応が遅れてたら場外まで飛んでたな。

まぁそれ以前に、もう立てるか怪しいけど。

『これでダメージは比企谷の方が明らかに大きくなった。仮に立てても、爆豪と戦闘を続けられるか』

耳が痛えな相澤先生……。

どうにか四肢に力を込めて、悲鳴を上げる体を起き上がらせる。

もうだいぶしんどい。立つだけでＭＰ使い果たした気がするわ。

これで、隻腕の爆豪とやり合うってか……。

「ウラァァァァァァ!」

なんて絶望してたんだがな。

爆煙の奥から聞こえた叫び声。そして出て来たのは……。

「あァ――やっと動く」

外れた左肘を強引にはめた爆豪の姿だ。

『マジかよ爆豪!自力で治しやがったぞおい!?……つか、そんなことできんのか普通?』

『爆破の個性を上手く使えばあるいは、だろうな。こう、左腕を支えて爆破の反動で関節を入れるというならできないこともないだろう』

『そんなん練習してたのかよ爆豪!?』
『いや、ぶっつけ本番だろ。誰が体育祭で関節外しにくると想定するか』
『才能マンかよ……』
その才能の一部だけでも俺にくれないですかね。
こんな悲報あるかよ。
全身火傷と打撲で痛ぇし体力も限界で、相手は両腕に戻った学年トップ。
流石に、無理か。
左手の感触を試す爆豪は、ニヤリと笑うとそのまま手の平を後ろに向ける。
「はっ――きっつ……」
「くたばれやァー!」
戻った左手で加速し、右拳で俺の腹を打ち抜く。
内臓全部吐き出しそうだ。顔を狙わなかったのはガードされることを避けるためか。
曲がって前に出た頭に、今度は左手が来る。
ダメージ自体は残ってるはずの左での爆破。辛うじて上げた腕のガードごと吹っ飛ばされた。
その後も左右の打撃と爆破が襲い掛かる。
ステルスしてる余裕がねぇ。ガードも爆破の前じゃ効果が薄い。汗線に限界が来た

のであろう右手も的確に急所を突いてくる。
『一転して今度は爆豪のターン！一方的に攻められてんぞ!?』
意識が、遠退く。
くそ……ここまでか。
けどまぁ、上手くいった方だろ。
成績的には四位。学年トップとこれだけやり合ったんだし、退学回避には十分じゃないか？
なら、もういいだろ――。

「お兄ちゃん！」

そんな声が聞こえた気がした。
本当に聞こえたのかは分からん。ただの記憶かもしれない。
それでもいい。
「がっ――！」
『何をされた――!?良く分からんが、多分消えた比企谷の反撃がヒット！』
頭突きだよ。

あぁ、別に退学でもいいんだよ。俺はヒーローになりたいわけじゃないからな。けどな。

――二度と小町を泣かせねぇ。

それだけは。

それだけは。

「譲れねぇんだよ」

「知るかァ！」

再び拳を握る爆豪。俺もまた、息を大きく吸い込む。

もう二度と、あの時みたいなことだけは絶対に。

俺は、小町を守れない存在じゃダメなんだよ。

世界なんてどうでもいい。

自分がヒーローかヴィランかなんてどうでもいい。

ただ、ここで負けるようじゃあの時と同じだ。

右ストレートに合わせて息を止める。

半身になって拳を避け、手の平で爆豪の顎を打ち上げる。

脳が揺れれば意識が鈍る。

ボロボロの左腕を掴む。
息が続かない。
ステルスは解ける。
掴んだ左腕を引っ張り、爆豪の頭を体ごと引き寄せる。
回避はさせない。
限界まで引いたところで、鼻を潰すつもりで肘を打ち込む。
左手はボロボロな上、右でのカウンターは間に合わない。
――当たる。

瞬間、爆破が起きた。

俺は至近距離で起きた特大の爆破によって飛ばされ、ステージ上で倒れこむ。
マジかよ……。
「はァ、はァ……言ったろうが。無理すりゃ撃てンだよ……」
辛うじて動く頭を回して爆豪を見る。
限界を超えた左手を更に酷使して起こした爆破。
その代償は大きく、右手で支えている爆豪の腕は痙攣していた。

「これだけやって、足りねぇのかよ……」
「……」
それ以上先は、覚えていない。

「は？」
「だから、退学免除だ」
「いや、え？俺負けましたよね？」
「第三位、十分な成績だろう」
「三位……表彰式とかしましたっけ？俺気が付いたら家にいたんすけど」

「爆豪戦の後、意識不明だったからな」
「それ結構ヤバめの事態じゃ……」
「命には別条はない。傷についても完全に治癒しているだろ」
後日談というか、今回のオチを職員室で伝えられた。
どうやら俺は常闇に勝った段階でもう目的を達成していたらしい。なぜ俺はあんな無茶を……。

「一応言っておくが、お前が爆豪との試合であれだけやり合ったからこその判断だ。棄権していたらすぐに退学にしていた」
「あ、はい」
この人、もしかして心読める？
まぁ、最後の最後で足掻いたのは無駄じゃなかったと思おう。じゃないと恥ずかしさで首吊っちゃうまである。しないけど。
俺が勝とうとしたのは何故だ。
理由は知っている。
あの時と重なったからだ。
あの時。俺が個性を使って小町を守ろうとしたあの時。

俺は動けなかった。
俺は届かなかった。
俺は守れなかった。
小町を捕まえたヴィランに成す術なく負けて、動くこともできぬまま、足掻くこともできぬまま、俺はヒーローに縋った。
「比企谷」
「え、あ、はい」
「大丈夫か？」
変なスイッチが入っていたのを担任の声で元に戻した。やる気スイッチでも押してくれたのかしら。
「比企谷、お前の個性の変化。いや、進化と言うべきか」
「あぁ、はい」
「あれはお前の意志で進化したものだ。それだけは覚えておけ」
一応、相澤先生は俺の個性について知っている。
その進化というか真価に俺の意志が関係しているとかいうが、どういう意味だ？
よく分からんが、うん、まぁ、覚えておこう。
多分いつか、授業で習うんだろう。

職場体験・改編
ネーム

祭りの後は総じて静かなものだ。
体育祭で盛り上がったテンションは緩やかに平常運転に戻っていき、通行人の声や視線から逃げるのにも慣れた頃だ。
比企谷家の朝は、早くも遅くもなく始まる。
「あ、お兄ちゃん。おはよ」
「お～う、おはよう」
「朝から目つき悪いよ？そんなんでヒーローやってけるの？」
「俺は働く気はない。そういや、小町は将来どうするとか決めてんのか？」
「そうだね～。『プッシーキャッツ』に入ろっかなって」
「は？なんでだよ。あそこヒーロー事務所だろ」
「別にヒーローじゃなくても入れるでしょ。ほら、小町癒し系じゃん。戦いとか無理だけど活躍できると思うんだよね～」
「ならどこの事務所でもおーけーじゃねぇか。なんで醜いニャンコの子がいるとこ狙う

んだよ」
「だって猫だよ、かわいいよ。小町にピッタリ！」
「さいで」
もう何言っても聞かねぇなこいつ。諦めるか。正直いい年してキャッツ！とかいうの恥ずかしそうだけどな。俺だったら絶対に嫌だ。
最愛の小町の作った朝食を頂くべく、いつもの席に腰を下ろす。
トーストと軽めのおかずを味わいながら、対面に座った小町の視線を感じていた。
「なに、なんか入れたの？」
「別になんにも。あ、そうだ。将来といえばさ、この前ヒーローネーム決めたんでしょ？」
「なんで知ってんだよ」
「梅雨ちゃんさんから聞いた。メールだけど」
「へ～、誰だよツユ・チャンさん」
ツユ・チャン、中国人か。
「いつの間にチャイニーズの知り合いができたんだ？つか、なんでチャンは雄英のスケジュール知ってんだよ」
「チャイニーズじゃないと思うけどね。雄英の体育祭で会った。医務室に行ったらお兄

ちゃんのクラスメイトの人、他にもいっぱいいたよ」
「へー、チャンはクラスメイトなのか。そんな奴いたっけ」
「あのさ、チャンってあだ名なの？小町、梅雨ちゃんって呼んでって言われたけど」
「おい待て」
それ、ツユ・チャンじゃなくて梅雨ちゃんじゃねぇか。全くの別人じゃん。
んでなにか。俺が医務室運ばれた後に他の奴らも来てたと。そこで話して知り合ったと。
小町のコミュ力ならできなくないだろうが、知らぬ間に妹の知り合いが増えてるのにびっくりだわ。
「蛙吹と知り合ったのな。そいつの名前梅雨までだと思うんだけど」
「だって呼んでって言われたし、でも年上じゃん？」
「普通にさん付けでいいだろ」
「まぁまぁ。そんでさ、お兄ちゃん何て名前にしたの？」
「は、名前？」
ああ、そういやヒーロー名の話してたんだっけ。ツユ・チャンのキャラ強すぎて忘れてたわ。
「え、聞きたいの？」

「そりゃ聞きたいでしょ。あのお兄ちゃんが、あの雄英に入って、ヒーローになるって言ってるんだよ？妹としては～、気になるわけですよ」

ところどころにディスってるようなワードが聞こえたが、まいいか。

名前なんて、あだ名なんてなくていいのにな～。

「それでそれで、なんて名前？」

「……エイト」

「……へ？」

「だから、『エイト』」

「え……どうしたのお兄ちゃん」

「何がだよ」

「なんでお兄ちゃんが、まともなヒーロー名を……？」

こいついい加減失礼だな。

まぁこの名前は俺のセンスと呼ぶには大分改名を重ねてるんだがな。

「最初は『アサシン』って名前を出したんだよ」

「うん、そんで？」

「んで、ヒーローらしくないって没にされた」

「ま～、その名前だと完全に殺し屋だからね」

「次に好きなものってことで『マックス』にしたんだが……」
「動機がダメそ～」
「そういうことだ。そんで、仕方ねぇから名前からとって『エイト』になった」
「すっごい無難だね」
「だよな～、インスタに挙げられたカラフルなアイスくらい無難だよな～」
「その例えは分かんない」
え、分かんないの。ああそうか、これ無難っていうより不満だった。なんでああいう写真て自分の顔まで乗せるんだろうな。タイトルがアイスで映ってるのがほとんど顔とかもうそれ詐欺だろ。
ちなみに、開幕早々「俺、ヒーロー免許以外いらないんで名前なしでいいすか」と言った瞬間に眠ったはずの担任が目覚めた。マジで切れてそうだった。
あとマックス案が没になったときに危うく『ヒッキー』になりそうになった。全力で拒否った。何が、もうヒッキーでいいんじゃない？だポイズンエイリアン。
そんなこんなあったわけだが、ともかく日常は続いている。
ヒーローが暇なのは平和な証拠だ。
最近ではヒーロー殺しとかいうヴィランまで出ているらしいが、流石に雄英まできて大立ち回りを見せることはないだろう。

ＵＳＪ襲撃事件がそもそもイレギュラー過ぎたのだから。

「――と、いうわけでお前らには職場体験に行ってもらう」
いえーい！という意味の分からない歓声が響いた。
なんでテンション上がるの？これ働くってことよ？嫌じゃないの。
担任の話では、雄英の生徒はヒーローとしての在り方を学ぶため、それぞれのヒーロー事務所に出向いて働き方を体験させて貰おうとしているらしい。
ただ、誰でもどこにでも行けるわけじゃない。
お世話になる事務所側からの指名もあるのだ。
指名の判断基準は先日の体育祭。順位が上位なほど、氏名件数も多い。
一応三位になったのだ。俺のところにもそれなりの数が申し込まれていた。まぁ、一位と二位の爆豪、轟はけた違いだったがな。
「それで、言い訳を聞こうか比企谷」
それで、なんで俺はまた職員室にいるんですかね。
相澤先生の前で、俺は既視感のある状況に置かれていた。
「いや、申請書の通りですけど」
「ほう？つまりお前は、ヒーロー科に在籍しながら、将来的には専業主夫を目指すため、

職場体験の行き先を自宅としたい――と？」
「先生は知ってるでしょう。俺はあくまでもはヒーロー免許が欲しいだけなんですって」
「はぁ……お前な――」
相澤先生が文句を言うより先に、デスクの上にある電話が鳴った。
溜め息を吐いてから受話器を取る先生。分かりやすい社交辞令の後に、相手から要件を聞き出している。
俺、帰っていい？
なんて思っていると、持っていたその受話器を俺に差し出してきた。
「え？」
「お前に用があるらしい」
「どなたですか」
「新設したばかりのヒーロー事務所からだ。俺も初めて聞いた。なんでも、どうしてもお前に伝えたいことがあるんだと」
「はあ……もしもし？」
しぶしぶ受け取り、受話器を耳に当てる。
「やぁ――初めまして、比企谷君」

「――――っ！」

聞いたことのない声。初対面なのだから当然だ。

だが、何故だ。覚えも記憶もないのに、俺はこの声に恐怖を感じている。

「……どうも」

「ぼくは『ＯＮＥ（ワン）』、とある新人のヒーローだよ。君に、どうしてもうちに来て欲しくてね。電話させてもらったよ」

「そうすか。いや、もう職場体験先は決めてるんで……」

「できれば変更してほしいなぁ。せっかく――妹さんも来ていることだしね」

「――――……っ!!!」

体に電気が走ったようだった。

何故俺に妹がいることを知っている。いやそれ以前に、こいつは今なんて言った……？

来ている、小町が、そこに？

「……それは。それは、どういうことですかね」

「そのままの意味だよ。君にここに来て欲しい。だから、君が来る理由をつくった。それだけさ」

「なんで、そこまで俺に拘るんですか」

「それは君がここに来てから話そう。雄英に申請は出しているからね。大丈夫、手荒なことはしないと約束するよ。君がぼくのお願いを聞いてくれるならね」
「……」
ぷつりと電話が切れる。
もう誰ともつながっていない受話器を、俺は力強く握りしめていた。
「比企谷……？何があった」
「せっかくのご指名なんで、職場体験してきます」
「大丈夫か？お前、なんか変だぞ」
「よく言われますよ。話して、ぜひとも聞きたいことができただけです」
相澤先生のデスクの上にある申請書をペンで上から書き換える。
そのまま紙を置いて、呼び止められるより先に職員室を出た。
まだ、怒りにも似た感情が収まらない。
一体何が起きている。なんで小町が狙われる。やつは何者だ。誰だ。
やつは、何を知っている。
分からないことだらけだ。
俺は一体、何に目を付けられたのだ。

それからは何にも集中できていない時間が過ぎた。
家に帰っても、小町の姿はない。
リビングには一つ、しばらく友達の家に泊まるという趣旨の手紙があるだけだった。
誰にも、両親だけでなく警察やヒーローにすら相談のできない案件だ。

俺は現状どこまで監視されているか分からない。下手な行動は小町の安全に関わる。
やつの狙いは小町じゃない。そうでなければ俺に連絡する必要はないのだ。
狙いは、俺。そのために小町が攫われた。
歯痒いにもほどがある。
俺はどこまで無力なのか。守りたいはずの妹を、俺の存在故に危険にさらしている。
本当に、自分が嫌になりそうだ。

職場体験が始まるまで、まだ時間がある。
普段通りに登校しても授業はまるで頭に入らなかった。
「比企谷ちゃん」
そんな益体のない日々を過ごしていたある日。一限が終わってすぐの休み時間、蛙吹が席にやって来た。
「最近、小町ちゃんから連絡がないのよ。何かあったのかしら？」
そういや連絡取り合う仲だったな。
変な勘を働かされるのは少々きつい。どうにか誤魔化そう。
「あぁ、多分あれだろ。携帯使い過ぎとか言われてな。親にこの前怒られてたわ」
「そうなの。しばらく禁止条例出ちゃったのね」

「みたいだな。まぁ気にすんな」
「分かったわ」

上手く言い訳になっていたか分からん。少なくとも違和感を持った様子はなかった。
蛙吹が離れた後、息をつく。
いよいよ明日からだ。
あの得たいの知れない事務所での体験学習。
小町を守るために、俺はすべきことをしよう。

選択

ヒーロー事務所への職場体験。
各々が野望や希望や絶望を胸に現地へ向かう駅。
「比企谷」
「先生。なんすか」
「……お前はまだ、ヒーローのタマゴにすらなり切れていない子どもだ」
「職場体験初日に非情な現実見せないでくださいよ」
「だから、何かあったら頼れ。俺じゃなくてもいい、大人に頼ればいい」
「……先生、意外と優しいですよね」
「意外は余計だ。それに、俺はお前をヒヨコにしてやらなきゃならんからな」
「仕事なら仕方ないっすね」
「そうだ。だからお前も、役目を果たせ」
「うす」
クラスメイトの集団から最速で離れ、個性を解除。相澤先生に渡された地図を頼りに目的地へ。

小一時間電車に揺られる。
役目を果たせ、か。
先生が、どこまで俺の現状を理解してあの言葉を言ったのか分からない。だからもっと素直な気持ちで受け取るべきなのだろう。
子どもだから、まだ幼いのだから、頼っていいのだと。それがお前の役目なのだと。
けれど、それはできない。
今は誰も頼れないのだ。
俺の役目は、小町を守ること。それ以外の要素など今はいらない。

住所も地図も間違いないのだが、どう贔屓目に見ても事務所には見えんな。

俺が間接的に案内された先は、人気のない廃工場だった。
大きな引き扉を動かすと、ギギっという音がする。長い間使われていないようだ。
僅かに空いた隙間から、そっと中を伺う。
小さな光の先には、見たとこのある人影――いや、靄があった。
「お久しぶりです、比企谷八幡さん」
「ワープ野郎……」
間違いない。以前ＵＳＪを襲撃した時にいたあの黒い霧だ。
ということは、小町を攫ったのはヴィラン連合とかいうやつらか。
「お迎えにあがりました」
「……俺を呼んだのは、あの手まみれの奴か」
「いいえ、死柄木弔ではありませんよ。あなたを呼んだのは、先生です」
「先生……？」
「詳しく話すのは後にしましょう。どうぞ」
そういって、奴は俺の目の前にワープホールを出してみせる。入れってことか。
選択権はないな。
俺は一度深呼吸し、足を踏み入れる。
非物理的なトンネルを抜けた先は、またも薄暗い工場の中。

だがさっきの人気のない静かさとは別物の、圧力を感じさせる静寂がそこにはあった。

「ようこそ、比企谷八幡君」

その冷たい空気を一層重くする、高らかなのに気持ち悪い声。

吐き気を催す邪悪とかゲロ以下の臭いってのはこういうことなんだか。

暗くてよく見えないが、奥には確かに誰か人の影がある。

「あんたが『ＯＮＥ』……いや、偽名か」

「当たらずとも遠からずかなぁ。僕はこう呼ばれているよ――『ＡＬＬ（オール）・ＦＯＲ（フォー）・ＯＮＥ（ワン）』ってね」

こいつが、先生……。

全くそんな気がしねぇな。ただのやべぇ奴に見える。うちの担任の爪の垢を煎じて飲んでアレルギーで死なねぇかなこいつ。

「小町は無事だろうな」

「安心していいよ。彼女なら、既に家に帰っているからね」

今のどこに安心できる情報があるんだよ。誰か教えてくれ。

小町は既にここにはいない。どこにいるか定かではない。仮に家にいたとしても、いつでもまた手を出すことはできる。

人質解放になってねぇんだよちくしょう。
「じゃあ、俺は何をすればいい。俺を呼んだ理由は聞かせてくれるのか？」
「もちろんさ。僕は君のことを、ずっと前から知っているんだよ」
「で？俺は知らないけどな」
「僕は君を知っている。そして、君の妹ちゃんのこともね」
話が見えねぇ。
俺を前々から狙っていた？だとしたら何故、今この場面で俺をここに呼ぶのか。
「要点まとめてから話せよ」
「せっかちだなぁ。まぁ、そうだね、簡潔に言おうか。僕はね――いい個性を見ると、つい欲しくなっちゃうんだよ」
きっと、やつはとんでもなく邪悪な笑顔を浮かべているのだろう。
初めて声を聞いた時からなんとなく分かっていた。こいつは本物だ。
本物の化け物だ。
ＵＳＪであった黒いヤツとか、巷を賑わせるヒーロー殺しすら小物扱いになるほどの、完全なる悪。
それが個性故なのか、それとも性格そのものなのか。
どちらにせよ、その悪質さの一片を俺は知った。

そして、同時に理解した。
奴が何者で、何を狙っているのかを。
「あんたの個性は、『個性を奪う個性』ってことか」
「話が早い。やはり君は、とても優秀だ」
「俺史上最高に嬉しくない褒められ方だな」
こいつはさながら魔王、ヴィランの中のヴィランだ。
そんなやつに褒められるとか、君はヴィランに向いているよと言われてるのと何ら変わらねぇわ。
個性を奪う個性、規格外もいいとこだな。
こいつの狙いは俺の個性を奪うこと。それが一番理解できる答えだった。
俺の個性は戦闘向きじゃない。その理由は圧倒的なまでの火力不足。
だがその弱点を埋めることができれば、ステルスは最悪の個性へと変わる。
奴は個性を奪うことができる。そして恐らく、それをストックできる。
無数の個性を合わせれば、一撃必殺を生み出すこともできるだろう。
それにステルスが加わったとしたら、不可視にして不可避、最悪にして最凶の攻撃が完成する。
そうなれば誰も、オールマイトですらこいつを止めることはできない。

「いくつか、聞きたいことがある」
「いいよ。君が望む質問に、僕はできる限り答えよう」
「んじゃあ、まず一つ目。個性を奪われたらどうなる？」
「漠然とした質問だね」
「そうだな、例えば死ぬのか？」
「そんなことはないよ。僕の個性はあくまでの個性を奪うこと。命を奪う力じゃない」
命を奪うことのできる個性だろうけどな。
「次。個性を奪ったら、俺はどうなる」
「そうだねぇ。僕は君の個性以外に興味はない、とだけ言っておこうかな」
「最後だ。俺が個性を差し出したら、小町には絶対に手を出さないと約束できるか？」
「もちろんだとも。君達兄妹に関わる理由はないからね」
よかった。
こいつは、俺が思った通りの人物だった。
オール・フォー・ワン。こいつはただの悪党じゃない。ただ破壊の限りを尽くすような、脳の無い化物じゃない。
こいつには知性があり、理性があり、プライドがある。
だからこそ、信じることができる。

「あんた、かなりの嘘つきだろ」
「言っている意味が分からないなぁ。僕はこれでも、真剣に答えたつもりだったんだけど」
「ああ、言い方が悪かったな。あんた、俺のこと好き過ぎだろ」
何も、こいつははじめから本当のことを話すとは言っていない。だから真実を言おうと虚偽を言おうと、嘘じゃない。
ただ、最初から本当のことを言っていないだけだ。
目的を言っていない。それだけのことだ。
「あんたの目的は、俺の個性だけじゃない」
「ほう?どうしてそう思うのかな」
「明らかに手間がかかり過ぎてるんだよ」
俺のようなやつから個性を奪う。こいつならコンビニでちょっと高めのカップラーメン買うくらいの難易度なはずだ。
それなのにわざわざ身内を攫い、俺の連絡を入れ、ヒーローの振りをしてまでここに呼びつけた。
手段と成果のつり合いが取れていない。
仮にこいつが過程を楽しむタイプだったとしても、雄英に電話をするリスクに対する

報酬が俺と小町の個性だけでは流石に天秤は傾くはずだ。
「今だって、俺とこうして話す理由もない。普通に考えりゃ、さっさと拘束して個性を奪って、あとは煮るなり焼くなりクッキングするだろ」
「僕がそこまで猟奇的な趣味を持っているように見えるかい？」
「俺が考える数十倍は惨いことされると思ってるよ」
「そうか。それじゃあ、――君に聞こうかな」
その声は、今までででもっとも冷たく、重く、禍々しかった。
殺気というのだろうか。
俺は鼓膜で捉えたその音に、死を感じた。
「質問だよ。君は妹ちゃんの安全のために、何をすべきかな？」
俺は、誰に聞かれているのだろうか。
相手はヴィランだ。それもトップオブトップの、最悪のヴィラン。
だが俺に問うやつの言葉は、まるで指導者のような雰囲気を醸し出す。
先生。あの黒い霧はそう呼んでいた。
じゃあ、こいつは何がしたくてこんなことを……。
いや、論点はすでにそこじゃない。
この返答次第じゃ、俺は命を落としかねない。それどころか、今度こそ小町に被害が

及ぶまである。
考えろ。
やつの気にいる答えは何か。正解を導け。
計算なんてできねぇ。理系とか捨ててんだよ。
なら読み取れ。言動、目的、性格、地位、個性、権力、比喩、隠語。全てから奴の真意を汲み取って解読しろ。
こいつは先生と呼ばれていた。
このバケモンが先生であるなら、こいつが生徒に求める回答はなんだ。
自論でも空論でも、正論でも暴論でもなんでもいい。
奴がもっとも欲しがること、欲している言葉、答え。
「……俺を、ヴィラン連合に入れろ」
俺の個性だけが目的じゃない。
俺自身、比企谷八幡という一人の人間を構成する全要素をもって俺は応えた。
「それが、君の答えかい？」
「ああ」
「……」
薄暗くて顔は見えない。

ただ、静かに奴は笑う。
やがて堪えきれなくなった笑い声は暗闇にこだまし、パチパチと手を打つ音がついてきた。
「やっぱり、君を呼んで正解だった」
「は……？」
「言ったろう？僕は君を知っていたんだよ。そして待っていたんだ。君が見つけられ、見いだされ、そしてここに来ることを」
見つけられる、誰に？何を見いだされると？
疑問を表情に出している俺に、先生は言う。
「君はオールマイトに見いだされ、もう一度ヒーローを目指した。それは彼が、絶望の中にいる君に手を差し伸べようとしたからだ」
もう、何故知っているなんてことも思わなかった。
オールマイトが俺に声を掛け、雄英に招待した。それは行き過ぎたお節介であり、同情からくる行為だった。
薄々分かっていた。
彼は、ヒーローになるという道を示すことで、俺のヒーローに対する感情を変えようとしたからだろう。

「でもね、君には遅すぎたんだ。道にすらいない者に手を差し伸べても、拾い上げても、その子は道を歩むことはできない」
俺は一度、ヒーローに絶望した。
ヒーローとはヴィランがいて初めて成立する存在悪であり、たった一人の少女を守るために免許が必要な不合理の塊なのだと。
「でも、大丈夫。――僕がいる」
今俺は、ヒーローか、ヴィランか。
そんな曖昧な存在定義の中で、こいつは手を差し伸べる。
「僕は君のいる道を知っている。僕なら教えてあげられる。君が今いる道の歩き方を」
差し出した手は大きく、邪悪な慈愛を浮かべていた。
けれど俺は、その手に応えない。
「別に、教えを乞う気はねぇよ」
「なら君は、どうしてこっち側に来ようとしているんだい？」
「あんたがさっき言った通りだ」
ヒーローだとかヴィランだとか、そういう括りはとっくに捨てている。
俺はただ、俺が一番大事なもののために動いている。
その信念が、覚悟が、原点がヒーローだというのならそれでいい。

その行動が、発言が、在り方がヴィランだというならそれでもいい。

「俺は、小町を守るためにここに来たんだよ」

たった一つ、それだけのために俺はいる。

「それじゃあ黒霧、あとのことは頼んだよ」
「かしこまりました」
二人は短い会話を済ませると、また俺の前にワープホールを用意した。
結局、オール・フォー・ワンは俺に何も言わなかった。
俺は今、雄英生なのか、ヴィラン連合なのかも分からん。
「えっと、黒霧であってるか」
「はい。何か？」
「この霧はどこに繋がってるんだ？」
「私達の拠点です。あなたにはそこで、死柄木弔に会って頂きます」
しばらく、とむら。確か、あのＵＳＪに来た手まみれの男。

オール・フォー・ワンをヴィラン連合のボスとするなら、死柄木はリーダーって感じか。

それとも、生徒か。

どちらにせよ、一度やりあった仲だ。穏便に済むとは思えねぇな。

「ところで、あなたをなんとお呼びしましょうか」

「は？何って、名前知ってるだろ」

「今やあなたは反社会勢力に属しています。それで本名を名乗るのもどうかと思いませんか？」

まぁ、確かに。どうせ死柄木弔ってのもヴィラン名みたいなものなんだろうし。

しかし、ヴィラン名か。ヒーロー名より先にそっちを呼んでもらうことになるってのは皮肉だな。

名前を考えろとか言われるとやっぱり悩む。

アサシンとか没案を使うのもありか？けど呼ばれた段階で俺のクラスメイトに即バレだな。

何も思い浮かばず、俺の知っているヴィランの名前を思い出していく。

しばらくなやんで、ふと思い浮かんだ名がやけにしっくりと馴染む気がした。

「そうだな。――『ＯＮＥ（ワン）』ってのはどうだ？」

「理由を聞いても？」
「『エイト』を名乗れなくなるくらい、色んなもんを捨ててるからな」
八幡（エイト）からいろんな要素を差し引いて、たった一つの信念だけを残した孤独（ワン）。
我ながら、いい呼び名だと思うわ。

理解者

悪の秘密結社アジトと聞けば、まぁ地下とか廃工場とか魔王城とかを想像するんだが、俺が案内されたそこは、知る人ぞ知るような隠れ家的ＢＡＲのようだった。

「……誰だよそれ」

「死柄木弔、彼が比企谷八幡――いえ、ＯＮＥです」

「は？誰だよそれ」

何ゆえ質問が同じなんだよ。

カウンター席の一角に座るロングＴシャツの男。黒霧が呼んだので間違いなく、こいつが死柄木弔だ。まぁ、手とか頭に付けてる時点で気付いてたけど。

死柄木は、つまらなそうに頬杖をつきながらこちらを見ている。

「ＯＮＥというのは彼のヴィラン名ですよ。今日、ここに来ると言ったでしょう？」

「……あぁ、ああ、お前ねぇ？先生が言ってた、面白い奴ってのの」

あの腹黒悪魔、どんな紹介しやがったんだよ。ギャグセンスとかないよ。

死柄木は何を思い出したように手を打つと、立ち上がって両手を広げる。

「待ってたぜ、えっと、ＯＮＥ？まぁ、なんでもいいや。よく来てくれた～」

アメリカンな挨拶でもするかのように近付く死柄木。
そのままハグができそうな距離まで来ると、彼はさっきまで広げていた右手を強く握った。
「いって……」
「死柄木弔！」
そして力の限りそれを振り抜いた。結果、俺は左の頬をぶん殴られた。
勢いを殺せず、壁までよろけて背中を打つ。
その様子を見て叫んだのは黒霧だ。
「何を……」
「そりゃ、ケジメだよケジメ。ほら、俺、こいつにぶん殴られてるし。二回も。だからこれでチャラにすんだよ」
チャラって、襲って来たのお前らだからな？正当防衛、成立するだろ普通に。
わざとらしい大きなアクションで訴える死柄木は、こっちに顔を近付ける。
「二回やられて、一回返してチャラなんだしさ。これって温情だよなぁ」
「……そうだな。お互い、後遺症もないし」
「だよなぁ、話が分かる奴でよかったよ」
上機嫌になったのか、死柄木はさっきまでいた椅子に足を組んで座る。

人殴って、なんか主張して、機嫌よくしてルンルンとかなんだこいつ……。
頭おかしいのか、それとも単にガキなのか。
まぁ平気で人殺すやつと仲直り（？）するのにこれだけなら上々だろう。
ちらりと盗み見ると、黒霧はほっと胸を撫でおろしていた。今のはこいつも想定外か。
「じゃあ、黒霧。あれ、呼んで来い」
「はい、死柄木弔」
あれってなんだよ。というか誰だよ。
返事をした黒霧は、例の如くワープでどこかへいなくなる。
ＢＡＲに残されたのは俺達二人だけ。
いやいや何この状況？犯罪者予備軍どころかもろ犯罪者と二人きりって……。
身構える俺に、死柄木はため息交じりに言った。
「でさ、お前。結局、何しに来たんだよ？」
ごもっともすぎるが、実際のところ俺が答えられることはない。
どうにか首の皮一枚繋がっているのが現状だし、これから何かモーションを起こすにしてもプランは限りなくゼロだ。
割と真面目に聞いてるんだろうけど、俺は抽象的な答えしか持ってねぇぞ。

「何っっーか、俺は呼ばれた側なんだが」
「呼ばれたからこっち側になるヒーローなんているかよ……」

あーそういうことか。先生に説明されて何を疑ってるのかと思ったわ。
こいつは俺が雄英生ってこと知ってるもんな。
雄英生といえば将来を望まれるヒーロー候補だ。
そんなやつがいきなり次の日、わたしヴィラン道、始めますだもんな。そりゃ怪しいし、正気疑うわ。
「別に、呼ばれてヴィランになったわけじゃねぇよ。もともと、そっちに向いてただけだ」
「向いてた?.なんだそれ、ヒーロー高校に入った奴のセリフかよ〜」
手を叩いて笑う死柄木。
そんな面白いこと言ったか?.俺の人生計画的には笑い事じゃないんだけど。
「じゃあなに、お前、俺の下につくってことでいいわけ?」
しばらく腹痛を伴うほどの笑いに耐えていた死柄木は、ようやく深呼吸をして問うた。
こいつは宇宙の帝王か何かなのか。

一応、俺は現状敵連合の一員だ。もしこいつが上司だというのならまぁ、下につくってことになるよな。
「まぁ、一応連合に入るって感じだしな」
「ふ～ん。……まぁ、面白いもん見れるってんなら、いいや。ようこそ敵連合へ～」
色々な言葉を飲み込んだ印象だった。
その行動がやけに似合わなくて、気持ち悪い。
イメージの話になってしまうが、こいつは純粋なのだと思っていた。
純粋だから、嫌なことは嫌だし、言いたいことは言うし、やりたいことは何でもやる。
そんな、ある種の幼児的思考をしていると思っていた。
故に今の我慢ともとれる反応が、とても不気味に見えてしまう。
気にし過ぎか。そも俺の参加がこいつの上司の命令なのかもしれんし、不満だけど仕方ないと考えてるんだろう多分。
「んで、これからどうすんだ？」
「どうって何が？」
「いや、何かすんじゃねぇのかよ」
「まぁ、そりゃするけど。ああ、説明は後。もう一人来るから」
もう一人か。どんな大罪人が来るか俺わくわくすっぞ。

しねぇな。むしろ来ないでほしいし、なんなら今すぐ帰りてぇ……。
それからしばらく、俺と死柄木は無言の時間を過ごした。

「お待たせしました、死柄木弔、ＯＮＥ」

小一時間経って黒霧が帰り、その後ろに続くやつが一人。こいつが、死柄木の呼んだヴィランか。

そいつは黒い服に赤いマフラーをし、鼻の低すぎる顔を布で目元から隠していた。その腰や背中にはかなりの数の刃物が装備されている。マジで何人も切ってきたような、殺人者といって差し支えないような奴だ。

「ようこそ、ヒーロー殺し〜」

「は、ヒーロー殺し……?」

マジかよ。本当に人切ってるし、なんなら人生終わらせてる経験あるじゃん。

一度たりとも会うことはないと思っていたんだが、まさかこんな所で遭遇するとはな。

だらりと両手を下げたヒーロー殺しは、こちらの様子をゆっくりと伺う。

構図で言えばL字のカウンターの一辺、ヒーロー殺しの正面に死柄木が座っており、そのテーブルの向こうに黒霧がいる。

俺は壁の方に移動させた椅子に座っており、三人からは一歩下がった位置取りだ。

何やら剣呑な雰囲気に思えるが、これお互いに話し合いとかできんのか?つかそもそもヴィランってまともに交渉できるやつらってどれくらいいんだろ。

「それで、何の用だ?」

「お前さ、俺らにつかない？」
俺の心配をよそに、商談が始まった。
案外、実はこういう裏の奴同士の会話は上手くいくものなのかもしれないな。
「具体的に、貴様らは何をしようとしている」
「とりあえずは、気に入らないものは潰そうと思うよ。こいつらは、特に」
そういって取り出したいくつかの写真。そこに写っているのは、ヒーローと一部の雄英生徒だった。
こいつ、実は頭悪いんじゃないか？
そのメンツ、この前お前が襲ってやり合った奴らだし。反撃受けて気に入らないとか何言ってんだよ。それこっちの政府だから。逆恨みの逆ギレとか、逆の逆で表じゃん。
というか……。
「……そのリストの中に、そこの小僧が混じっているのは既に捕らえたということか？」
ギロリした瞳は俺に向く。怖ぇ、爆豪とかの比じゃねぇわ。
ヒーロー殺しの言う通り、死柄木の始末したいこいつだけは絶対許さないリストには比企谷八幡の顔があるのだ。
ほんと、拳一発で済んだのが奇跡だなおい。いや、本当に済んだの？
「あ～、そいつはいい。んで、どうだよ？そっちも暴れたいんだろ？」

「悪い話じゃない、と？」
「そうそう、お互いに戦力が増えるのは歓迎じゃん」
一貫して静かなヒーロー殺し。返事はなく、沈黙で奴は返す。
だが、その赤い瞳に俺は答えを見た。
「しゃぁ！」
「ちっ……」
突如として、ヒーロー殺しは死柄木に襲い掛かる。腰にある二本のナイフを引き抜くと、逆手に持った刃物を振りかざした。
反応の遅れた黒霧と死柄木では対応ができない。
その遅れを、一歩分先に動いた俺がカバーする。
死柄木の肩を掴み、個性を発動。俺と死柄木の存在感をかき消した。
悪いが、今こいつらに脱落されるわけにはいかねぇ。ここで共倒れしてくれたらまぁうれしくなくもないが、今後俺は動きづらくなる。
プランこそないが、目的はあるんだよ。
突然の出来事に、ヒーロー殺しは一度後退する。
「それが、貴様の個性か」
「ちげぇよ。つかなんだよお前」

俺から離れた死柄木は、不愉快そうに首を掻く。
同感だ。こいつ、交渉も商談も飛ばして切りかかってきやがった。本当にあぶねぇ奴じゃねぇか。
はぁと、深い息を吐くヒーロー殺し。奴は俺達を少しだけ眺めると、再び構える。
「俺がヒーローを襲うのは、この世界を正すため。貴様らのような、私利私欲のためだけに動く奴らは――もっとも嫌悪する人種だ！」
「黒霧！」
二度目の襲撃。奇襲を受けた後の攻撃に、今度は全員が反応する。
ヒーロー殺しの進行ルートに、ワープゲートを配置する黒霧。その移動先になるであろう壁の方へ、死柄木が手の平を伸ばす。
そして俺は、また死柄木に個性を付与する。
即席ながら最高戦力。これで不可視の破壊をヒーロー殺しにぶつけることができる。
しかし、予想をはるかに超える動きを見せた奴に攻撃が当たることはなかった。
突然現れたワープゲートを難なく飛び越えると、天井で方向転換し、黒霧を切りつける。
そのままテーブルの上で体を捻り、ナイフを投擲。出口用に用意した壁近くのワープゲートの前に斬撃を放った。

大まかなエイムだが、ナイフの先には死柄木の手がある。
死柄木に当たれば俺の個性がばれる。そうなれば次こそ死にかねない。
最悪な展開を避けるため、今度は力いっぱい掴んだ肩を引き、ナイフの延長上から死柄木の腕を離す。
刃物は空を切って地面に突き刺さる。あぶねぇ、紙一重って表現現実で起きるんだな、ぱっと見掠ってたぞ。
肺活量の限界が来た。息を吐き出して個性を解除する。追撃は、ない？
「随分と良い反応をする……」
「……そりゃどうも」
目の合った鬼が俺に向けて言ったのだと分かった。
反応ねぇ。そこそこ高スペックな自覚はあったけど、雄英入ってからはむしろ弱い部類だと思ってたわ。
「だが、それだけだな。速さも力もまるで足りない。所詮は、私欲に堕ちたマヤカシだ」
「さっきから、何の話してんだよお前ぇ……」
またガリガリと首筋を掻く死柄木。
その眼前で、ヒーロー殺しはナイフに付いた血を舐め取る。
空いた右手に新たにナイフを装備し、奴は三度目の臨戦態勢に入った。

通算二回、俺達……って定義したくないが、ともかく俺達は奴の攻撃を捌いている。
無傷とはいかないが、かなりの戦闘力を有しているこいつ相手なら及第点だろう。
その二度の邂逅を踏まえ、奴はどんな攻め方をするか。
地の戦力では負けている。だから先読みで戦うしかない。
そういや、さっきから奴は接近戦しか見せていないな。それが個性の発動条件なのか、あるいは個性の弱点を埋めるための戦法なのか。
どちらにせよ、まともに個性を知らないのは不利だ。
あと、こちらからは攻められないというのも問題だな。
こっちにとってヒーロー殺しは貴重な戦力だ。そうなると危害を加えること自体がマイナス評価。
知らないし、勝てないし、そもそも倒せない。何この無理ゲー。
にしても攻めて来ねぇな。ヒーロー殺し、一体何考えてる？
まぁ、来ないなら好都合だし、考えよう。
この場合、勝利条件はなんだ。
俺たち全員が無事で戦闘が終了すること。
その為に必要な条件はなんだ。
ヒーロー殺しの、戦意喪失。

「……ヒーロー殺し、あんた言ったよな。私欲のために力を使うやつは気に入らないとかなんとか」
「……それがどうした」
「それ、自分自身には言わねぇのかよ。あんただって世界を変えたいっていう私欲のために動いてんじゃねぇか」
「一緒にするな。俺はこの腐った世界を変えようとしているだけだ。真の英雄を守るためにな」
「それが私欲だっつってんだよ。あんた一人の理想と思想を押し付けて、勝手に絶望して、そのエゴを力で実現しようとしてるだけだろ」
「……貴様に、何が分かる」
僅かに、ヒーロー殺しの表情が険しくなった。
「知らねぇよ。あんたが、その世界にも英雄にも敵対する、悪である自覚もないバカなら、俺は何も理解できねぇわ」
「貴様に理解されないからなんだ。それに、俺はとうに真っ当な道を外れる覚悟をしている。貴様に言われるまでもない」
「そうか、ならよかった。あんたと俺らは敵じゃない」
「言ったはずだ。貴様らが気に入らないのだと」

「で、死柄木も言ったろ。気に入らないものは潰したいってな」
「一緒にするなとも言ったはずだ」
ギロりと赤い目を剥くヒーロー殺し。
……これでも怒らねぇか。激高して飛び掛かって来てもいいくらいの準備はしててんだがな。
なら、恐らくこの仮説は合っている。
ここまでの言動から気付いたことが一つある。それは、奴が自らの行動にこだわりを持っていること。
逆説的に戦う理由はこだわり故だ、と思ってたんだがな。こりゃどうも当てが外れたらしい。
なら、なぜ攻撃してくる？
一緒にするな、気に入らない、もっとも嫌悪する人種。なるほど、確かに攻撃する理由としては納得できる。
だがその言葉は、どう考えてもやつのこだわりと合致しない。
やつは全ヒーロー、全世界を敵に回す覚悟をしている。そんなやつが、たかが1ヴィランと1同等に扱われただけで襲い掛かるか？
その行動自体が、やつの理想のために何の益も見出さない、ただの無駄な時間だ。

もし俺なら、すぐに会話を切り捨てて自分の目的に戻る。
そうしなかったのは、何か他の目的があるため――。
何よりさっきから、一瞬たりとも殺気を感じない。
つまりこいつは、本気じゃない。
「俺達を、試したってことか」
「……」
「は、何言ってんのお前」
「もし本気なら、最初の一手でナイフを投擲してただろ。個性不明の相手にならその方が効果的だ」
「た、確かに」
「おい待て。なんでそんな回りくどいことをする必要があった？下手したら返り討ちだぞ」
「そりゃ、自信があったんだろ。三対一でも勝てる自信が」
「っち、なめ過ぎだろ……」
めっちゃ不機嫌だな死柄木。まぁここまで下に見られたらそうなるか。にしても怖い目するわこいつ。
相手を試す。怒ったふりをしてまで本気を出さずに攻撃する理由なんざ、多分これく

らいだ。
仮に的外れだったとしても、こいつにはまだ交渉の余地があるはず。
しばらく黙っていたヒーロー殺しが、ここでようやく口を開いた。
「いい目をするようになった。貴様の目は、覚悟のある者の目だ」
「そりゃ、どうも」
「貴様が言った通り、試させてもらった。貴様らがどれほど本気なのかを」
「意味分かんねぇ、本気に決まってるだろ。最初から、ずっと、冗談でお前なんか呼ぶか」
「死柄木、弔と言ったか。貴様も、どうやら確固たる己があるらしい。形は歪ながら、その芯は本物だろう」
お眼鏡に適った、ってとこか。
ヒーロー殺しは両手の刃物をしまうと、ゆっくりと歩いて床に刺さったナイフを回収する。
あっぶねぇ……。もし奴が戦闘狂で、ギリギリの勝負を楽しみたい系の敵だったら詰んでた。
小町の安全のためには、あの化物の機嫌を損ねられない。
それはつまり、その直属の部下であろう死柄木、ひいては敵連合を守らなければならないということになる。

まったく、俺はなんでこんなことしてんだよ。
ナイフを鞘に納めると、ヒーロー殺しは振り向く。
「俺はステイン。紛いものを粛正し、英雄があるべき世界にするために生きている。貴様は、誰だ」
ヒーロー殺し、ステインの目は俺を見ている。
ごめん、前言撤回していい？世界を変えるとか、ヒーローを粛正とか話が壮大過ぎて理解不能だわ。
死柄木弔の行動原理は、この世界を壊すこと。
ステインの行動原理は、この世界を正すこと。
では、比企谷八幡は？
……いや、その問いはおかしいな。
「俺は、ＯＮＥだ」
ＯＮＥの行動原理は、小町を守ること。
ただ、それだけだ。